東京立正女子短期大学紀要

第15号

目　次

視覚の情報処理
――より豊かな物の見方を求めて――……………………………田　島　富美江（ 1 ）
効果的な外国語学習に関わる諸要因の研究
――情意的要因研究の概観――……………………………………神　山　正　人（ 21 ）
スタインベックと笑い
――*Tortilla Flat* を中心に――………………………………深　沢　俊　雄（ 39 ）
バーンズのコローデン…………………………………………………難　波　利　夫（ 50 ）
達成結果についての社会的評価……………………………………飯　田　宮　子（ 67 ）
闇への回帰
――宮沢賢治「ひかりの素足」論――……………………………石　川　教　張（110）
矢祭町念仏和讃資料…………………………………………………紙　谷　威　廣（142）
《報告》 (1) 校歌発表会……………………………………………………………（ 88 ）
(2) 紀要研究例会…………………………………………………………（ 85 ）
《編集後記》 ………………………………………………………………………（ 84 ）

1987

東京立正女子短期大学

視覚の情報処理

――より豊かな物の見方を求めて――

田島　富美江

序

視覚的情報は，物事を具体的に表現しているから理解が容易であるということを，文字通り解釈してよいのだろうか。また，本当に物事を具体的に表現しているだけなのだろうか。朝日新聞の社会面に，「わびしい食卓に飽食大国怒る」という見出しのもとに，下のような写真が掲載された。「大家族」というテーマで構成されたカレンダー（ユニセフ発行）の中の写真であるらしい。われわれが，この種の視覚情報に接した時の反応は個々それぞれに多様である。この写真の表面上の情報は，たしかに空のお櫃がちゃぶ台にのり，魚の切り身1つの食卓風景であって，昨今の日本の食事情とは非常に異なっている。われわれはある特定の物や事柄に対して，動機づけや構えがない場合，その視線は

わびしい食卓に飽食大国怒る

ちゃぶ台の中央に空っぽのおひつ、おかずは魚の切り身一品――ユニセフ（国連児童基金）の一九八六年版カレンダーに、こんな日本の食事風景＝写真＝がカラー写真で登場。「時代錯誤も甚だしい」と日本ユニセフ協

空のおひつに魚の切り身

会（東京）に抗議が相次いでいる。

ニューヨークの本部が毎年作り、売上金を恵まれない地域の子供たちの援助に使っている。今年のテーマは「大家族」。約一万部が同協会に送られ、一部千八百円で発売中。

ユニセフのカレンダー

この写真、撮影場所も時期も不明。昭和三十年代とみられ、「これが現代の姿と受け取られると恥ずかしい」というのが抗議の声。日本の拠出金千四百万ドル（約二十五億円）。経済大国ニッポンの面目の問題か。

図1　朝日新聞，1986年3月11日

視野の中のもっとも顕著な部分に引かれるのは極めて普通のことであり，特に「大家族」というテーマが付いていれば，何人もの家族のメンバーが食卓を囲んでいる情景が，先づ目に入るのは当然といえよう。何故ならば，テーマは1つの大きなコンテクストの働きをするからである。しかしながら，それだけをもって「これが現代の姿と受け取られると恥かしい」（新聞記事の中より）と抗議するのは，余りにも単純で解釈の貧しさを露呈していると思われるのである。

これに対し，その数日後同じ新聞の「声」欄に，前の写真とそのコメントに対する大要次のような投稿がのせられていた。「この写真は恥かしいどころかもっと違った面がある。きれいに片づいた部屋，窓ぎわの植木鉢，玄関のオートバイ，そんな中でたしかに貧しい食事であるかも知れないが，家族全員がおみおつけも，つけものらしい蓋物も並んだ食卓を囲み，父親は子供に魚の骨をとってやっている。どれをとっても温かい。これぞ日本の家族であると胸を張って言いたい。」と。これは最初の「…恥かしい」という意見とは対象的に，1枚の写真を何と豊かに読みとっていることだろうか。

この1つの視覚的情報をめぐり，相対する2つの処理のしかたが生じたことを紹介することにより本稿の糸口とし，豊かなものの見方を養うためにとるべき可能な方向を探りたい。焦点は視覚の情報処理であるが，本論ではしばしば上述の2つの処理の問題に立ち戻り，また言語の情報処理との比較において論をすすめることとする。言語的情報とは，書きことば話しことばの両方を含め，視覚的情報とは，主として写真や絵の類に限定するが，われわれの日常生活で視野に入るものを含めることもある。

I．心的過程の高まり

スタンフォード大学のターマンは，ビネー・シモンのテストを改訂して作った知能テストの中で，子供に絵を分析させる問題を取り入れた。子供がどの程度推論するかを調べるためのものである。そして結果は次のような3つのグループに分けられた。

(1) 具体的事実だけの模写（例えば，犬がいる，人がいる，など）

(2) 具体的な事実の情景模写（例えば，犬が走っている，など）

(3) そこには明確に表れていないが，絵に描かれた事柄に関する自分なりの解釈（例えば，この人は食べるものがない，犬は森の中をその人のために食物を探している，など）

教育の目標の１つである抽象的概念へ到達させるためには，グループ(3)のような推論を展開させて，物事を上手に，しかも適確に判断し，その推論をさらに高度なものにして創作的な想像（ Creative Imagination ）へと導いていくことが重要である。デール（ Dale, E. 1957）は(1)から(3)への段階的な移行を「心的過程の高まる段階」と呼び，ここでの指導の重要性を強調している。

心的過程を高めるためには，先づ具体的経験の過程を経ることが必要な条件であるが，われわれは言語的あるいは視覚的情報に接したとき，その具体的経験以上に心の働きが進んで行かない状態をしばしば見聞きすることがある。例えば，映画を観た場合に，その筋書きしか辿ることができないのは，ターマンの分析の(2)の段階を越えていないし，序の部分にあげた写真を「…恥かしい」と判断するのは，情景のすべてが目に入っていないことを証明するもので，(1)の域さえ脱していないことになる。判断の下し方が貧弱であると述べたのは，情報を受け取る側に，積極的な心の働きがみられないからである。

これに反して投稿者は，それなりに写真を充分に見てある判断を下している。それは際限もなく広がった空想ではなく，テーマを中心に一貫性がみられるため，かなり適切な推論へ心的過程の高まりがみとめられると判断してよいであろう。われわれが物事を観察する時には，このように高い心の働きが必要であって，その働きを経て，高い推論，豊かな概念形成へと達するものであると考えることができる。しかしながらこれは，意図的な指導なくしては到達することは不可能であろう。

Ⅱ．言語的情報と視覚的情報の特徴

心的過程を高めるためにもっとも必要なのは，言語的および視覚的情報のそ

れぞれの特徴を知ることであるが，ここでは両者の対立的な一般論を簡単に述べることに止めたい。何故ならば，視覚的情報には筆者が修正したいと思う部分があり，それは本稿のⅧにおいて明らかにする予定だからである。

言語的情報は書かれたものもあるが，本来は聴覚的であり，それが意味する対象とは全く異なったものである。その表現形態は直線的（sequential）で，一度に複数の事柄を情報として提供することは不可能である。しかしながら，具体的な内容の事柄から抽象的な事柄まで表現することができ，その意味で言語は非常に多義的であり，受け手はどのようにも解釈できる部分がある。言語的情報の一部は内的イメージに変換することが可能である。これに反し視覚的情報は空間的（spatial）であり，一度に多くの事柄を伝えることができるが，一般的に述べるならば，具体的な内容の事柄しか伝えることができない。

以上のことをより明確にするために，同一内容の材料を1つは言語化し，1つは視覚化して，それぞれを情報として送り出した場合の受け手の処理過程をみてみよう。この場合，聴覚や視覚で受けとめた情報をすべて理解できるという理想的な状態を想定して述べるならば，言語的情報は，意味の単位ごとに逐一直線的に処理がすすんでいくのに反し，視覚情報は，主として物体やある形をもったものの平面的な配置であるから，一度に処理することができる。下に示した絵とその右側の文を使って説明するならば，「入口の正面の壁には」の部分の処理は，それまでに読んだり聞いたりして理解した意味内容をもとにし

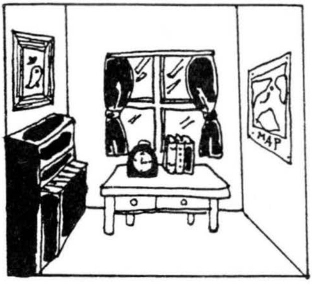


図2
メアリの部屋はあまり大きくありません。入口の正面の壁には窓があって，その下には机がおいてあり，そこに数冊の本と時計がおいてあります。左側の壁ぎわにはピアノがあって，その上の方には絵が飾ってあります。また机の右の壁には地図が貼ってあります。

て，その部分だけの処理が行なわれるのであって，「窓があって」以下の部分の処理にはまだ至っていない。すなわち，同時に幾つもの情報を処理することは不可能なのである。しかしながら絵の方は，厳密に言えば視線の動きなどのために，時間的に僅かなずれはあるが，ほとんど同時にすべての部分の処理ができ，ことばで再生することも可能である。

では，日常生活におけるこの2種類の情報処理はどうだろうか。基本的には上述の場合と同様である。しかし人間には，物事の好き嫌いがあり，自分にとって興味のないものに対しては，ある時は理解が不充分となり，またある時は見逃す――情報として感覚を刺激せず，その情報自体が目や耳に入らないこと――傾向がある。特にこの傾向は言語情報の処理より視覚情報の処理の際に強く現れるのである。図1の写真がもしことばであったならば，たとえ情景模写にとどまるとしても，大家族の食卓の模写に続き，「…その向うの窓ガラスの内側には，植木鉢がいくつか置かれ，その左側の土間にはオートバイがある…」というような表現が挿入されて，大家族とは直接関係のない――とはいえ，これはVで述べるように，背景として大きな意味を持つのであるが――事柄にまで言及される。したがって，ことばによる表現の場合には，それがすぐ忘却されるかどうかは別として，情報の受け手は，植木鉢やオートバイの存在については順次脳を刺激し，自分なりのイメージの中にそれらのものを配置することができる。

ところが視覚情報は，1度に提供する情報量が，ことばとは比較にならないほど多量である。図1の写真には5人の人，食卓，その上の食器類，植木鉢，障子，ガラスなど数えあげればきりがない。また，われわれが前方に目をやっただけでも，視野の中に多くのものが見えるであろう。しかしその写真や視野の中のもののそれぞれが1度に同じ強度で視覚を刺激するとは限らないのである。ある物は全く無視され，また視線が行っても視覚を刺激するまでには至らないものもある。教育の現場で，教師の指導のもとに使用する視覚教材とは異なり，カレンダーのような日常生活のアクセサリー的性格のものであれば，なお一層その見方は乱暴になるのが普通であって，しばしば多くのものが見逃され，その存在価値を全く失ってしまうのである。要するに，われわれの視知覚

は通常ごく僅かなものしか捉えていないのである。以上のことを，それぞれの情報に分けてもう少し詳しく検討してみよう。

Ⅲ　言語の情報処理

われわれの言語の情報処理は，脈絡（context）依存の傾向が強いといわれている。この場合脈絡とは，言語過程の中で，それまでに理解したり，推論に達した意味内容のことである。脈絡には他のことばや，外界の視覚的要素をはじめ，心情的な興味や必要などが複雑に作用し合って１つの枠組みを構成し，それが次の言語情報に対する反応の範囲を狭めて，反応しやすくしてくれる。そして，それをもとにしてさらに新しい枠組みを構成しながら，次の言語情報の処理へとすすんでいく。したがって意味の理解を早めたり，意味の予測をつけることさえ可能にするものである。

しかしながら脈絡が真に効果を発揮するのは，「適当な脈絡」が構成された時だけであり，不適当な脈絡構成は，誤解や不可解の原因になることにも注意しなければならない。ここに，ブランスフォードとジョンソン(Bransford & Johnson 1973)の興味ある実験がある。被験者に次のような難しいというより判かりにくい文を与えて再生させるものである。

> 手続きは非常に簡単である。まず，物をいくつかの山に分ける。もちろんその量によっては，１山でもよい。設備がないためどこか他の場所に行かなければならないとしたら，それは次の段階であり，そうでなければ，あなたの準備はかなりよく整ったことになる。大事なのは一度にあまり多くやりすぎないことである。つまり，一度に多くやるより，むしろ少なすぎる位の方がよい。はじめのうちは，この注意は大したことではないと思われるかも知れないが，もし守らないと簡単に面倒なことが起ってしまうし，お金もかかることになってしまう。最初，この作業の全工程はまったく複雑にみえるかも知れない。しかし，すぐにこれはまさに人生のもう１つの面となるであろう。…（p. 400)

実験文はまだ続くのであるが，１つのグループにはこれが「衣類の洗濯」を話題にしたものであることを話すと，その理解度は，話されなかったグループの２倍もよく覚えることができたという。これは衣類の洗濯という概念が脈絡

を構成し，実験文をその範囲内で処理することを可能にしたものである。

彼らのもう１つの実験がある。「地上40階から平和行進を見物する」という題で次のような実験文が与えられた。

> それは息をのむような光景であった。窓からは下の群衆がよく見えた。その距離から見るとすべてのものが非常に小さく見えたが，それでも色とりどりの衣装がよく見えた。みんな整然と同じ方向に進んでおり，大人に混って小さな子供達もいるようであった。着陸は静かに行なわれ，幸運にも，周りの雰囲気 (the atmosphere) はフォーマルウェア (special suits) を着なければならないような固苦しさはなかった。最初はかなりざわざわしていた。しかし…（p. 412）

この題を脈絡として解釈すると，「着陸は…」はその脈絡からはずれ，以下の文章は理解が困難である。しかし，別のグループに「人類の住んでいる惑星への宇宙旅行」という題を与えたところ，正しい再生者は前の題では17名中３名であったのに対し，後の題では17名中９名という結果を導いたという。

２番目の実験には大きな意味があり，１つの文に２種類の題を与えることにより，２種類の解釈が可能だということである。またその脈絡によって，単語が指示する対象も異なってくるのである。すなわち，「光景」はどこから眺めた光景か，「窓」は建物のものか宇宙船のものかが変ってくる。この２つの実験例からも判かるように，れわれの言語理解は脈絡依存的であり，適切な脈絡は理解を促進する作用があること，そして不適切な脈絡，または脈絡構成が適当でないと，文章理解が不可能となる。しかしその反面，文章の不明な部分を明確に浮き彫りにしてくれるのである。

Ⅳ　視覚の情報処理

前にも述べた通り，特別な必要や興味がない限り，われわれの視線は視野の中のもっとも顕著なまとまりのある形に引かれるものである。それは，われわれの視知覚が，既知の経験をもとにして，視野の中に物や物体，見なれた図の形をしたものを読みとる性質をもっているからである。その基礎となる理論は「図」と「地」の関係である。有名なルビンの「酒杯と向い合う２つの顔」（図３）を見た時，正常な視知覚には先づ「図」として酒杯がとびこんで来る

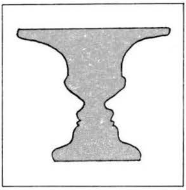


図3

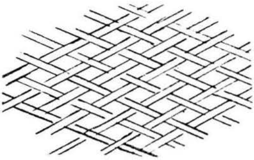


図4

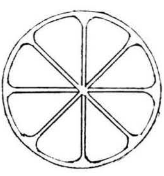


図5

であろう。そして，白い紙の空間は顔として意識されるのでなく，酒杯に対する「地」，すなわち背景として処理されてしまう。また，図4の間隔の狭い2本の線からなる模様は，糸か竹で編まれたものと見え，中の菱形は普通，形としては意識されないであろう。しかしながら，図5では，接近した2本の線からなる模様というよりは，広い3角形様の形が図とみなされ，細い空間は地の役割を担うものとして，通常目にとまらない。このように，われわれがどれを図とみなし，どれを地とみなすかは，受け手の精神状態や周囲の条件に，かなり影響を受けるものだといわれている。

次に，上のような図形の認知ではなく，日常生活での視知覚と「図」と「地」について考えてみよう。メッツガー(1953)は，街角に見える空の形，講堂を埋めている人の頭と頭の間から見える壁の形などの観察から，次のように述べている。"(空の形や壁の形は,) 正しくはっきりと我々の目の中に模写されているのだということを――にもかかわらず，空の形に対しては，我々は盲目であるということを――明確に知らねばならない。このことは，「あいだの空間」あるいは「背景」の印象を与えるもののすべてについてあてはまる。眼の中に模写された形のうちで，我々が実際に見ることができるのは，「図形」とか，「物」とか，「立体」とかの印象を与えるものだけに限られている。……あるものが何かのはずみで「あいだの空間」の印象を与えると，たとえ，眼の前にあっても，それは消え去ってしまう。したがって，たとえば，取り散らかした机の上で1本の鉛筆が，2冊の本にはさまれた，狭いあいだの空間のなかに横たわっていると，その見えるはずの鉛筆が姿を隠して，どうしても見つからな

い。……”（p. 14）これは，物の見え方の特徴を明確にとらえている。2冊の本の間の鉛筆とは，図となる2冊の本の間にぴったりはまってしまうから見えなくなるのは理解できる。

しかし，われわれの視覚は，もっと明確な物体にすら盲目であり，Ⅱで述べたように日常生活では極めて僅かのものしか見えていないこと，そして，必要や興味がある場合には，その傾向がさらに強く現れることを知らねばならない。例えば，本棚から自分が欲しいと思っている本を見つけようとする場合を考えてみよう。本の大きさ，背中の色，タイトルの字体などがわかっていれば，いかに本の数が多く乱雑に置かれていても，それを探すのは極めて簡単である。しかしながら，自分が眼をやった本のタイトルなどはおろか，それが見つかった時の両隣の本の名あるいは色さえ思い出せないであろう。この場合，自分が必要としている本のあらゆる角度からのイメージが，「図」として心の中に描かれ，それと一致するもの以外はすべて「地」の働きをなすものであるから視覚を刺激しないのである。

以上の例からもわかるように，視覚は視野に入ったものを，すべて同時に処理することは不可能であり，脈絡を与えられると，それに関連した部分のみが「図」として強調され，それ以外の部分は，たとえ物としての鮮明な形をもっていても，「地」の中に埋没してしまうという現象が生起するのである。したがって，絵の読みとり方（picture reading）としては，不適当な脈絡であれば与えられない方が，受け手独自の解釈がなされるし，読み方が豊かになるのではないかと考えられる。例えば，図1では「大家族」が脈絡の働きをしていて，それによって視野が狭められていることは事実といえよう。これが，「日本人の生活」というような題であったら視野はもう少し広がって，「日本人は，家の中では履物をはかずに床に坐る生活をしている。また食卓は貧しくとも身近に花を置き，精神的な豊かさがある……」というような推論も可能であったかもしれない。そして，もっと適当な題であれば，さらに視野は広がり，写真家の伝えたいことが充分に伝わったに違いないと思われるのである。

ここに，視覚の情報処理が言語の情報処理と異なる大きな特徴があるといえる。受け手自身が，自己やそれを取り巻く周囲の条件にしたがって，「図」と

して取り上げた部分以外に視線が伸びていかないところに，絵の類の読みとり方の貧しさが生じる根本的な原因があると考えられるのである。したがって，この貧しさを解消するためにとるべき第一段階は，脈絡に左右されず，「図」を見ると同時に「地」にも視野を拡げ，比較的短時間のうちに視覚的情報の全体像をとらえる方向にすすめるべきである。しかし，メッツガーも述べているように，“普通は，我々の視線は，本来，物に対して向けられるものであり，あいだの空間や，空虚な周囲に視線を向けるなどということは，学習してはじめてできること”（p. 15）である。1枚の絵や写真の中に「図」と「地」を同時に認知することは，一般的に非常に困難であり，かなり意識的な訓練が必要となるのである。ここに，視覚情報の処理のしかたに対する指導の重要性が，改めて認識されるのである。

V　心的過程への移行

われわれが一度に処理することのできる情報には限界があるのではないか，とミラー（Miller, N. E. 1957）が学習過程の面から疑問を抱いて以来，情報理論の進歩により，限界のあることが次第に明らかにされてきている。その1つがⅣで述べた視覚的情報の処理においてである。それは，明確な形をしたもので視野に入っていても認知できないものが数多く存在することからも容易に理解できる。図4および図5のように，視覚情報の特徴の説明として用いた図形に関しては，「図」と「地」を同時に認知することは，メッツガーも述べているように，たしかに困難である。しかしながら，何らかの指導を行うならば，絵や写真，すなわち，日常的な視覚情報に関しては，図形を眺めるほどの困難さはないと思われる。何故ならば，「図」と共に「地」の存在が認知できる故に，その「図」の解釈に1つの枠づけがなされるのであって，視覚情報においては，「地」が真の脈絡となって，「図」の情報処理に大きな役割を果すものなのである。

芸術作品といわれる絵画の鑑賞などでは，背景の役割は重要であり，背景と共に観ることによってその芸術的価値が決定するものである。したがって，物

の見方の貧しさとは，視野の中の認知できない「地」の部分を，見逃したまま解釈へとすすむところに1つの原因があると考えられる。自然に視覚を刺激する「図」の部分だけを取り上げて，物事の判断に至ることは避けるべきであって，それを越えなければ，豊かな物の見方へと進展させることは不可能である。それを越えるためには，Ⅳの終りの部分でも述べたように，視野の中でも背景の中に埋没しているものを，積極的に見ようとする努力が重要な条件である。そして，周囲の条件にもよるが，それをあくまでも「図」に対する「地」とみなしたり，あるいは，「地」の中に見えてきたものを「図」と見なおしたりすることによって，視覚情報の全体像を把握することが重要なのである。

ところで，今まで見えなかったものが見えるようになった，というだけでは，物の見方が豊かになったということはできない。ここまでは，比較的広範囲にわたって物が見えるようになったという基本的な段階を経ただけである。すなわち，本論の冒頭に述べたターマンの，絵による推論の分析における(2)の段階を経ただけにすぎないのである。あとは，それが表現している事柄を，理解や推論へと発展させる過程を辿らなければ，(3)の段階，すなわち，心的過程を高めていくことはできないのである。

これは，ⅥおよびⅦの部で詳しく述べることになるが，具体的に見えた部分を基礎として，見えない事柄を抽出し，受け手独自の解釈をしていく能力を養うことであり，この段階に達すると，視覚の情報処理は，言語の情報処理と大して異なるものではないことが明らかになって来るのである。何故ならば，両者の情報としての相違点を除くならば，視覚情報の裏にある意味を解釈することは，「書物の行間を読む」というプロセスと共通するところがあるからである。次の章では，宮崎（1985）の視点論を中心に，両者を比較検討しつつ，この点について考察していきたい。

Ⅵ　視点の移動
——その能動性と受動性——

言語的にせよ視覚的にせよ，われわれが情報を受け取り，理解や推論へと思

考を高めていくプロセスは，それらの情報に対し視点を移動させることにより達せられるという。ここで「視点」とは何かについて明らかにしておかねばならない。宮崎（1985）は，視点については2つの意味があり，1つはスナップショット・モデルと呼ぶもので，“どこを”見ているかという時の“どこ”を指す場合であり，2つ目は“どこから”見ているかという時の“どこ”を指す場合であるという。この2つは密接な関係をもつものであるが，2番目の“どこ”を指す場合にのみ，彼は「視点」ということばを用いている。さらに彼は，“見るということは基本的には1つの視点から対象を眺めること”（p. 4）であるが，視点を移動しつつ見るという行為は，形とかその“特徴がどのようなものかを知るためにではなく，それが一体何か（reality）を知るために方向づけられた活動にほかならない。たとえば，日常私たちが，「それは一体どういう形」と問うときでさえ，スナップショット・モデルの言うような形を問うているのではない。……むしろ，それがどのような連続的変化の途上に位置づけられるかを知ろうとするのである。このように，視点は，本来動的なものであり，たとえ静的な視点ですら潜在的には動的と考えざる得ないのである。”（p. 56）と述べて，視点の基本は，動的であることを強調している。

図1に戻ってみよう。最初に，食卓風景に視線が引きつけられ，そこだけに留まっている場合があるかも知れないが，それは上述の1の意味の視点，すなわち，静的な視点ということができる。しかし，視線が次第に，植木鉢やオートバイ，父親の動作などに流れていき，最後に写真の全体像をとらえられるならば，視点――見る位置――は動いていないような印象を与えるが，微視的な見方から巨視的な見方，すなわち，近から遠への視点の移動であり，2番目の意味の視点，すなわち，動的な視点に当てはまると考えられる。

われわれの物の見方を観察すると，単に1つの視点からだけ対象を眺める場合は極めて稀であり，ほとんどの場合頭を動かしたり，首をまげたり，時には後にまわって見ることさえある。そうすることによって，これまで見えなかった部分が見えてくるようになるのである。また，実際の行為としてそれができない時は，心の中でそのような行為をすることがある。例えば，人物の後に一部だけ見えている木は，その形全体を自分なりに想像することはできるし，そ

こに現われている具体的な物の配置や，人物・動物の目や手の表情から，形にはならないが実際に多くの抽象的な事柄を読みとることができる。これは，心の中で視点を移動させて対象を眺めることにより，そこにはっきりと現われていない事柄を理解したり，推論していく過程，すなわち，イメージを生成していく過程であるということができる。

この視点の移動の理論は，視覚を通って入って来る情報のみに限らず，言語の情報処理にも通じるものであり，詩や文学作品の理解やイメージ形成の指導にも，大きな効果をあげている。宮崎は，詩や文学作品の世界を仮想的世界と呼び，その中での視点の移動に，受動的なものと能動的なもののあることを指摘している。そして，単に作者が設定しておいた視点の移動にそっていくだけでは，読み手の仮想的世界は豊かになってはいくが，この視点の移動は，いわば受動的なものであって，能動的に視点を動かすことをしなければ，仮想的世界をより豊かにしていくことは不可能であるという。これは読み手が，その作品の中に明確に表現されていない情景や人物像を，作品の中の他の部分を手がかりとして推測し，自分なりの意味を創り出す想像の世界であると述べている(p. 119)。

これが能動的視点の移動であって，読み手自身がイメージを形成し，さらに深い読みへと到達していく過程であるということができる。

Ⅶ　能動的視点の移動と言語の情報処理

——二つの授業例を中心として——

宮崎は，斉藤喜博（1970）の小学校での授業例（小学２年・国語）を取りあげ，能動的な視点の移動について，さらに解説を続けている。教材は，「島」という新美南吉の詩である。

島　　　　　新美南吉

島で，或(ある)あさ，

鯨がとれた。

どこの家でも，
鯨を食べた。

ひげは，呻りに
売られていった。

りらら，油は，
ランプで燃えた。

鯨の話が，
どこでもされた。

島は小さな，
まずしい村だ。

先づ，教師が一度読み，詩の中のいろいろな情景を子供達に自由に想像させる。子供達は次第に，架空の世界へ入りはじめる。次いで教師が，島の大きさをきくと，子供達は両手でその大きさを具体的に示そうとする。したがって，子供達にとって，その島はそばにあるのではなく，遠くにあることを示している。子供達はすでに，それぞれに仮想的世界を創る。教師は，“みんなそのくらいに見えたんなら，島はそばではなく，遠くのほうに見えてきたんだね”という。このことばにより彼らは，自分達が島を遠くから眺めるという仮想的世界を生成し，その中の一点に仮想的自己を派遣していることに気づく。その位置から，仮想的世界の中を動いてみる。島に近づく。そこでの木や，道や畑はどうだろう。上陸してみる。浜辺の様子はどうか。島の人々が浜に出て，皆で鯨を解体しているだろうか。さらに進んで，家の様子や，軒数等々について，教師から多くの問いが出される。仮想的自己を，島の遠くから，島に近づき，少しづつ島の奥の方に動かしていくことにより，作品の中に直接表現されていない部分を多く含んだこの仮想的世界の中の，いろいろな情景に対面していき，教師の側から多くの問いが系統だって生成されることが可能になる。これらの問いに答えながら，子供達は情景についての想像を広げていく。これらの問い

に対する答は，作品の中にははっきり表現されていない場合が多く，子供達は他の部分を手がかりにしたり，自分のこれまでに蓄積された知識構造からよびおこした知識で補いながら，自分自身で仮想的世界を豊かにしていかなければならない。したがって，子供達の答は，唯一絶対の正解といったものは存在しない。その限りで，読み手は各自に自由で多様な想像を楽しむことができる。しかし，けっして勝手気ままな空想になってはならず，ある範囲内での必然性をもっていなければならない。(pp. 120－123)

以上，宮崎が斉藤の授業例をとり上げて述べた能動的な視点の移動による情景理解の深め方を，ごく簡単に紹介した。豊かなものの見方というものは，具体的に表現されていない事柄にまでイメージ性を豊かにしていくことではあるが，それは何の制約もなく，次々とイメージを広げていくことではなく，一貫性がなければならないことを強調したものである。

イメージを育てる方法としては，斉藤のやり方だけではなく，主として国語教育の分野で多くの研究がなされている。その中の1つ例として，武田（1973）は，「大造じいさんとがん」の授業の中で，「心をうたれる」とか，「ただの鳥に対しているような気がしない」というような，抽象的表現の解釈を取りあげた。「何故心をうたれるのか」，「何故ただの鳥に対しているような気がしないのか」と，直接的な質問をしても，返って来る答は，文章を読みさえすれば誰でも思いつくような素朴な答――「じたばたしない」とか，「自分の危険を知りながら，大敵にとびかかっていく」（p. 12）というような――だけである。このような読みは，深い読みに達したとはいえず，深い読みへと指導するためには，具体的な形をとった行為が，どこかに現われているはずであるから，それを探した方が，単にことばで追求するよりも，理解の出発点としては，はるかに具体的で考えやすいという。そこで，文章の中の，上にあげた抽象的表現の少し手前にある「手をのばす」という具体的行為を取り上げ，教師からの様々な発問によって，その部分の鮮明なイメージを描かせる。子供達は，自分の描いたイメージを媒介としながら，教師から出される問いに答えることにより，次々と自分なりのことばを紡ぎ出しはじめる。さらに，教師独自の解釈を基にした発問を重ねて，子供達の感情にゆさぶりをかけると，目標としていた抽象

的な部分も次第に鮮明にイメージ化され，さらに，それをことばで表わすことができるようになるという。(教師と生徒の問答については，実際に武田の著書に触れないと，充分な理解は得られないかも知れない。) これは，宮崎や佐伯（1978）の言う仮想的自己を，その行為をしている人物に投入し，その人物の目から物を見る視点の移動である。

学校におけるこのような指導は，教師の主観が多分に入るものであるが，詩や文学作品の深い読みに至らせるためには，必要欠くべからざる過程である。このような読み方が，教室外での読みの活動に転移することは望ましいことである。それは，視点を能動的に移動させながら，自問自答する過程を辿ることであり，素朴な答に終らせることなく，読み手自身で抽象的な部分のイメージをより豊かにしていくことが重要であると考えられる。

Ⅷ　視覚的情報の抽象性

能動的視点の移動は，視覚の情報処理の際にも極めて重要である。視覚的情報はことばと異なり，物事を具体的に表現するものであるから判かりやすいという考え方は，改めなければならない。単にある具体的概念を理解させるためのもの，という観点に立つならば，具体的に視覚情報化されたものは，たしかに意味をもつであろうが，それは，理解させる手段以外の何ものでもない。しかしながら，何かを伝えようとする意図をもって描かれた絵や写真などは，単なる理解のためのそれと同種類のものとして扱うには，余りにも複雑である。

文学作品の深い読みに至らしめる過程は，先づ，ことばに表われた具体的な行為を見つけ出すことであった(武田)。その行為をはっきりとイメージ化して，そこから視点を移動させ，問答しつつ，明白でない部分を次第に鮮明なイメージ化へ，さらには言語化へと辿る過程であった。

絵や写真が表現する意味をより深く読みとるということは，上述の文学作品の処理の仕方と何ら変るところがないと言えるであろう。表面に具体的な形となって表われた部分，すなわち，絵や写真となったものを手がかりとし，そこから作者が訴えようとした――けれども表面に具体化されていない――と思わ

れることを読みとっていこうと努力することは，より高い心の働きであり，心的過程を高めるプロセスである。この過程を経ることが，より豊かなピクチャーリーディングへと導くものであると考える。その意味で，視覚情報は言語情報と同様，抽象性が高く，その処理は必然的に「書物の行間を読む」のと同じプロセスを辿ることが求められるのである。IIにおいて，視覚的情報の一般論を修正する必要があると述べたのは，この点においてである。

IX 視覚の情報処理の受動性

これまで述べてきたように，高度な抽象性をもった視覚情報を理解し推論を高めていくためには，言語の情報処理に対するような指導や訓練が必要であるが，そこには，高度な推論へ導くことをしばしば妨害する大きな原因があることに注意しなければならない。それは，視覚的情報というものは，ある点までは能動性を必要としないことなのである。その非能動性が，心的過程を高める段階への移行の原動力とならず，ただ視覚的情報を受動的に見るだけに終らせてしまう傾向が強いと考えられるのである。

言語的情報に関しては，視点の移動という観点に立つならば，作者の設定した視点の移動にそっていくだけでは受動的である。しかしながら，イメージ形成の観点に立つならば，作者の意図にそってイメージを形成しながら読みすすむことは，必ずしも受動的でなく，能動的な作業であるということができる。その意味で，宮崎が「(受動的であっても) 読み手の仮想的世界は豊かになっていくが……」と述べているのは理解できる。そしてこの場合，同じ文章を読んでも，読み手が全く同じイメージを形成することはあり得ず，各自それぞれが，それなりのイメージを独力で創造しているのである。その過程は，能動的な脳の覚醒状態を保持しなければ，作者の視点にそった理解さえ不可能になるのである。

これに反して，視覚的情報の場合には，その段階ですら，受け手は独自に能動的なイメージ形成の過程を経ていない。そして，他人のイメージによって作成された画一的な映像を視覚的情報として与えられるわけであるから，その映

像の中に，受け手の問題意識を刺激するだけのものがなければ，見方は受動的になる傾向が強いのである。

視点を移動させて，「図」である食卓風景から「地」となるそれ以外のものまでが見えるようになることは基本的な条件であるが，たとえ見えたとしても，それは，自分の力でイメージ化したものでもなく，宮崎の言う「受動的な視点の移動」の域を脱していない。すなわち，作者（この場合は写真家）の設定した視点にそって移動したというだけにすぎないのである。重要なことは，そのあとで受け手自身が，さらに能動的に視点を移動させることにより，そこに表われていない事柄を自分なりに汲み取って，まとまりのある深い読みへと心の働きを高め，その抽象的な部分を最終的には言語化することができるような状態にまで引き上げることであると思う。

結　び

1つの写真をめぐって，偶然にも2つの正反対の意見が現われた。時代錯誤もはなはだしい，といって抗議するのも間違いではない。しかし，その判断は余りにも視野が狭く，高い心の働きが欠けているように思われるのである。学校において，ピクチャーリーディングの指導などは，名画といわれる芸術作品を除いては，恐らくなされていないであろう。視覚的情報といえども，言語的情報と同様，抽象性が高いことを筆者は強調し，表面に出ていない事柄を推論していく過程を大切に育てていく必要性を感じるのである。

先づ，視覚情報の全体に視野を広げ，「図」のみならず「地」を含めて全体が見えるようになること，そして次に，そこに表われている具体的な事柄を出発点として視点を能動的に移動させ受け手のそれぞれが，統一のとれたイメージ形成へと心の働きを高めていくことが，豊かな物の見方に通じるのではないだろうか。

一見，余計なもののない，それでいて植木鉢まで置かれている部屋に，家族が揃って食事をしている。その中の1人である男性に，仮想的自己を派遣してみることはどうだろうか。1人の子供が自分の箸の先を見て，茶碗に魚を入れ

てくれるのを待っている。父親のその行為は，子供は箸で魚を食べることが下手だから，とそんな気持だけではない筈で，そこには父親の子供に対する気持が充分に伝わって来る。あるいは，女の子になったつもりでその目で周囲を見渡してみることも可能である。頭のあげ具合から判断して，「お兄ちゃんはいいなあ，お父さんにお魚をとってもらっている」と，一寸羨ましげな表情をしているところが想像される。また，母親はどうだろうか。子供の世話こそしていないが，自分の前に魚のお皿が無く，女の子の前に置いている。その情景から，彼女の心情は充分に理解できる。お櫃は，あのような場所には置かないのが普通であるが，食事の貧しさを象徴するものとして置かれたものであろうか。しかし，それが却って植木鉢の存在を大にし，貧しくとも心豊かに，という人間の心の有りようを教えてくれる，と筆者には思われるのである。

その他にも，さまざまな解釈がなされるであろうが，ちゃぶ台の上に並べられたお皿だけしか見えないか，あるいは，具体的な形となって表われていない１人１人の細やかな感情や，その雰囲気が語りかけるものを充分に読みとることができるかは，実に，その視覚情報を処理する側の知性によるものであると考える。

参 考 文 献

Bransford, J. D. & Johnson, M. K. Considerations of some problems of comprehension. In W. G. Chase (Ed.) *Visual Information Processing*, New York ; Academic Press, 1973

Bransford, J. D. et al. Differences in approaches to learning : an overview. *Journal of Experimental Psychology* : General, 111, 390－398, 1982

デール，E.　「デールの視聴覚教育」西本三十二訳　日本放送教育協会　1957

池上嘉彦　「記号論への招待」　岩波新書　1984

川本茂雄　「ことばとイメージ」　岩波新書　1986

メッツガー，W.　「視覚と法則」　盛永四郎訳　岩波書店　1968

Miller, N. E. Graphic Communication and the Crisis in Education. *Audio-visual Communication Review*, 1957, 5, 1－120

宮崎清孝・上野直樹　「視点」　認知科学選書１　東京大学出版会　1985

ルーメルハート，D．E．　「人間の情報処理」　御領謙訳　サイエンス社　1979
佐伯胖　「イメージ化による知識と学習」　東洋館出版社　1978
佐伯胖　「推論と理解」　認知心理学講座3　東京大学出版会　1985
田島富美江　外国語教育における視聴覚的方法：その理論的背景の再考　Language Laboratory　第23号　1986
武田常夫　「イメージを育てる文学の授業」　国土社　1973

効果的な外国語学習に関わる諸要因の研究

——情意的要因研究の概観——

A Study on Factors of
Effective Foreign Language Learning:
A Review of Studies on
Affective Variables

神　山　正　人
Kamiyama, Masato

はじめに

学習者の外国語学習能力は，学習者の要因（知能，外国語適性，態度・動機，性格，学習のストラテジィーなど），授業の要因（授業内容，授業方法，授業時間，評価方法など），教師の要因（経験，性格，外国語能力など），家庭環境の要因（家族，特に両親の態度など），および学校外の要因（塾，家庭教師など）等に規定されるといわれている。

外国語の授業を効果的に実施するには，外国語学習の達成度に関与する諸要因を，一つずつ別個にとらえることはできない。外国語学習をシステムとしてとらえなくてはならない。このことは，教育工学的思考の必要性を意味する。

教育工学的思考の大きな特長は，教授・学習過程をシステムとしてとらえることである(中野照海，1979)。外国語学習の場合，外国語学習の目標を教育課程全体の中に明確化，具体化し，その目標を達成するために授業全体をシステム化し，下位システムとしての学習者，教師，教授メディア等の諸性質を明らかにし，効果的な授業・学習状況を具体化し，さらに新しい目標へと進むため

の評価を行なうという一連の手続きが必要となってくる（大内茂男，1973)。そこで，科学の一分野としての外国語教育を目指すには，目標，内容，学習者，教師，方法，教材，メディア，評価等の「授業の設計」に関わる諸要因をシステム的にとらえる必要があろう。

これまで効果的な外国語学習に関わる諸要因の研究の一環として，以下の研究課題を設定し，研究を進めてきた。

1）外国語学習における学習者の態度・動機等の情意に属する要因についての研究

2）外国語学習の評価に関する研究

3）外国語学習の目標を達成するための教材の選択と系統化に関する研究

ここでは，研究課題の1）にあたる外国語学習における情意的要因の役割に関するこれまでの研究を概観することによって，効果的な外国語学習の可能性を検討することとする。

Ⅰ．情意的要因の定義

対象言語の国民，文化やその言語学習に対する態度・動機等の情意的要因が，その言語学習の成果と何らかの関係があることは過去において経験的に述べられてきた。そして，それらについて科学的に研究されはじめたのは1950年代後半になってからである。今日では，それらの関係はある程度明らかにされつつある。そこでここでは，情意的要因に属する態度・動機と外国語学習の関係について考察してみたい。

A．態度

態度（attitude）とは，社会的事象や事物に対して，好意的あるいは非好意的評価，感情，行為傾向をもつ持続した体系（『新・教育心理学事典』1977）と定義される。

シェリフとキャントリル（M. Sherif and H. Cantril, 1945）は，態度を次のように規定している。

1）態度は後天的に学習を通して形成される反応の準備状態であり，本能的な傾性や生得的反応の選択性とは区別しなければならない。

2）態度は一定の対象または状態に関連して形成されるもので，常に主体—客体関係，すなわち，自己対他の存在を含んでいる。

3）態度は情動的特性をもつ。

4）態度は持続的である。

5）関連づけられる刺激の範囲は広狭さまざまであり，特定の刺激または状況と結びついた個別的特殊的な場合もあれば，きわめて広範囲の多様な対象と関連をもつ一般的反応傾向もある。

以上のように，態度とは直接測定できるものではなく，操作可能な独立変数としての刺激とそれに対する測定可能な従属変数としての言語反応や行動などから推測されるものであり，媒介変数として考えられた構成概念である（『新・教育心理学事典』1977）。

B．動機

動機づけ（motivation）と動機（motive）は，ほとんど同義語として重複して使用される場合が多い（『新・教育心理学事典』1977）。動機とは，人間や動物の行動を始発させ，方向づけ，持続させ，強化する過程をさす。あるいは動的な行動をささえる比較的直接的な要因ないしはそれら要因間の相互作用（『新教育の事典』1979）と定義される。

代表的な動因には，a．苦痛回避，b．危急要求・恐れ，c．飢え・渇き，d．性，e．活動・探索，f．愛情がある。また主な動機には，マクレランド（D. C. McClelland）やアトキンソン（J. W. Atkinson）のいうa．達成動機，b．親和動機，そしてマズロー（A. H. Maslow）がいう成長動機がある（『新教育の事典』1979）。

学習場面における動機づけの諸方法としては，通常，内発的動機づけ（intrinsic motivation）と外発的動機づけ（extrinsic motivation）が考えられる。

C．外国語学習と情意的要因

R. Gardner and W. Lambert (1972) は，外国語学習を動機という角度から研究を行なっている。その研究によると動機を統合的動機（integrative motivation）と道具的動機（instrumental motivation）の二つに分けている。また，我が国のような外国語としての英語学習（English as a Foreign Language）習得という学習状況においては，消費的動機（consummatory motivation）も働いているように思われる。

1）統合的動機

外国の文化圏の一員になりたいとか，その文化に対して好意的な態度をもって外国語を学習する場合，学習者は統合的動機をもっているといわれる。学習者には，外国の文化圏に自分を統合させようとする動機が働いている。

2）道具的動機

外国語を将来，生活の手段として使うことを目的としている場合である。例えば，良い職業につくためとか，進学・卒業のため外国語を学習するなどが，この動機の要因となる。

3）消費的動機

外国語を学んでいると楽しいからとか，趣味として外国語を学習する場合，学習者は消費的動機をもっているといわれている。学習者は，外国語の学習過程に満足，または意義を感じているのである。

R. Gardner and W. Lambert (1972) は，第2言語を学習するカナダの高校生を対象にして調査した結果，統合的動機をもった学習者の方が，道具的動機をもった学習者より第2言語の成績がよいことを明らかにした。この結果は，フランス語を外国語として学習するアメリカの高校生にもあてはまると報告している。

しかし，フィリッピンにおける調査（R. Gardner and E. Santos, 1969），インドの女子高校生を対象とした研究（Y. Lukmani, 1972）によれば，道具的動機をもつ学習者の方が外国語の能力が高いことを明らかにしている。

これら一連の研究結果から，動機は学習者の環境，経済事情等の社会的要因

によって異なることが推論される。

Ⅱ．情意的要因に関する先駆的研究

情意的要因と外国語能力との関係をみる本格的研究は，1959年に R. Gardner and W. Lambert によって始められたが，それ以前にもこの分野における先行する諸研究が行なわれていた。そこでここでは，R. Gardner and W. Lambert以前における最も基礎的研究と思われる先行研究を，J. Carroll (1963) の概観を基礎としていくつかまとめてみる。

1） Lorge, I., 1939

I. Lorge は，アメリカが不況になったときロシア語を学習する必要にせまられて，それまでロシア語に関心をもたない者が学習した結果，関心をもっていた者と同程度の成果をあげたことを報告している。

2） Dunkel, H. B., 1948

H. Dunkel は，金銭的報酬と学習達成度の関係を調べる実験を行ない，金銭の報酬を約束しても，それが言語学習達成度とは必ずしも関係しないことを明らかにした。

3） Jones, W. R., 1949

W. Jones は，第２言語としてのウェールズ語能力とウェールズ語学習に対する態度との関係を調査した。

4） Politzer, R. L., 1953－54

R. Politzer は，大学生を対象に外国語学習から何を習得したいかといった調査を行った。その結果，過半数の学習者が口語的コミュニケーション能力の習得を第一にあげ，第二に読む能力の習得をあげていることを報告している。

5） Bamberger, F. H., 1955

F. Bamberger は，学習者の外国語学習に対する態度を調査した。

次に掲げる三つの先行研究は，年代的には1959年以降になるが，基礎的研究として重要と思われることから，取りあげてみることとする。

6） Politzer, R. L., 1960

R. Politzer は，大学生を対象に動機づけと学習成果との関係を調べ，学習者の自主的ＬＬ学習時間数と学習成果とには有意な相関関係があると報告している。

7） Carroll, J. B., 1962

J. Carroll は，動機は外国語習得に直接的な影響を及ぼさないとし，次のように述べている。

> これらの結果から推論できることは，本人の好むと好まざるとにかかわらず，学習活動に協力的であり積極的に参加している限り，動機の相異は達成度に大した影響を与えない。動機が達成度に関係があるのは，比較的自由に怠けられるような状況において，学習者がどの程度忍耐し努力できるかといった場合のときである。

8） Pimsleur, P., et al., 1964

J. Carroll (1962) の説とは異なる研究報告を P. Pimsleur, et al. がアンダー・アチーバーを対象にして行なった。それによると，かれらの「関心度テスト１」において，関心度の低さと達成度の低さとが一致していることから，外国語学習の成功予測をみる適性テストに関心度を含めることの重要性を示唆している。

Ⅲ. 情意的要因研究の動向

A. 外国語学習における情意的要因の役割

1. 初期的研究

R. Gardner and W. Lambert (1959) は，二言語教育 (bilingual education) に力をいれているカナダで，同じ学習の機会が与えられているのに，一方は第２言語学習に成功し，他方は成功しないのはなぜかという単純な問題から出発し，一連の研究の最初となる調査研究を行なった。

その最初の調査では，モントリオールの高校生 (75名) を対象とし，第２言語（フランス語）学習において言語適性と各種動機変数がフランス語達成度とどのように関係するかを調査した。その結果，「知能と言語適性」と「態度・

動機」の二要因がフランス語達成度と有意な関係があり，その二つの要因はそれぞれ独立していることがわかった。

R. Gardner (1960) は，その後態度，動機，言語技能等の変数を増やして，第１の研究結果の再検証を行ない，第１の研究結果が支持されたことを報告している。かれの研究では，学習者の志向（オリエンテーション）は，両親の態度に影響され，統合的動機は，両親の対象言語コミュニティーに対する好意的態度に育成されることも明らかにしている。

これら二つの初期研究結果を検証するために，さらに調査が行なわれた。カナダでは，H. Feenstra and R. Gardner (1968)，P. Smythe, R. Stennett, and H. Feenstra (1972)，R. Gardner and P. Smythe (1975) が調査を行なっている。アメリカにおいては，カナダのモントリオールとは学習状況が異なるルイジアナとメイン（ともに英語，フランス語の二言語文化社会），それにコネチカット（単一文化集団）が選ばれ，調査が行なわれた。そして，これらの調査においても二つの初期研究結果と同じ結果を報告している。

これら一連の研究から得られた結果は，次のとうりである。

> 第２言語学習の成否は，知能，言語適性にかかっているだけでなく，その言語に結びついている他の民族・言語的集団に対する学習者の態度，また，その集団に特有の行動を受け入れ，その集団と一体化（identify）しようとする意志によって，また，外国語学習に対するオリエンテーション（道具的，統合的）によって決定される。そして，その民族，文化に対する真実の個人的意味からきている統合的オリエンテーションのほうが功利的目的から出ている道具的オリエンテーションよりも第２言語学習に必要な長期の動機づけを保持するであろう（『英語教育学研究ハンドブック』1979, p. 185)。

２．フランス語以外の外国語を対象とした研究

M. Anisfeld and W. Lambert (1961) は，中学生81名を対象にヘブライ語学習における知能，言語適性と態度・動機の達成度に対する関係を調査した。その結果，態度テストと知能を含む適性テストは，それぞれヘブライ語達成度と有意な相関関係があることが明らかにされ，先行研究の結果を支持している。

英語を第2言語とするフィリッピンにおける高校生を対象とした調査では，確かに先行研究が示すように言語適性，動機要因は達成度に関与していた。しかし，先行研究とは反対の道具的動機をもった学習者の方が英語学力の高いことが明らかにされた（R. Gardner and E. Santos, 1969）。

これと全く同様の結果が，インドにおける調査で得られている。インドの女子高校生を対象とした研究でも，道具的動機をもった学習者の方が英語学力の高いことが明らかにされている。このように逆の現象が観察されたのは，インドは西欧化は望んでいないが，近代化を促進するために英語を手段，または道具として使用することを望んでいるためであろうと考えられる（Y. Lukumani, 1972）。

3．語学集中講座を対象とした研究

上述の諸研究においては，対象となった被験者の多くが中学・高校生であり，対象言語を学校の授業科目の一つとして学習している。一日に20分，または40分といった比較的に短い学習時間のため，上述の研究結果だけで一般化するには，少々無理が生ずるように思われる。

そこで，W. Lambert, Gardner, Barik, and Tunstall (1963) は，モントリオールでの6週間のフランス語夏期講座参加者を対象に調査を行なった。この調査は，これまでの研究とは次の二つの点において異なる。

1）学習者の年齢が高い

2）一日の内のほとんどを対象言語のみ使用する語学集中講座

その結果，初級レベルの学習者に関しては，フランス語達成度は，対象言語文化集団に対する好意的態度，そして統合的動機とに有意な相関関係がみられた。このことは，先行研究結果を支持していることになる。しかし，上級レベルの学習者に関しては，同じ結果は得られなかった。

この研究では，態度・動機変数があまり多くなかったことから，R. Gardner, Smythe, and Brunet (1977) は，それらの変数を多くして調査を行なった。被験者は，5週間のフランス語集中講座で学習する高校生62名であり，態度・動機にそれぞれ変容がみられ，それらの変容がフランス語達成度に影響を与えて

いるといった結果を得た。また，学習動機を高めたり，聞く・話す技能を習得する上での集中講座の効果は，顕著であることも明らかにされた。

さらに R. Gardner, Smythe, and Clément (1979) は，1977年の研究結果が年齢の少々高い学習者にも適用可能かをみるために調査を行ない，その集中講座の効果を調べた。被験者は，カナダの成人学習者（89名）とアメリカの成人学習者（65名）である。その結果，両学習者群とも統合的動機をもち，バイリンガリズム（二言語併用）に対する不安や態度が減少，また低くなると，フランス語達成度が高くなることが明らかにされた。またカナダの学習者では，その講座の満足度と口頭表現（ oral expression ）の達成度とに有意な相関関係がみられた。

B．情意的要因研究の問題点

1．態度尺度の妥当性

J. Oller (1979) は， R. Gardner (1975) が行なった研究の概観を引用して次のように述べている。

> 33に及ぶ調査（カナダの７つの異なる地域における７～12学年生，2,000名を対象）を概観すると，12の異なる態度と２つのフランス語達成度との最大平均相関値は，どれも.29以上に及ぶものはない（ J.Oller, 1979, p. 139)。

このことについて J. Oller (1979) は，態度と達成度との関係を弱いものにしている最大の要因を，態度尺度の妥当性の問題と指摘する。その妥当性を低くしている主な要因として，approval motive（承認動機），self-flattery tendency（自己追従傾向），response set（応答傾向）が考えられる（ J. Oller and K. Perkins, 1978, p. 108)。

1） Approval motive（承認動機）

人間には，他人から approve（承認）されたいという傾向がある。そこで，自分の本当の気持ちというより，社会的に好ましく思われる応答や，アンケートの出題者が好ましいとする傾向を見つけ，それに合わせて応答してしまう。

2） Self-flattery tendency（自己追従傾向）

アンケートに記されている形容詞，例えば talkative という概念を被験者が好ましいと受けとるならば，被験者自身を talkative であるとしてしまう。逆に quiet を好ましいと受けとるならば，被験者自身を quiet としてしまう傾向。

3） Response set（応答傾向）

一度ある応答をしてしまうと，その傾向にそった応答を全般的に行なってしまう。例えば，外国語学習について積極的な態度を最初に表明してしまうと，たとえどうあってもその方向にそった応答をしてしまう。

その他，態度尺度の妥当性を低くすると思われる要因として，J. Oller et al.（1977）は，態度尺度における質問項目のあいまいさと上級学習者の問題をあげている。

4）質問項目のあいまいさ

直接的態度尺度における "travel abroad" の項目を解釈する際，Y. Lukmani（1972）は，それを道具的動機に属するものとし，C. Burstall et al.（1974）は，統合的動機に属するものとそれぞれ解釈している。

このように，ある項目をいかに解釈するかといった問題は，アンケートの出題者，およびその被験者がそれをどう受けとめるかによって異なってしまうのである。

5）上級学習者

上級学習者は，確固としたすぐ手に入れることのできる目標（a definite and immediately accessible goal）をもっている。そこで，統合的動機とか道具的動機といった区別をなくしてしまう（J. Oller et al., 1977, pp. 4－5）。このことは，先行研究が明らかにしてきた，統合的動機が対象言語達成度の重要な予測要因であることを否定することになる。

これまで述べてきた諸要因は，被験者の真意，または実際の行動を測定する上で不正確にしてしまう可能性がある。そのため妥当性を低くする原因となっているように思われる。

2．間接的態度尺度の利用

J. Oller et al. (1977) は，米国への中国人留学生44名を対象にして英語熟達度と態度・動機との関係を調べた。この調査では，まず測定方法としての適切な態度尺度の吟味からはじめた。これまでに，間接的態度尺度が熟達度を予測する場合に効果的であるとする研究もみられる（B. Spolsky, 1969）ので，ここでの研究では，直接的態度尺度と間接的態度尺度の両者を用いた。さらに，従来英語能力または学力をみるために達成度テスト（achievement test）が使われてきたが，この実験では英語能力をみるために熟達度テスト（proficiency test）として妥当性が高いといわれているクローズ・テストが使われた。

その結果，熟達度と態度・動機とには有意な相関関係がみられ，また直接的態度尺度と較べると，間接的態度尺度の方が予測度のための尺度としては適切であることがわかった。

ニューメキシコを学習の場とした J. Oller and L. Baca et al. (1977) の調査においても同様の結果が得られている。被験者は，スペイン語を母国語とする女子学習者60名で，上述した中国人留学生を対象とした調査とは若干異なる点（例えば，アメリカ人を高く評価する程，熟達度の得点が低い等）はみられたが，熟達度と態度・動機とには有意な相関があり，間接的態度尺度は英語能力の予測度を測るよりよい尺度であることが明らかにされている。

しかしながら，これら J. Oller の一連の研究結果とは異なる研究結果も報告されている。

H. D. Pierson and G. S. Fu et al. (1980) は，ホンコンで中国語を母国語とする高校生466名（男女）を対象に，直接的・間接的態度尺度のどちらが，英語熟達度を予測する場合に効果的であるかを調べた。そして，かれらは直接的態度尺度の方が英語熟達度の予測度を測るより適切な尺度であることを明らかにしている。

3．外国語としての英語学習場面への適用

上述のアメリカとホンコンでの調査は，英語を第2言語として学習する場合

であるが，これらの調査結果が学習状況の異なる「英語を外国語として学習」する場合にも適用するかをみてみる。

T. Chihara and J. Oller (1978) は，英語を外国語として学習する日本人学習者を対象に，熟達度と態度・動機との関係を調べた。その結果，熟達度と態度・動機との関係は非常に弱く，態度尺度の英語能力を予測する効果比較においても，直接的・間接的態度尺度とも学習者の態度を引き出す尺度としての違いはみられなかった。J. Oller は，この結果は外国語学習と第 2 言語学習との背景（context）の相異によるものとしている。

Y. Asakawa and J. Oller (1977) は，再び日本人学習者を対象に同じ主旨の調査を行なったが，上述の結果と同様の結果を得ている。

これらの研究結果を基に，筆者は英語能力と情意的要因の関係について，1981年12月に小研究を行なった。そこでは，先行研究結果から示唆された次にあげる問題点を，ある程度明確に規定することにした。

1）情意的要因を測定する尺度の問題

2）英語能力を測定する測度の問題

3）被験者の学習経験の問題

被験者は，中学 1 年生97名（男子66名，女子31名），中学 2 年生76名（男子40名，女子36名），高校 1 年生116名（男子57名，女子59名）であった。学習者の情意的要因として，英語学習の関心度，英語および英米国民に対する態度，外国語学習態度，統合的動機，道具的動機，消費的動機に関するテスト（直接的態度尺度），英語能力としてクローズ・テストを使用した。また高校 1 年生に関しては，さらに間接的態度尺度（現在の自分，理想の自分，日本人，英米人）を加えた。

実施したテスト得点を基に因子分析し，重相関を求めた結果，次にあげることが明らかになった。

1）英語能力と態度・動機とには有意な関係がある。

2）学習初期段階では，英語能力と態度・動機との関係は強く，学習経験の増加と共にその関係は弱くなる傾向がみられる。

3）直接的・間接的態度尺度の両者には，英語能力の予測度を測る尺度とし

て差異がない。

このようにこの小研究においては，先にあげたJ. Ollerの研究結果とは異なる点がいくつかみられた。その中でも，直接的態度尺度の妥当性の問題に関して，特に結果3）は重要であろう。というのは，これまで多くの先行研究において外国語学習能力の予測度をみる尺度として，直接的態度尺度が使われてきたが，直接的態度尺度の妥当性が指摘されて以来，それらの研究結果の信頼性が問題になっていたからである。そこでこの結果3）によって，それらの研究結果をある程度信頼性のあるものとしてとらえることができるのではないだろうか。

4．情意的要因研究の問題点

J. Ollerは，情意的要因の測定は不可能に近いという主旨の主張を行なっている。そして，その情意的要因の性質について次のように述べている。

性格，態度，情緒，感情，動機等は，主観的なものである。そして，それらが風のように気紛れなことは，我々の経験からも言えることである（J. Oller, 1979, p. 105）。

しかしながら，E. Gronlund (1976, pp. 15－16）は，態度のような典型値（typical performance）の測定は困難であるが，測度を多くすることによって，より正確な結果を得ることができると説明している。

中野（1981）は，態度測定の困難さを指摘しながらも，対処法とも言うべきこの問題に対する根本的なとらえ方を示唆している。

要するに，態度を測るということは，態度の心的構造からして，直接的に測ることは不可能であって，なんらかの操作をとおして，心的内部を推測することだからである。

しかし，「推測」という作業は，態度の測定を含む情意の領域での学習成果の測定に限らず，認知の領域の学習成果の測定の場合にもみられることである（中野照海，1981, p. 30)。

態度・動機といった人間の情意に関わる要因の測定においては，まず第1に，情意的要因の性質を十分に把握すること，そして，その測定が難しいことを素

直に認めることが大切であろう。しかし，そこで重要なことは，困難だからといってあきらめてしまうことではなく，現在可能なあらゆる工夫，例えば，E. Gronlund (1976) が言うように，多方面から情意的要因をとらえようと，測度を多くする等の試みをしてみることである。その一方，より妥当性の高い態度・動機の測定尺度の開発をめざして，研究を積み重ねてゆく不断の努力が必要であろう。

おわりに

今後のこの分野における研究対象として，以下の課題について研究を進めていきたいと考えている。

1）外国語教育モデルの構築

外国語としての英語習得という背景をもつ日本に適切な独自の外国語教育モデルを作成する。

2）情意的要因の測定尺度の開発

より妥当性と信頼性の高い態度・動機といった情意的要因の測定尺度を開発する。

藤岡 (1983) は，C. Houle の学習行動の三類型を取り上げ，日本の成人学習者の学習目的を考察している。

1）目標志向

はっきりとした目標が存在し，学習はそれを達成する手段として行なわれる。道具的学習あるいは課題解決的学習。

2）学習志向

特定の学習を行なうこと自体の中に意味を求める。自己目的的な学習。ある場合には生きがいとしての学習となり，また自己実現を目ざす学習となる。

3）活動志向

学習の内容や表向きの目的とは関係なく，学習活動の過程で生み出される副産物により大きな価値をおく。

この学習活動の三類型は，日本における外国語学習を考える上で，示唆する点が多いように思われる。情意的要因の測定尺度の開発とともに，外国語としての英語習得という背景をもつ日本に適切な独自の外国語教育モデルの構築の際にも，重要となろう。

参考文献

Anisfeld, M., and W. E. Lambert, "Social and psychological variables in learning Hebrew," *JASP*, 1961, 63, 524－529.

青木　裕「英語学習における態度・動機と英語学力」『英語教育』大修館，８，1982, 41－43

Asakawa, Yoshio, and J. W. OIler, Jr., "Attitudes and attained proficiency in EFL : a socio-linguistic study of Japanese learners at the secondary level," *SPEA Q Journal*, 1977, 1, 71－80.

Bamberger, F H., "What about the student's point of view ? " *MLJ*, 1955, 39, 240－242.

Burstall, c., M. Jamieson, S. Cohen and M. Hargreaves, *Primary french in the Balance*, Windsor, England : NFER Publishing Co. Ltd., 1974.

Busch, D., "Introversion-Extraversion and the EFL Profiency of Japanese Students", *Language Learning*, 1982, 32, 109－132.

Carroll, J. B., "The prediction of success in intensive language training, "In R. Glaser (Ed.), *Training research and education*, Pittsburgh : Univ. of Pittsburgh Press, 1962, 87－136.

Carroll, J. B., "Research on teaching foreign languages," Gage, N. L. (ed.), *Handbook of research on teaching*, Chicago Rand Mcnally, 1963, 1060－1100.

Chihara, Tetsuro, and J. W. Oller, Jr., "Attitudes and attained proficiency in EFL : A sociolinguistic study of adult Japanese speakers, "Language Learning, 1978, 28, 55－68.

Clément, R., and B. G. Kruidenier, "Orientation in Second Language Acquisition : I. The Effects of Ethnicity, Milieu, and Target Language on Their Emergence," *Language Learning*, 1983, 33, 271－291.

d'Anglejan, A, and C. Renaud, "Learner Characteristics and Second Language Acquisition : A Multivariate Study of Adult Immigrants and Some Thoughts on Methodology," *Language Learning*, 1985, 35, 1－19.

Dunkel, H, B., *Second-Language learning*, Boston : Ginn, 1948.

Feenstra, H. J., and R. C. Gardner, Aptitude and motivation in second-language acquisition, Department of Psychology, The University of Western Ontario, Mimeographed, 1968.

藤岡英雄「"目的" からみた成人の学習——学習関心調査・報告 2」『放送研究と調査』1983, 10, 29−37.

Gardner, R. C., Motivational variables in second-language acquisition, diss., Mcgill University, 1960, An abstract of this diss. is published in R. C. Gardner and W. E. Lambert, 1972.

Gardner, R. C., "Social Factors in Second Language Acquisition and Bilinguality," Paper read at the invitation of the Canada Council's Consultative Committee on the Individual, Language and Society at a conference in Kingston, Ontario, 1975.

Gadner, R. C., R. N. Lalonde, and R. Moorcroft, "The Role of Attitudes and Motivation in Second Language Learning : Correlational and Experimental Considerations," *Language Learning*, 1985, 35, 207−227

Gardner, R.C. and W. E. Lambert, "Motivational variables in second language acquisition," *Canadian Journal of psychology*, 1959, 13, 266−272.

Gardner, R. C. and W. E. Lambert, *Attitudes and motivation in second-language learning*, Rowley, Mass, Newbury House Publishers, 1972.

Gardner, R. C. and Emma Santos, Motivational variables in second-language acquisition : A Philippine investigation, Manila, Language Study Center, Philippine Normal College, Mimeographed, 1969.

Gardner, R. C. and P. C. Smythe, Second Language Acquisition : A Social Psychological Approach, Reseach Bulletin, No. 332, University of Western Ontario, 1975.

Gardner, R. C., P. C. Smythe, and G. R. Brunet, "Intensive second language study : Effects on attitudes, motivation and French achievement," *Language Learning*, 1977, 27, 243−261.

Gardner, R. C., P. C. Smythe, and R. Clément, "Intensive Second Language Study in a Bicultural Milieu − An Investigation of Attitudes, Motivation and Language Proficiency," *Language Learning*, 1979, 29, 305−320.

Genesee, F. , P. Rogers, and N. Holobow, "The Social Psychology of Second Language Learning : Another Point of View," *Language Learning*, 1983, 33, 209−224.

Gronlund, N. E., *Measurement and Evaluation in Teaching*, Macmillan Publishing

Co., Inc., 1976.

『新教育の事典』平凡社, 1979.

Jones, W., "Attitudes toward Welsh as a second language, a preliminary investigation," *British Journal of Educational Psychology*, 1949, 19, 44−52.

梶田叡一「関心・態度の目標と評価をどう考えるか」『学習指導研修』1983, 2, 20−23

垣田直己編『英語教育学研究ハンドブック』大修館, 1979.

神山正人『外国語学習における態度・動機の役割に関する実証的研究』ＩＣＵ大学院教育学修士論文, 1982.

『新・教育心理学事典』金子書房, 1977.

小池直己「中学生高校生の英語学習意識の調査研究」『英語教育』1982, 1, 30−33.

Lambert, W. E., R. C. Gardner, H. C. Barik, and K. Tunstall, "Attitudial and cognitive aspects of intensive study of a second-language," *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 1963, 66, 358−369.

Lorge, I., Psychological bases for adult learning, Teachers Coll. Rec., 1939, 41, 4−12.

Lukumani, Yasmeen M., "Motivation to Learn and Language Proficiency," *Language Learning*, 1972, 22, 261−273.

Nakachi, K., "The Effects of Attitudes and Orientation on Second Language Learning," 『大学英語教育学会紀要』1983, 14, 51−73.

中野照海編『教育学講座　6．教育工学』学習研究社, 1979.

中野照海「視聴覚教育の評価に関する覚書７．映像の情意的機能, 特に態度変容をめぐって」『視聴覚教育』日本視聴覚教育協会, 1981, 11, P. 30.

Oller, J. W. Jr., *Language Tests at School*, Longman, 1979.

Oller, J. W. Jr., Lori Baca, and Fred Vigil, "Attitudes and attaind proficiency in ESL : a sociolinguistic study of Mexican−Americans in the Southwest," *TESOL Q* 11, 1977, 173−183.

Oller, J. W. Jr., Hudson Alan J., and Liu, Phillis Fei, "Attitudes and attained proficiency in ESL : A sociolinguistic study of native speakers of Chinese in the United States," *Language Learning*, 1977, 27, 1−27.

Oller, J. W. Jr., and K. Perkins, "Intelligence and Language proficiency as sources of varience in self-reported affective variables," *Language Learning*, 1978, 28, 85−97.

Oller, J. W. Jr., and K. Perkins, *Language in Education : testing the tests*, Newbury House, 1978.

Oller, J. W. Jr., and K. Perkins, *Research in Language Testing*, Newbury House, 1980.

大内茂男編『講座・英語教育工学５，研究と評価』研究社，1973.

Pierson, H. D., G. S. Fu, and S. Lee, "An analysis of the relationship between Language attitudes and English attainment of secondary students in Hong Kong," *Language Learning*, 1980, 30, 289－316.

Pimsleur, P., D. Sundlund, and R. McIntyre, "Underachievement in Foreign Language Learning," *International Review of Applied Linguisties*, II, 1964, 113－150.

Politzer, R. L., "Student Motivation and Interest in Elementary Language Courses," *Language Learning*, 1953－54, 15－21.

Politzer, R. L., "Assiduity and achievement," *MLJ*, 1960, 44, 14－16.

Sell, D. K., "Research on attitude change in U. S. students who participate in foreign study experiences : past findings and suggestions for future research," *International Journal of Intercultural Relations*, 1983, 7, 131－147.

Smythe, P. C., R. G. Stennett and H. J. Feenstra, "Attitude, Aptitude and Type of Instructional Program in Second Language Acquisition," *Canadian Journal of Behavioural Science*, 1972, 4, 307－321.

Spolsky, Bernard, "Attitudinal aspects of second language learning," *Language Learning*, 1969, 19, 271－285.

Strong, M., "Integrative motivation : Cause or result of successful second language acquisition ? " *Language Learning*, 1984, 34, 1－14.

スタインベックと笑いについて

── *Tortilla Flat* を中心に──

深 沢 俊 雄

(1)

この作品は，全体が序文と17章のエピソードから構成されている。舞台はCalifornia州の海岸沿いにある古い町モンテレーのトーティーヤ・フラットである。時代は，ドイツとの戦争について言及していることから第1次大戦の後と考えられる。

モンテレーの下町の方には，アメリカ人，イタリア人，漁師，缶詰業者などが生活しており，森と町が入りくみ，街路にはアスファルトの舗装もなく，町角には街燈もなく，山の手の方には昔からの住民が住みついているという当時の状況である。

そして，このモンテレーの山の手に住んでいた住民が，主人公ダニーを中心とするパイサーノ（Paisano）たちである。彼らの祖先は，約100年か200年前からカリフォルニアに住みつき，雑草の生い茂った庭に建てた古い木造の家に住み，商業主義には汚染されず，アメリカの商売の複雑な機構には縁がなく，盗まれたり，搾取されたり，抵当に取られたりするものも何一つ持たないで気楽に生活を楽しんでいる人たちである。つまり，彼らは現代文明に背を向けて生きている無道徳な一群の人々である。

作者は，この作品で，パイサーノたちの生きざまを描くことにより，アメリカ社会とその文明を風刺しようとしたものと思われる。

(2)

そこで,「スタインベックと笑いについて」というテーマに添って，トーティーヤ・フラットの主人公ダニーとダニーを取りまく仲間のパイサーノたちとの関わりを中心にこの問題をさぐってみることにする。

笑い(laughter)のいろいろなfactorとなるカテゴリーを，新倉俊一氏の『英語のノンセンス』(大修館書店刊行)という書物を参考にさせていただき，次のようにいくつかに分けて考察してみたい。

1. irony ー矛盾の均衡。
2. satire ー悪行，愚行などをあばき，非難し，誹謗するにあたっての風刺や皮肉。
3. pessimism ー厭世主義や悲観論。
4. parody ー風刺的なまね。
5. humor ー人間生活ににじみ出るおかしみ。
6. caricature ー人物の特徴や欠点を滑稽に誇張した風刺や戯画。
7. nonsense ーばかげた行為や意味のないもの。
8. absurdity ー不条理や愚かしさ。
9. comedy ー喜劇的要素。
10. burlesqueー 風刺的戯画。

など，このほかにもまだいくつかのカテゴリーがあるけれども，だいたいおもだったものを列挙してみた。

そこで，この作品の主人公ダニーやその仲間たちの行為や言動が引き起こす笑いが，このいずれのcategoryにあてはまるか分析してみることにする。

この作品は大きく3つに分けられると思う。すなわち，最初の部分(序文および第1～第6章)では，ダニーが祖父から二軒の家を遺産相続し，ダニーとその仲間たちがダニーを中心とする一家，つまり集団を形成していく過程が描かれている。中間部(第7～第14章)では，ダニーの仲間たちの冒険，善行，苦労などがepisodicに描かれ，最初の部分の出来事と終結部の出来事を対比

させて作品の筋を一つにする役割を果している。終結部（第15～第17章）では，主人公ダニーが仲間たちとの結びつきに対する自分の責任の重さを感じ，遺産相続をする以前の自由な生活へのあこがれが描かれている。

さらに，それぞれの章を笑いの factor から大まかに分類すると，最初の部分の１章は，caricature と absurdity に，２，３，６章は irony に，４章は humor に，５章は absurdity に分けてみた。中間部の７章は irony に，８章は satire に，９章は irony と caricature に，10，13，14章は humor に，11章は caricature と comedy に，12章は irony と humor に分けてみた。終結部の15，17章は irony と pessimism に，16章は absurdity に分けてみた。

この３つのパートから，主人公ダニーが関わる「笑い」について順次論じてみたい。

主人公ダニーは，トーティーヤ・フラットに育ち，誰からも好かれ，血縁関係からか，恋愛関係からか，このトーティーヤ・フラットのほとんど誰にでも関わりがあったと作者は述べている。すなわち，

His grandfather was an important man who owned two small houses in Tortilla Flat and was respected for his wealth.

If the growing Danny, prefered to sleep in the forest to work on ranches and to wrest his food and wine from an unwilling world, it was not because he did not have influential relatives.[1)]

ダニーの祖父がトーティーヤ・フラットに小じんまりした家を二軒ばかり持っていた有力者で，その財産のおかげで，ダニーは尊敬されていた。

ダニーが成人してからは，好んで森で寝たり，牧場で働いたり，いやがる人々から食物やワインを無理やり奪っても，有力な親戚がなかったからではなかった。

というように，この引用中に，ダニーの人間性の一端を垣間見ることができるのである。またダニーは，小柄で色も黒く強情な男で25才になると両足が馬の腹のふくらみにぴったりくっつくように曲った男として描かれている。

ダニーの仲間たちは，ダニーを含め，ピロン，大男のジョオ・ポータジー，パブロオ，海賊(Pirate)，ジーザス・マリア・コオーコランの6人である。彼らのそれぞれのcharacterを論じるならば，ピロンは何かおまけとして与えるものという意味の名前で，仲間うちでは哲学者であり，理論家で詭弁家である。大男のジョオ・ポータジーは酒好きな男で，たとえ僅かなお金でも手もとにあれば酒に替えてしまうというふしだらな男である。パブロオはえたいの知れぬ前科者で，常に刑務所を出たり入ったりしている男である。海賊(Pirate)は体が大きくて肩幅が広く単純な男で，毎日薪を拾い集めてはモンテレーに売りにゆき，五匹の犬を可愛がり，日曜日には教会へ出かける男である。ジーザス・マリア・コオーコランは博愛家で心優しい好色な善人である。そしてこれらの仲間たちのそれぞれがhumorousなcharacterを持ち，自由奔放に生きているのである。その彼らの姿の中にcaricatureを垣間見ることができるのである。

まず，主人公ダニーとピロンの出会いが，後にダニーの一家（つまり集団）を形成する布石となるのである。二人の出会いのきっかけは，ダニーが25才の年にドイツに対し，宣戦が布告され，その戦争の噂を耳にしたときに，ダニーとピロンは折悪しくワインを2ガロン持ち合わせており，大男のジョオ・ポータジーも松林に瓶が光っているのを見て，彼らの仲間に加わるのである。要するに，三人共，酒を媒体として仲間になっていったのである。

三人は酔ってモンテレーを歩きまわり，徴兵事務所の前で大騒ぎをした結果，徴兵係の軍曹に三人とも徴兵され，どの部隊に入りたいか希望を聞かれるのである。その結果ピロンは歩兵に，大男のジョオ・ポータジーも歩兵に編入され，ダニーは騾馬の馭者をしていたので，テキサス州で騾馬の調教に従事することになるのである。

(3)

上述したように，第1章ではダニーの乱暴な行動が，caricatureとabsurdなcategoryとして描き出されている。戦争から帰って祖父が残してくれた二

軒の家を相続したダニーは，財産の検分に出かける前に1ガロンのワインを買って飲み，アルバラード街の公開賭博場の椅子を壊したり，波止場に行き人種的反感からイタリア人の漁師を脅したり，数々の狼籍を働き，30日間モンテレーの刑務所に入れられるのである。ある晩，看守のティトー・ラルフ（Tito Ralph）が彼の房へワインを持って訪れ，一緒に飲み，ラルフが酒を買いたしに行くとき，ダニーも一緒について行き，二人が行った店（Torrelli の店）で，主人に追い出されるまで飲みふけり，ダニーはそのまま脱走し，松林の中へ入って寝込んでしまうのである。

彼は，日中は叢林の中に身をかくして追跡の目をのがれ，夜になって条件がそろったところで出没し，料理店の裏口などに出かけて行っては食料を失敬するという具合である。脱走した次の夜，ダニーは松林の中でブランデーを持った親友のピロンに出会い，それを飲みながら話しているうちに，自分が家を持っていることを思い出し，「いっしょに住もう」とピロンに話しかけるのである。

第2章3章は，irony のカテゴリーとしてとらえることができると思う。二人は，二軒の家を見て良い方に住むことに決めるのである。やがて，ダニーは財産を持ったという苦労を感じるようになり，もう一軒の家を貸すことを思いつき，親友のピロンが15ドルで借りることになるのである。

ダニーは貸家を一軒持って一廉の人物になり，ピロンは家を借りて社会的地位が向上するのである。ところが，ピロンはなかなか家賃が払えず，ダニーに対してそのことが気がかりになっていくのである。

つまり，二人の立場の違いが矛盾の均衡として ironical に描かれている。しかし，ダニーもピロンの心情をよく理解しており，ピロンにとっては，そのことがますます精神的な負担になっていくのである。ある晩ピロンは，仮出獄したばかりのパブロオと出会い，自分の借家の一部をパブロオに貸すことで自分の道徳的責任を逃れようとするのである。

第4章では，ダニーと仲間たちの言動が，humor のカテゴリーとして描き出されている。ある日，ピロンとパブロオは何かにありつこうとダニーの家へ出かけるのである。ダニーは隣家の未亡人モラレース（Mrs. Morales）夫人

のことを，「年をとっているが，家も貯金もある」と言って，彼女に贈物をしたいが，2ドルばかり手に入らないかと，暗に家賃のことをにおわせるのである。ピロンとパブロオは腹を立てながら金策に出かけ，道で仲間のジーザス・マリア（Jesus Maria）と出会うのである。彼は浜に打ち上げられたボートを売って酒を買い女と遊ぶのだが，まだ3ドルばかり持っていることがわかると，ピロンとパブロオは彼を家につれて帰り，言葉巧みに彼を口説いて，月15ドルの間代で同居する気にならせ，内金として2ドル出させるのである。この金をダニーにやらなければと話すうちに，彼らの考えは次第に変わって，「酒だってすてきな贈り物になるのだから，自分たちが買ってダニーに渡そう」ということになり，彼らは買いに出かけるのである。まさにピロンとパブロオの言動は humor であると同時に burlesque である。

第5章では，absurdity な笑いとダニーの財産の重荷に対する風刺とが描き出されている。ピロンとパブロオはトレルリの店で「ダニーに2ガロンも酒を届けてやる手はない。酒となるとまるで目のない奴だからな」と話しあって，自分たちで1ガロンのワインを平げてしまうのである。彼らはトレルリの店で，トレルリの女房をだまして，夕食をせしめ薪まで手に入れて家に帰り，火をたき，パブロオが買ってきた聖フランシス（St. Francis）に供えるローソクをともすのである。そこへジーザス・マリアが帰って来て，彼が彼女にやるつもりで買ったブラジャーをまだ持っていたので，ピロンとパブロオはそれをダニーにやって夫人への贈り物にさせようと考えるのである。三人は，陽気に飲んで歌い眠ってしまうのである。ところが，つけ放しのローソクがもとで，借家は火事になり，三人はやっと逃げ出し，一人がダニーに知らせに行くと，彼は隣家のモラレース夫人の窓から顔を出し，消防が来ているかどうか確かめるのである。

ダニーは貸家が焼けてしまったことで，却って財産所有者であることの束縛から解放され，すくなくとも重荷の一つが取り除かれたという救いの感情を覚えるのである。

つまり，遺産相続がダニーに二つの問題を投げかけるのである。まず一つには，財産所有者となることが，彼の自由を束縛して生活を複雑にするだろうと

いう irony であり，もう一つは，他の仲間よりも社会的地位があがり，仲間たちがダニーから遠ざかってしまうかも知れないという irony があったからである。このことは，次の引用文より明らかである。

"If it were still there, I would be covetous of the rent," he thought. "My friends have been cool toward me because they owned me money. Now we can be free and happy again."[2)]

「まだあそこに家があるとしたら，おれは家賃を欲しがるだろうな」と彼は思った。「仲間もおれに借金をしてるので，冷たくなっちまったんだ。もうおれたちは自由だし，幸福にもなれるんだ。」

この引用より，ダニーの財産という重荷からの解放感と原始的な状態で生活していた頃の仲間意識に戻れる喜びを，如実に窺うことができるのである。

焼け出されたピロンとパブロオとジーザス・マリアは型どおりに警告された後，ダニーの家に居候をすることになるのである。そこで，ダニーの財産に対する責任は一軒だけとなり，三人の責任は借家人から客へと立場が変わり，家賃の心配は消えてなくなり，彼らにとっては何とも喜ばしい irony となるのである。

感謝した居候の三人は，これからは，ダニーの食物には不自由させないと忠誠を約束するのである。このことにより，ダニーに対する彼らの友情の絆は以前（貸家があった頃）よりもいっそう強まり，同じ屋根の下に住む家族が友情と忠誠と約束の上に成り立っている集団であることを窺うことができるのである。

さて，物語は中間部に入り，第7，12章では，昔飼っていた病気の犬がよくなるのを願って（犬はその後すぐにトラックに轢かれて死んでしまうのであるが），聖フランシスに25セント銀貨で千枚たまったら，金の燭台を捧げる約束をした海賊を登場させることによって，神の存在をダニーの仲間たちにも意識させようとしたものと思われる。いったんは海賊のためにお金をだましとろうとした仲間たちの愚行を風刺することにより，いっそうパイサーノたちの連帯

感と集団意識（一家族としての）を強化することを狙いとしているのである。

第8章では，ピロンと大男のジョオが聖アンデレの日の前夜に宝探がしをするのであるが，二人の見つけたものは測地調査用のコンクリート板だったという nonsense が描かれている。

第9章では，ダニーが電気も引いてない恋人ラミレスのために，モーターの付いていない電気掃除機を買ってやるのであるが，買った本人も，もらった彼女も，モーターが付いていないことには気がつかなかったというどこか間が抜けた irony のこもった滑稽さに思わず笑いを催さずにはいられないのである。

つまり，作者は社会の物質主義的なプライドと貪欲さに対する風刺を意図したものと思われる。

第10章では，親切者のジーザス・マリアが，ある日道で会った16才の少年伍長とその赤ん坊をダニーの家に連れて帰り，ダニーと仲間たちで親切にしてやり，善行を施してやるのである。そして少年伍長が毎日赤ん坊に言い聞かせる「お前は大将になるんだよ」という言葉や，ダニーの仲間たちに話す「ちっぽけな肩章（かたじるし）とちっぽけな懸章をつけたあの大尉がおいらの女房をとれるものなら，大きな懸章と金の剣を持った大将だったら何がとれるだろうかと思って，それで子供の行く末を楽しみにしていたのに」という言葉の中に，ユーモアとペイソスと世の中の矛盾したアイロニーを感じずにはいられないのである。

第11章では，大男のジョオ・ポータジーの鈍感で獣的な人物像と未亡人ティア・イグナシア（Tia Ignacia）との感情のずれが comical に描かれ，第12章でジョオが海賊のお金を盗む伏線となっているのである。

第13章では，ダニーの仲間が子だくさんで困っている女，テレジナ・コルテス（Teresina Cortez）とその飢えている子供たちの貧窮状態を助けるために，食料の豆をどこからか失敬して補給してやるパイサーノたちの善意の行動がユーモラスに描かれている。そして第14章では，ダニーの家でパイサーノたちが，集団で楽しく暮らしている様子と過去の思い出話が comical なタッチで描かれ，物語を終結部へと導いているのである。

終結部の三章のうち，第15章ではダニーがついに財産の重みと仲間に対する責任に疲れて，家を持つ前の自由がなつかしくなり，仲間を見捨てて，ある晩

姿を消すのである。まさにここにパイサーノたちの運命の皮肉とダニー自身のpessimismがリアルに露呈されている。

ダニーの仲間たちは，はじめは色恋沙汰ぐらいに思っていたのであるが，一週間たっても戻ってこないので森を探し歩くが，徒労に終わるのである。やがてダニーは家にある物を持ち出すようになり，家までも酒の密売人であるトレルリに売ってしまうのである。

仲間たちは，トレルリが持ってきた正式に登録されていない譲渡証書を破ることによって家を取り戻すのである。そこへダニーが疲れ果てて，気持も変わって帰ってくるのである。仲間たちは，彼を暖かく迎え入れるのであるが，ダニーは仲間たちに家を売ったことについては嘘をつくのである。

つまり，第15章はダニーの昇天のための準備であり，スタインベックがダニーに狂気性を持たせることによって，物語に緊張感を持たせたかったものと思われる。

第16章でダニーは散々狼籍を働いたあげく，わが家に戻ったものの，良心のとがめを感じるのでもなく absurdity と pessisism を露呈しているのである。仲間たちは，魂の抜けた人間のように元気がないダニーを元気づけるために，パーティを開き昔のダニーを取り戻そうと友情を発揮するのである。

ところが，ダニーはパーティにも興味を示さず，再び家を出てそのまま谷で何者かと格闘の末，谷底に落ちて死ぬ運命をたどるのである。まさにダニー自身にも，仲間たちにとっても運命の皮肉としかいいようのない nonsense な出来事となるのである。

第17章では，ダニーが退役軍人なので軍隊葬が行なわれることになり，ダニーの仲間たちは晴着がないために，自分たちだけが葬列に参列ができないことがはっきりし，惨めな思いをしながら草むらに隠れて葬列を見送るのである。

葬式のあと，彼らは象徴的な中心人物を失った家に戻り，家に火をつけてゆっくりと一人ずつ闇の中に立ち去るのである。

(4)

ダニーの家族（つまり仲間たち）は，彼の死と共に崩壊していったのである。パイサーノたちは，ダニーを機軸として仲間たちの忠誠，誓約，そして寛容などの社会的理想に基づいて，一つの社会を構成していたのである。それはまた自由で全く抑制されない官能の社会であり，ダニーと仲間たちの生活の中に暴力的衝動を抑制する必要もない原始 humanism の社会を風刺したものと思われる。

つまり，遺産によってダニーの社会的地位が上がったことに対する彼の最初の反応が，酒を飲んで野蛮なばか騒ぎをすることであったことからも一目瞭然である。これは，現代文明の中にあって，全く現代文明とは縁のないダニーのアメリカ社会とその文明に対する逃避現象であり，原始 humanism の社会へのあこがれであろうと思われる。

要するに，ダニーとその仲間が行なう，さまざまな冒険，恋愛，喧嘩，飲酒，善行，智恵などが，涙と笑い，哀愁と明朗さを醸しだし，思わず笑わずにはいられないようなちょっとしたユーモアが，いたるところにあるのである。このようなユーモアは，素朴で無知な彼らの生活そのものが生み出すものとして，作者の温かさと明るさによる人間性の現われであろうと考えられる。

NOTES

1）John Steinbeck. *Tortilla Flat*: William Heineman Ltd. 1975, p. 9.

2）Ibid., p. 82

REFERENCES

1）Howard Levant. *The Novels of John Steinbeck, A Critical Study*: University of Missouri Press, 1974

2）James Gray. *John Steinbeck*: University of Minnesota Press, 1971

3) John Steinbeck. *Tortilla Flat*: William Heineman Ltd., 1975
4) Peter Lisca. *The Wide World of John Steinbeck*: Rutgers University Press, 1958
5) Richard Astro and Tetsumaro Hayashi, eds. *Steinbeck: The Man and His Work.* Oregon State University Press, 1971
6) Stanly Cooperman. *The Major Works of* J*ohn Steinbeck*: Monarch Press, 1964
7) 石一郎『スタインベック』(研究社, 1967)
8) 稲沢秀夫『スタインベックの世界』(思潮社, 1978)
9) 新倉俊一『英語のノンセンス』(大修館, 1985)
10) テツマロハヤシ編. 坪井清彦監訳『スタインベック作品論』(英宝社, 1978)

バーンズのコローデン

Burns in Culloden

難　波　利　夫
Toshio Namba

序にかえて

The Lovely Lass o' Inverness,[1]
  Nae joy nor pleasure can she see;
For e'en and morn she cries, alas !
  And aye the saut tear blins her ee;
Drumossie moor,[2] Drumossie day,
  A woefu' day it was to me;
For there I lost my father dear,
  My father dear, and brethren three.

かの　いとしき　インヴァネスの　乙女
  よろこび　たのしみ　露知らず
ああ　乙女子　泣きぬ　朝な　夕な
  涙辛く　また辛く　めしいと　なるばかり
コローデンの　沼地　コローデンの　戦い
  それは何たる厄日ぞや　われに　とりても
コローデンの沼地にて　失えり　父を
  わが父を　なつかしの　はらから三人をも

Their winding-sheet the bluidy clay,
  Their graves are growing green to see;
And by them lies the dearest lad
  That ever blest a woman's ee !
Now wae to thee, thou cruel lord,
  A bluidy man I trow thou be;
For mony a heart thou hast made sair,
  That ne'er did wrang to thine or thee.

血ぬられし　コローデンの　土ぞ
  まといし　きようかたびら
草地の　墓所　　目に　　しみて
  いとしの　若びと　　眠りいぬ
うましきかたを　たたえ　おりしが
  汝　血に　飢えし領主に　禍の　あれかし
禍よ　汝に　汝こそ　残酷者と　信ずる
  多くの　わが　民草を　　さいなめり
  汝　並に　汝一族に　害をせざりし

1794.[3)]

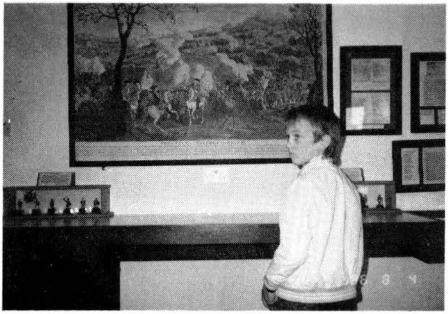
本　論

1746年4月16日。Hanover 軍9,000人を率いる Duke of Cumberland[4)] は，充分に訓練した18発の砲弾を，Prince Charles Edward,[5)] the Young Pretender の率いる the Highlanders 5,000 の陣地に向って浴びせた。是によって所謂 Battle of Culloden が火蓋を切られた。

火器の攻撃を避けようとしている the Highlanders に大きな打撃を与えた。

現在，現地に設置されている National Trust for Scotland の内部に掲示されている絵画もそれを物語っている。

National Trust for Scotland
CULLODEN
VISITOR CENTRE



Cumberland の9,000の兵は50歩間隔に２列に展開し，騎兵と Highland の不正規兵を予備軍として擁していた。この配置は戦闘を有利に導いた。Prince Charles 軍に対決して，第一線はひざまずき，第二線はしゃがみ，第三線は立っての応戦の構えであった。

Cumberland は，Rrince 軍の右翼から攻め込み，銃剣で以てとどめをさした。

一説によれば，４月15日のこと，The Duke of Cumberland は，Nairshire の Moray of Frith 湾に臨む，州都 Nairn の陣営内で25才の誕生祝賀会を行っていた。8 miles の夜の行軍は，兵士たちに疲労困憊（ひろうこんぱい）をこうむらせ，思うにまかせず元の位置に引き返すの止むなきに至り，しかも飢餓の苦しみさえ加わり，陣営の祝賀会攪乱はおろか，多勢を意識して戦闘の不首尾を予感して戦闘精神 fighting spirit を喪失させてしまったのが，Prince Charles 軍敗北の原因であったとも分析されている。

（館内廊下に設けられた The Duke of Cumberland の人形像。足下に Drumossie の moor をしつらえている。）

戦闘的には Cumberland 軍の musketry〔mvskitri〕fire[6]（マスケット銃射撃）に圧倒されてしまった。Charles 軍を守っていた城壁を the dragoons「竜騎兵」が打ち破り，別部隊が後方から攻めあぐみ，あえなくも鋏打ちになってしまった。Charles 軍は outflanked 裏をかゝれ，敗走した。

この Battle of Culloden にて，又その後の追い討ちによって，約1,000名の将兵を失い，又ほゞ同数の捕虜がかぞえられる。

Cumberland 軍は，戦死者僅かに50名，傷つけるもの200名のみであった。Charles 軍の20分の1の被害という尠さであった。その開きの実に大きい事は明らかである。

是で以て，Britain 内での戦いは終りとなった。

（是は Prince Charles Edward, the Young Pretender の戦死せる将兵の cairn[7]〔kɛrn〕（Scottish Gaelic）石塚の，今日も残っている現況である。阿鼻叫喚のすさまじい血の海に倒れている兵の何人なるやその氏と名が認められなかった。着する tartan〔tá:tən〕によってその clan[8]（部族・氏族）を石に刻みとむらったのであった。かかる巨大な cairn の他にないことを以っても，如何にこの戦闘の悲惨なものであったかが，推測されるわけである。）

Nicol を伴って，この Culloden Moor, Inverness-shire を訪れた詩人は，この激越調の作品を物したわけである。 Drumossie day と謳った「時」こそ，1746年４月16日である。今も Scottish people は 'Butcher Cumberland'「牛殺しのカンバランド」と憎々しく呼称して，今日も一部に残る対 England 感情を消し得ないのである。

戦死者1,000名には，家族が残されている。それが，A waefu'day it was to me;/For there I lost my father dear,/My father dear, and brethren three と四人の戦死者を一家から出したという計算になる。

若い兵士の恋人たちには，一層の同情を寄せている。

The lovely lass o Inverness,
  Nae joy nor pleasure can she see;
For e'en and morn she cries, alas !

と溢れる涙を禁じ得ない心境を詩に托していることがわかる。

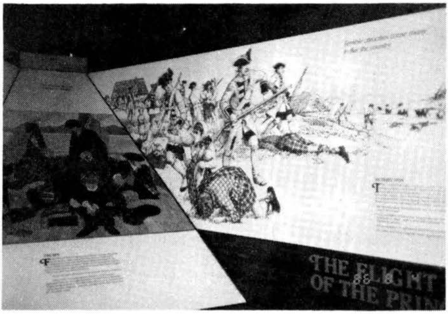
詩人は，Blind Harry[9] 作の Wallace 伝を読んで，"poured a Scottish prejudice in my veins,which will boil along there till the flood-gates of life shut in eternal rest"「私の血管にスコットランド人のひがみが流れ込んだ。命の水門が永遠に閉まるまでは，煮えることであろう。」と述べている。この意識は，この作品の中にも再発しているのである。

"And aye the saut tear blins her ee;" に托して，自からの無念さをはらしていると解釈できるであろう。

Culloden の Visitor Centre には，史実に基いた詳細なる slide が用意されている。死体累々たる凄絶には目を覆うものがあって，

Their winding-sheet the bluidy clay,
Their graves are growing green to see

が，決して hyperbole 誇張ではないであろう。



（The Highlanders の惨めな敗北を描き得て悲壮である。Musket 銃を否めない事実と見える。この戦いでは，劣勢であった Edward 軍を，身贔屓（みびいき）に取扱って，客観性を決して失っていないという事に注目すべきであろう。）

Cumberland[10] の祝賀宴奇襲は，部将 Lord George, Murray（1694～1760）を伴ったのであった。Murray は，John, 1st duke of Atholl の５男として，1694年10月４日，Perth の近くの Huntington に生れた。

1712年，18才の時に，軍籍に入った。４年後，1719年 the battle of Glenshiel の戦いで負傷し，Rotterdam に逃亡した。1724年 Scotland に戻り，許されて1745年迄 Tullibardine に落ち着いた。Culloden の敗北後も，残留部隊を指揮していたが，Prince Charles が断念したので，軍務から離れる事となった。[11] Murray は国外に逃亡し，1760年10月11日 Holland で死亡した。66才の年であった。波乱万丈の生涯にしては，当時としては，比較的長寿が保てたとも言えるであろう。Culloden の敗北，両者の間には，何となくしっくりしないものが生じたようであって，敗け戦は残余も苦しいものであったと推測されてもよいであろう。

王権獲得という年来の宿望は遂に実現されない事となった。父は James Edward Stuart（1688－1766）であり，The Old Pretender とも呼称された。

James II (在位1685－1688)

|　　名誉革命

James Edward Stuart (1688－1766)

(The Old Pretender) 老僣王

|　　(ろうせんおう)

Charles Edward Stuart (1720－1788)

(The Young Pretender) 若僣王,

小王位羨望者

The Young Chevalier

〔ʃévəlíər〕

< OF *chevalier*

結論にかえて

敗戦の将が，後世において，英雄視され，あまつさえ敬仰されることがある。Prince Charles Edward の場合もまたその例外ではない。彼は今日の肖像画も伝えているように，容姿きわめて端麗で気品に満ちていた事もその原因の一つでもあろう。

それは凝縮されて the poet Robert Burns の琴線を奏でさせて，綺譚的要素が横溢している。Scotch の血たぎる patriotic song とも考えられる。

Charlie He's My Darling

チャーリーこそ　愛するもの

1

Twas on a monday morning,

Right early in the year,

That Charlie came to our town,
  The young Chevalier.
それは　　月曜日の　朝のことであった
　　　全く　　その年も　　早く
チァーリーこそ　　わが町に　やって来た
　　　　　若　偺　王

(Refrain)
An, Charlie he's my darling,
My darling, my darling,
Charlie he's my darling,
　　　　The young Chevalier.
（折り返し）
チァーリーこそ　わが　愛するもの
わが　いとしくとも　かわいいものよ
チァーリーこそ　わが　愛するもの
　　　　　若　偺　王

2

As he was walking up the street,
  The city for to view,
O there he spied a bonnie lass
  The window looking thro'.
チァーリーが　通りを　歩いていると
　　　　　町を　見ようと
おうチァーリーがきれえな娘ッ子をみつけた
　　　　窓辺に　　見下ろす

3

Sae light's he jumped up the stair,

And tirled at the pin;
And wha sae ready as hersel,
To let the laddie in.
チァーリーは　　階段に　ひらりと上り
かぎを　　カタカタ　いわせた
そこで　娘ッ子は　　よろこんで
若王を　　招じ　入れた

4

He set his Jenny on his knee,
All in his Highland dress;
For browlie weel he ken'd the way
To please a bonnie lass.
チァーリーはジェニーをひざに　すわらせた
チァーリーは　ハイランドの　晴衣党
チァーリーは　よくよく　こころえていた
きれえどころの　　ご気嫌とりを

5

It's up yon heathery mountain,
And down yon scroggy glen,
We daur na gang a milking,
For Charlie and his men.
あなたに高く　ヒースのおい茂る山
あなたに　低く　かん木の　茂る谷
私たちは乳しぼりに　出かけようともしない
チァーリーと　　そのけらいのために

1794.[12]

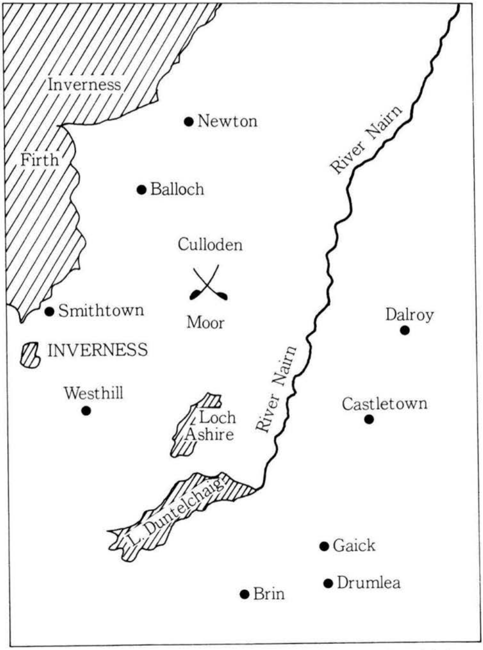
因に， Stanza 3 の l. 2 の And tirled at the pin に対して， Edinburgh ; William Paterson 版には，次のように解説を加えている。

A "risping pin", fixed on the back of house doors, was a notched rod of iron, with loose ring attached; this made a loud ricketting noise, on being drawn up and down. The old ballad of the *Gey Cock*, thus refers to it: —

So up Johnie rose, and to her door she goes,

And gently tirl'd at the pin.

かの偉大なる文豪 Sir Walter Scott の何より愛誦の詩であった事が，真価を証明する。



Outline map of the ancient battle field and its vicinity

Notes

1) Inverness〔invərnés〕: The Grampian Hills（Ben Nevis 山最高1344m）以北の所謂 Highlands の Inverness-shire の首都で sea-port で Moray Firthに臨む。語源的には the mouth of the river Ness であって Gaelic の*Inbhir-nis* に当る。人口約３万。

2) Cullodden : Inverness-shire の Drummossie の北東部にあたる。Inverness から約 6 miles の東部にあたる。

3) 1794年, London へ出るようにすゝめられた死期あと２年に迫る35才当時の作。２年後 Johnson の 'Scottish Musical Museum' に入れらる。

4) The title of duke of Cumberland has been held from 1644 by various members and connections of the English royal family. (Encyclopaedia Britanica)

5) Charles Edward, The Young Pretender (1720～1788), known also as the "Young Chevalier," was the last serious Stuart claimant to the British throne (E. B) 先代 James II（在位1685～1688）が失った英国王位恢復をこころざしたが成功しなかった。

6) musket〔mʌ́skit〕: < F *mousqet*, < L *musc-am* ; 16thC に用い始めた銃腔に旋条のない歩兵銃であって，今日の rifle 銃の前身と考えられる。(研究社英和)
A hand-gun of the kind which infantry soldiers are armed. (OED)

7) cairn : a pyramid of rough stones, raised for a memorial or mark of some kind, as a memorial of some event, or a sepulchral monument over the grave of some person of distinction. (OED)

8) clan : a group of fundamental importance in the social structure of many societies in which membership is socially defined in terms of unilineal descent, either matrilineal or patrilineal. (E.B.)

By Highlanders the battle is sometimes described as the battle of Drummossie. Several memorials, including a tall cairn, have been erected, and scattered stones inscribed with names of clans act as grave markers of fallen highlanders. (E.B.)

9) Blind Harry (Hary) : Scottish poet. Scotland の勇士 Sir William Wallace を唄った12,000行の長篇史詩がある。The Minstrel Henry とも呼称されている。(The Kenkyusha Dictionary of English and American Literature.)

10) The title of duke of Cumberland has been held from 1644 by various members and connections of the English royal family. (E.B.)

11) The original copies of Lord George Murray's "orders at Culloden" which are in existence, contain no injunction to refuse quarter.

Charle's belief in the general's treachery was shared by several leading Jacobites, but there appears no ground for the suspicion. (Ibid)

12) Carolina Nairne〔nɛərn〕(1766～1845) が, Burns につづいて、やはり Charlie

を歌った。彼女は Scotland の ballad 作者である。1806年 William Nairne 少佐と結婚した。彼女の諧謔性と哀愁性は Burns に通ずるものがある。このほか，The Land o'the Leal, The Laird o' Cockpen, etc. も傑作であり，死後それらの作品が集められて **Lays from Strathearn** (1846) となった。

Oh, Charlie Is My Darling

おお　いとしの　チァーリー

Oh, Charlie is my darling, my darling, my darling,
Oh, Charlie is my darling, the young Chevalier !
おお　チァーリーこそ　わが　愛するもの
　　わが　いとしくも　かわいいものよ
おお　チァーリーこそ　わが　愛するもの
　　　　　　　　　　若偕王よ　！

1

'Twas on a Monday morning,
Right early in the year,
When Charlie come to our town,
　　　　　　the young Chevalier !
Oh, Charlie is my darling, my darling, my darling !
Oh, Charlie is my darling, the young chevalier !
それは　月曜日の　朝のことであった
全く　その年も早く
チァーリーが　わが町に　やって来た
　　　　　　　　　　若　偕　王！
おお　チァーリーこそ　わが愛するもの
　　わがいとしくも　かわいいものよ
おお　チァーリーこそ　ゎが愛するもの
　　　　　　　　　若　偕　王！

2

As he came marchin' up the street,
The pipes play'd loud and clear,
And a' the folk cam' rinnin' out to meet the Chevalier !
Oh, Charlie is my darling, my darling, my darling,

Oh, Charlie is my darling, the young Chevalier !
彼が　街を　　練り歩く時
笛が　高く　澄んで　　鳴った
そして　おお　人々は　若僣王を
迎えにかけだして来た
おお　チァーリーこそわが　愛するもの。
　　わが　いとしい　かわいい　ものよ
おお　チァーリーこそ　わが　愛するもの
　　　　　　　　　　　　若　僣　王　よ！

3

Wi' hielands bonnets on their heads,
And claymores bright and clear,
They came to fight for Scotland's right,
And the young Chevalier,
Oh, Charlie is my darling, my darling, my darling,
Oh, Charlie is my darling, the young chevalier !
ハイランドの　　つばなし帽を　かむり
とぎすました　　太刀を　かざして
みなは　　スコットランドの　正義と
若僣王の　ために　たたかいに　来たのだ
おお　チァーリーこそ　わが愛するもの
　　　　　わがいとしくもかわいいものよ
おお　チァーリーこそ　　わが愛するもの
　　　　　　　　　　若　僣　王　よ！

4

They've their bonnie Hieland hills,
Their wives and bairnies dear,
To draw the sword for Scotland's lord,
　The gay Chevalier !
Oh, Charlie is my darling, my darling, my darling,
Oh, Charlie is my darling, the young Chevalier.
人々は　美しいハイランドの丘を　あとにした
愛する妻も　子供をも　　残して

スコットランドの王のために剣を抜こうと
粋な　僣王よ！
おお　チァーリーこそ　わが愛するもの
わがいとしくも　かわいいものよ！
おお　チァーリーこそ　わが　愛するもの
若　僣　王　よ！

5

Oh, there were mony beating hearts,
And mony hope and fear,
And mony were the pray'rs put up
For the young Chevalier !
Oh, Charlie is my darling, my darling, my darling !
Oh, Charlie is my darling, the young Chevalier.
おお　胸は　高鳴り
望みも　あったし　うれいも　あった
捧げる　祈りも　たび　たびで　あった
これみな　若僣王の　ために！
おお　チァーリーこそ　わが愛するもの
わがいとしくも　かわいい　ものよ！
おお　チァーリーこそ　わが愛するもの
若　僣　王よ！

To draw the sword for Scotland's lord ; And claymores bright and clear, et al 女性ながら，仏愛国女丈夫 Jeanne D'Arc (俗にオルレアンの少女) の救国の精神を高揚している事は，若僣王の胸中を描出し得て，表出力に溢れるものがある。

或意味において，国歌 national anthem でもあり，patriotic song「愛国歌」とも考えられ，Burns と Nairne が，握手以て創作したとも考えられ，その精神は，Culloden の敗北を教訓により止揚されたと解釈し得るであろう。

（追記） The Lovely Lass O' Inverness において Johnson は "lover's ee" としているが，the British Museum にある Burns の The original MS にはやはり "woman's ee" となっている。

Bibliography

Toshio NAMBA : A Study of Scottish Folk Songs, 1952, Tokyo.

W. Paterson : The Works of Robert Burns, Edinburgh, 1875.

J. A. Mackay : The Complete Works of Robert Burns, The Burns Federation, Subscriber's Edition, 381, 1986 : through the courtesy of Mr. Donald Blamey, Fife, Scotland Encyclopaedia Britanica, Vol. 6

Compliments : 1986年 8 月上旬中，Scotland 現地において，University of Edinburgh の Dominie Kozo Hoshino より，懇切丁寧なる種々の教示を給わりし事を満腔より感謝してやまない。

先生の御指導なくば，この小論の筆は起きなかったであろう。Seeing is believing を痛感したしだいである。

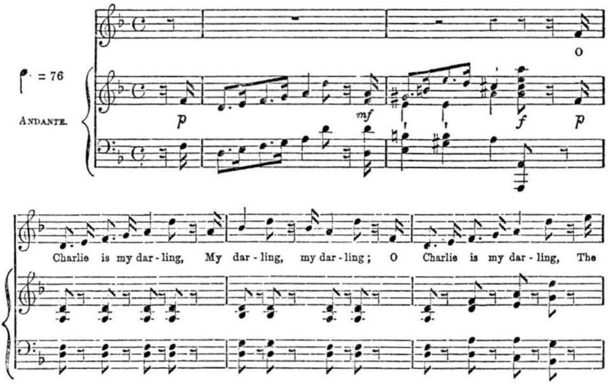
補遺

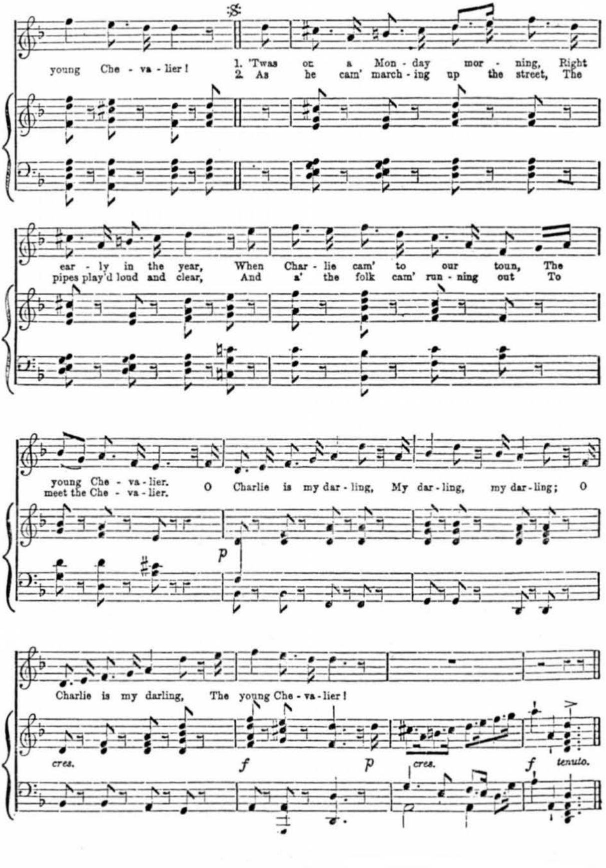
Burns は1787年 9 月 9 日（木）現地を，Nicol と一緒に訪ねた。（P. 4）。このことが同地の Kingsmills Hotel に肖像画と共に掲示されている。

僣(僭)王：身分をこえて帝王の名を称するもの（広辞苑）

O CHARLIE IS MY DARLING.

THE ACCOMPANIMENT BY G. A. MACFARREN.





young Che - va - lier!
1. 'Twas on a Mon - day mor - ning, Right ear - ly in the year, When Char - lie cam' to our toun, The young Che - va - lier.
2. As he cam' march - ing up the street, The pipes play'd loud and clear, And a' the folk cam' run - ning out To meet the Che - va - lier.
O Charlie is my dar - ling, My dar - ling, my dar - ling; O Charlie is my darling, The young Che - va - lier!
p
cres.
f
p
cres.
f
tenuto.

闇への回帰

宮沢賢治『ひかりの素足』論

石川教張

一　『ひかりの素足』の位置

宮沢賢治の童話に、『ひかりの素足』と題する作品がある。(1)

賢治は、この作品の草稿表紙に「凝集を要す　恐らくは不可」「余りにセンチメンタル　迎意的なり」(2)と書きしるしており、再三にわたって推敲を重ねながらも、なお意に充たないまま未定稿としてとどめ置いたものである。

『ひかりの素足』は、次のような筋立てになっている。

兄弟の少年が凄絶な吹雪に遭遇し仮死状態になる。その間に恐ろしい闇の世界を経めぐり、鬼に追い立てられ傷つきながら「うすあかりの国」を歩いて行く。そこに立派な素足の人が出現する。すると闇の世界は瞬時に明るい光の国に転変する。凍死した弟は光の国にとどまり、弟思いの兄は「ほんたうの道を習え」と語る立派な大きな人の言葉

にしたがって、もとの世界に戻って行く―。

人間はいかに苛酷で厳しい運命に直面せねばならないか、生と死の闇を遍歴する人間にとって救いの光とは何か、人間は何をするために生きるのか、という根本的な命題を問いかけつつ、想像力の具現によって人間の生と死と再生のドラマを描き出そうとしたのが、『ひかりの素足』に流れる主題である。

この作品については、すでに寺田透氏によって「『水仙月の四日』と『ひかりの素足』は、かくて、わが国の雪嵐をえがいた文学作品として当然最高のものになったのである」(3)という評価がなされているが、この作品は賢治童話の中の白眉であるばかりでなく、「法華文学」の代表作品であると考えられる。

『水仙月の四日』は、大正十一年一月十一日(賢治二十六歳)に書かれた作品であり、『注文の多い料理店』に収録された童話として知られている。賢治の記した『注文の多い料理店』の「広告ちらし」によれば、『水仙月の四日』は〈赤い毛布を被ぎ、「カリメラ」の銅鍋や青い焔を考へながら雪の高原を歩いてゐたこどもと「雪婆ンゴ」や雪狼、雪童子とのものがたり」と紹介されている。(4)雪狼を連れた雪童子は、死をもたらす雪婆んごの命令によって激しい吹雪を巻きおこすことを宿命的な役割としているが、雪婆んごをあざむいて雪嵐の中で泣き叫ぶ人間の子供を救うために駈け出し、やがて吹雪がやんだのち、雪童子は「眼をおさまし」と仮死状態の子供に語りかけて再生させる点を示した作品である。

『水仙月の四日』と『ひかりの素足』は、いずれも壮烈な雪嵐を描いてはいるが、前者が雪童子の側に立って人間の子供を再生に導く物語として展開されているのに対して、後者は人間の子供に即して、雪嵐によって遭難する運命に直面した兄弟の生と死の悲傷をとらえ、しかも弟の死と救済およびもとの世界に還帰する兄の再生の意義を明らか

にしている。
しかも、『ひかりの素足』では前半部の雪嵐による遭難体験を序曲として、後半部においては、恩田逸夫氏が指摘したごとく、「時空を超越してしかも包括する永遠性の意識によって世界の真姿を把握しようとする考え方」(5)にもとづいて闇の世界から「光の国」に再生し、さらにもとの世界に使命を背負って旅立って行く点を主眼として描かれているのである。
この生と死および再生のありようという問題に関して想起されるのは、『銀河鉄道の夜』である。(6)賢治童話の頂点をなす長篇の劇詩ともいうべき『銀河鉄道の夜』の筋立てだけに言及するならば、少年ジョバンニが星まつりの夜に入水した友達のカンパネラと一緒に銀河鉄道に乗り、「おかしな十字ばかりの字を印刷した」、不完全な幻想第四次の銀河鉄道の彼方のどこまでも「ほんたうの天上へさへ行ける切符」「天上どこぢゃない、どこでも勝手にあるける通行券」(7)を持って天上界を次々にめぐり、やがてカンパネラとも別れて地上の現実世界に帰って来る物語として示されている。
「さあ、切符をしっかり持っておいで。お前はもう夢の鉄道の中でなしに本統の世界の火やはげしい波の中を大股にまっすぐに歩いて行かなければいけない。天の川のなかでたった一つの、ほんとうのその切符を決しておまへはなくしてはいけない」(8)。この「セロのやうな声」の語った言葉が、ジョバンニにおける人間精神の生まれかわりの契機を明らかにしている。ここから、さらに「僕きっとまっすぐに進みます。きっとほんとうの幸福を求めます」(9)と力強く語るジョバンニの誓願が表明されるのである。
『ひかりの素足』の後半部には、立派な素足の人から、兄の一郎が「ほんたうの道」を探求し習学して行くよう告

げられて現実世界へと回帰する点が示されており、これは『銀河鉄道の夜』と主題を共有したものと考えられる。『ひかりの素足』と『銀河鉄道の夜』には、生者と死者とが共存し救われる者と救う者とが交感する、現在から未来をも包摂した永遠なる時間と精神の軌跡とが意識されているのである。

この意味では『水仙月の四日』から『ひかりの素足』への連関が雪嵐を描いた文学作品の系列と見なされるのに対し、『ひかりの素足』から『銀河鉄道の夜』への歴程は四次元延長の芸術化に他ならず、それは永遠なる時間に包まれつつ「ほんたうの幸福」を希求した賢治の心象を投映させる最も宗教性に富んだ文学作品の形成過程であったといえよう。

二　生と死と再生

『ひかりの素足』の登場人物は、一郎と楢夫（ならお）とよぶ兄弟であり、白く光る素足で歩いて来た〈立派な大きな人〉である。

兄弟は、山小屋から家まで帰ろうとする。ちょうど一時間半ぐらいの距離である。月光が白雪をまぶしく照らす冷たく寒い山道を兄弟は進んで行こうとする。一郎は、霜やけで赤くふくらんだ楢夫の両手を包んで暖めてやるほど弟思いの兄である。「向ふの山の雪は青ぞらにくっきりと浮きあがり見てゐますと何だかこゝろが遠くの方へ行くやうでした」。このなにげない描写は、雪山の彼方に吸いこまれてゆくのではないか、という運命の予兆を垣間見させる言葉であろう。

その雪山の頂に突如として「パッとけむりか霧のやうな白いぼんやりしたものがあらはれ」鋭い笛のような声を聞いて弟がしくしく泣いたのは、風を吹きつける「風の又三郎」の「どっどどどうど　どどうど　どどう、ああまいざくろも吹きとばせ　すっぱいざくろもふきとばせ　どっどどどうど　どどうど[10]　どどう」という歌の通りに激しい風が咆えるように吹いていたからであり、雪婆んごが雪童子に命令して吹雪を吐かせながら子供の「一人や二人とったっていゝんだよ」[11]と叫んだような、苛酷なまでに人間を責めたてる自然の暴威におびえる少年期の不安な心象を表わすものであろう。

楢夫は、「怖っかなぃ」と言いながら泣きじゃくる。「お父さんおりゃさ新しきもの着せるって云ったか」「それがらお母さん、おりゃのごと湯さ入れで洗ふて云ったか」「それがらみんなしておりゃのごと送って行ぐて云ったか」。泣きながら、次々に兄に尋ねる弟の言葉もまた、弟が恐怖に包まれながら死の予感におののいてゆく心の推移を暗示している。

兄は泣きやまない弟を「泣ぐな。な、泣ぐな」となぐさめる。一緒に出発した「馬を引いて炭をおろしに来た人」が立話をしているのを待ちきれず、兄弟は早く帰りたい一心でどんどん歩き出し雪の山道を登って丘に着く。そこは、いちめんまっ白な雪であったが、「たいへんくらく沈んで見え」、空は白い雲でふさがり太陽も曇って光っている。しかも「じつにしぃんとしてなんともいへないさびしい」場所であった。

これは、兄弟二人の孤絶した寂しさと、まさに兄弟に襲いかかろうとする自然の脅威をうかがわせている。

やがて、雪が落ちてくる。兄弟は峠の頂をめざして急いでかけ登って行く。雪はいっそうひどくなり、来た方も行く方も見えなくなり兄弟の体もまっ白になった。二人はようやく、しんと静まりかえる峠の頂にたどり着いた。だが

その時、にわかに風が吹いて雪を舞いあげた。一郎は泣いてしがみつく楢夫をかばいながら吹きだまりをぬけ、自分もつまずいては起き、ころんだまま泣いている弟をだき起し、励ましながら歩いて行く。「雪がどんどん落ちて来ます。それに風が一さうはげしくなりました。二人は又走り出しましたけれどももうつまずくばかり一郎がころび楢夫がころびそれにいまはもう二人ともみちをあるいているのかどうか前無かった黒い大きな岩がいきなり横の方に見えたりしました。風がまたやって来ました。雪は塵のやう砂のやうけむりのやう」。二人は、もう道を歩いてはいなかったのである。

「『泣ぐな。雪はれるうぢ此処に居るべし、泣ぐな』一郎はしっかり楢夫を抱いて岩の下に立って言いました。」

「一郎は毛布をひろげてマントのまま楢夫を抱きしめました」。凄絶な雪嵐の中を彷徨する兄弟。それは、冷厳な現実世界の闇にひきずりこまされ、死の深渕に落ちこんでゆく運命に直面したことを意味している。

ついに一郎は「ほんたうに二人とも雪と風で死んでしまふのだ」と考える。

「一郎はいつか雪の中に座ってしまってゐました。そして一さう強く楢夫を抱きしめました」。

人力の遠く及ばない雪嵐の苛烈さによって苦難の底に沈んでいった二人。白雪の舞い荒れる吹雪のなかに次第に広がる闇の世界。それは、思いもかけずに踏み迷った人生の道のけわしさと非情さを表わしており、生から死に至るきびしい現実がつきつけられたということであろう。

しかし、その苦難のさなかにも、決して失われることのない、幼い弟を守りぬこうとする兄の心情が冷寒とした寂廖さに一筋の光をともしつづけているのである。

三　地獄めぐりと兄弟愛

仮死状態になった一郎は、すさまじい現実が「まるでまるで夢のやう」に感ずる別世界をただ一人鼠色の布片一枚を体に巻きつけ〈はだし〉で歩いている。そこは、「変なおそろしい」国であった。深い傷をうけて血を流しながら一郎は「楢夫ぉ」と叫ぶ。おそろしくて泣きながら叫ぶ一郎は、「兄な」というかすかな声を聞くと走って走って泣いている弟のそばにかけより弟を抱きしめた。楢夫は「死んだんだ」と言って激しく泣くのであった。

一郎は、向うにある「ぼんやりした白びかりが見える」場所をめがけて、痛む足を引きずり歯をくいしばり弟を助けながら倒れては起き上って走って行く。

その時、一郎が立ちすくんで見たものは、痛ましいなりをした子供がぞろぞろ追われて行く光景であった。わずかな灰色のきれを体につけるだけの子、やせて青ざめて眼ばかり大きな子などが体を前に曲げおどおど恐れ、ため息をつき声を立てないで泣きながら、傷ついた足を引きずって追われるように走っている驚くべき様子であった。

この子供たちを追いたてているのは、「顔のまっ赤な大きな人のかたちのもの」であった。ただれたような赤い眼をした鬼である。鬼は太い鞭(むち)を振り鳴らし、よろめいて「痛いよう。おっかさん」と泣き叫ぶ子供を打ちすえている。

やがて兄弟がその列に入れられ追いたてられながら見たものは、闇にうごめく恐しい世界であった。そこには、刀の刃(やいば)のように鋭い髪の毛で体がおおわれて少しでも動けば体を切る「闇の中のいきもの」がいた。地面はまっ赤で、野原の草は鋭くとがり瑪瑙(めのう)の破片のようであった。歩くたびに足は切られ傷つき、倒れると鬼が鞭の音をひびかせる。

この痛い地面を子供たちは〈はだし〉でよろよろ追い立てられて「うすあかりの国」まで歩いて来る。

この「うすあかりの国」に至る道程は、現実と他界、此岸と彼岸との境界領域つまり、中有（ちゅうう）にたどり着いたことを示している。(12) だがそこはなお恐しい地獄の延長なのである。地獄は、いろいろな罪を犯したものの堕ちる所とされている。

そこでは、地獄の鬼によって鉄の杖や棒などで頭から足の先まで突き砕かれ砂団子のようにされたり体を引き裂かれるなど、ありとあらゆる責苦を受ける。罪人が地獄の鬼に〈どうしてそんなに無慈悲なのか〉と訴えても、鬼は〈おまえは悪行不善のわざをして今その報いを受けている。後悔しても及ばぬ〉といい放つ。こうして長い間、八熱地獄と八寒地獄で死んでは生き、生きかえっては死んでいかなければならない。恨みや嫉みに心を焦した者は八熱地獄に堕ちて身を何度も焼け焦され、ものを盗み父母をさげすんで自分だけ暖衣飽食した者は、ひどい寒さに責め立てられ身は紅蓮のように赤くふくれてわななきながら苦しみをくり返す。

兄弟が吹雪に責められたのは、現実に寒地獄のなかへ沈んでいったことに他ならない。兄弟をふくむ子供たちが鋭くとがった地面を地獄の鬼に追い立てられ血だらけになって歩くさまは熱地獄めぐりの過程をものがたっている。

「楢夫などに何の悪いことがあってこんなつらい目にあふのか」と考える一郎。

「私たちはどこへ行くんですか。どうしてこんなつらい目にあふんですか」とたずねる楢夫。しかし、地獄の鬼は一郎に「罪はこんどばかりではないぞ。歩け」と叫ぶ。

兄弟や子供たちがどんな罪を犯したのか、ここでは明らかではない。おそらく、知らず知らずのうちに生きものをむやみに殺したり、人を傷つけたことがあったということであろう。罪の恐しさは、知ってやったことよりも無意識

で罪をつくってしまうことにある。その報いとして地獄に堕ち足を傷つけながら歩かねばならない。それは「自分で自分を傷つけた」ものなのである。

だが、そうした子供たちのなかで一郎はどんな時にも弟を忘れることがない兄弟愛の持ち主であった。一郎は楢夫の姿を見ては悲しみ「何べんも楢夫の名を低く叫び」、弟を鞭打とうとする鬼の手にすがりついて、「私を代りに打ってください。楢夫はなんにも悪いことがないのです」と叫ぶのであった。

一郎は、弟のためなら自分がその苦しみをかわって受けようとする「代受苦（だいじゅく）」の心を表わすのである。それはまさに困難の時にこそなすべき無私の自己犠牲の尊さを示したものであった。鬼が「ぎょっとしたやうに」一郎を見たのは、そうした純粋な心意から発せられた言葉が地獄堕ちの罪を消しさる重みを持ち地獄の鬼に衝撃を与えるものであったからであろう。

> 「歩け。」鬼が叫びました。鞭が楢夫を抱いた一郎の腕をうちました。一郎の腕はしびれてわからなくなってただびくびくうごきました。楢夫がまだすがりついていたので鬼が又鞭をあげました。
> 「楢夫は許して下さい、楢夫は許して下さい。」一郎は泣いて叫びました。
> 「歩け。」鞭が又鳴りましたので一郎は両腕であらん限り楢夫をかばひました。かばひながら一郎はどこからか「にょらいじゅうりゃうぼん第十六。」といふやうな語がかすかな風のやうに、又匂のやうに一郎に感じました。するとどうも何だかまはりがほっと楽になったやうに思って、「にょらいじゅうりゃうぼん。」と繰り返してつぶやいてみました。すると前の方を行く鬼が立ちどまって不思議さうに一郎をふりかへって見ました。列もとまりました。ど

う云ふわけか鞭の音も叫び声もやみました。しぃんとなってしまったのです。気がついて見るとそのうすくらい赤い瑪瑙の野原のはづれがぼうっと黄金いろになってその中を立派な大きな人がまっすぐにこっちへ歩いて来るのでした。どう云ふわけかみんなはほっとしたやうに思ったのです。

一郎は、自分のことを忘れて、ひたすら弟をかばう。その一郎は、「にょらいじゅりゃうぼん」とくり返しつぶやく。鬼が「不思議さうに」一郎を見たのは、これまで地獄の鬼たちが聞いたことすらない〈まことの言葉〉[13]にただちに呼応できる素直さを一郎が持っていたからである。

四　立派なすあしの人と光の国

「にょらいじゅりゃうぼん第十六」—それは、賢治の帰命(きみょう)した〈万物最大幸福の根源〉〈一切現象の当体〉[14]であり「まことの心」をあかしている法華経の如来寿量品のことである。

如来寿量品は、法華経の肝心かなめであり仏教の骨髄である。[15]そこには、衆生救済に励む仏の永遠の命が示されている。仏は、「私はつねにこの世界に住んでいる」と語り、すべての苦しみ悩む者を救おうとする。背信の罪を消滅させ良薬をこの世に留めて病める子を救助し、浄らかに輝く仏の国土にいっさいのものを導こうと誓い、生きとし生けるものに慈悲をそそいでいる。この内容を説く如来寿量品には仏の限りない大慈悲心を結晶し、すべてのものを仏の浄土に生まれかわらせていく功徳が説かれている。

それゆえに如来寿量品第十六と語る言葉が聞えた時、うす暗い地獄は黄金色の浄土と化し、みんなが「ほっとした」り地獄の鬼たちが一瞬にして罪の責苦をやめてしまったのは、すべての子供や鬼が法華経の永遠なる救済世界に包摂されたからである。

この如来寿量品第十六の語を香風のように語った立派な大きな人は、「貝殻のやうに白くひかる大きなすあし」でまっすぐ一郎たちの前に歩いて来た。その白くて柔かいすあしは、鋭い瑪瑙のかけらや燃える赤い火を踏んでも傷つかず灼けることがない。この〈光るすあし〉の立派な人が〈にょらいじゅりゃうぼん第十六〉と唱えつつ歩みよってきたことによって、地獄は浄土に変転したのであった。「うすあかりの国」は瞬時のうちに「光の国」になったのである。

「にょらいじゅりゃうぼん第十六」と語ってまっすぐこちらにやって来たその人は、青い蓮のような瞳で子供たちを見つめ微笑しながら「こわいことはない。おまへたちの罪はこの世界を包む大きな徳の力にくらべれば太陽の光とあざみの棘のさきの小さな露のやうなもんだ。なんにもこわいことはない」とやさしく語る。立派な人は、苦しむものの前にやって来て救いさとし、みんなは一度に手を合せたのであった。

「世界を包む大きな徳の力」とは、万物の幸福をなしとげ不幸をも包みこんで幸いに転換させる一切衆生の帰趣すべき根源である法華経の広大な功徳のことである。この〈まことの力〉〈まことの光〉に包まれることによって、罪は霧のように消えさるのであった。

同時に、立派な人の前では、みな素直に合掌し鬼すらも手を合わせ頭を低くたれて帰命しないわけにはいかないのであった。鬼がいきなり泣き膝まずいて光る足を手でいただいたふるまいは、仏に帰命頂礼する姿を示すだけでな

く、地獄の鬼さえも救われてゆくこの巨きな光の人のそそぐ慈悲の深さ広さを意味している。

その人は又微かに笑ひました。すると大きな黄金いろの光が円い輪になってその人の頭のまはりにかゝりました。その人は云ひました。

「こゝは地面が剣でできてゐる。お前たちはそれで足やからだをやぶる。さうお前たちは思ってゐる。けれどもこの地面はまるっきり平らなのだ。さあご覧。」

その人は少しかゞんでそのまっ白な手で地面に一つ輪をかきました。

この光の輪もまた、光る立派な人のそそぐ無限不朽の智慧と慈悲の光明を象徴している。汚濁にまみれ苦しみにみちた暗い地獄の鋭く悲しい地面は、〈まことの光〉に照らされて見直せば一面が平らで明るく輝いている光の地面なのであるという。

そこには、飾りたてられた高い塔や建物がそびえ空中には橋廊が光ながらかかっており、宝石細工のような樹が立つている。たくさんの天人たちは楽器を奏でているし鳥は空中を翔(か)けている。地面は湖水のようになめらかに光っている。白いすあしの人は、立派な瓔珞をかけ黄金の円光を冠り微笑している。天人たちは花皿をささげ頭上から花びらを落している。

この描写は、如来寿量品に説かれる「我が此の土は安穏にして、天人常に充満せり。園林諸の堂閣、種種の宝をもって荘厳し、宝樹華果多くして、衆生の遊楽する所なり。諸天、天鼓を撃って、常に衆の伎楽を作し、曼陀羅華を雨

して、仏及び大衆に散ず」の経文を表現したものであることは疑いない。

これは、明るく輝いている浄土の光景である。まさに如来寿量品のあかした久遠の仏の常住する法華経の仏国土・寂光土に他ならない。この如来寿量品の経文を訳すと次のごとくである。〈私の国土は安らかで天人はつねにいっぱいいる。美しい花園、きれいな林がおいしげり、たくさんのお堂や楼閣たち並び、いろんな宝で飾られて、宝樹にはいっぱい美しい花が咲き匂い実をならし、人はみんな遊び楽しんで、天人は天の鼓を打ちならし、いつも音楽を奏でている。仏だけではなく悟りを求める人びとに、浄らかな曼陀羅華の花を雨のように降りそそぐ。私の浄土は美しくけっしてこわれることがない〉。(16)

賢治は、如来寿量品のこの一節を原文のまま書簡に書きつけたこともある。(17) その内容にもとづいて〈法華経如来寿量品の永遠なる寂光土〉を描写したことは明らかである。

この法華経の寂光土に導かれ大きな徳の力に包まれた時、地獄の苦はたちまちなくなり子供たちはみな「立派に変って」いったのである。立派なすあしの人のまっ白な手で頭をなでられた楢夫も「黄金いろのきものを着、瓔珞を着けてゐた」し、一郎の足の傷もすっかりなおって、まっ白に光っていたのであった。みんなは〈法華経の寂光土〉に生まれかわり「立派」になったのである。これは、楢夫や子供たちの救われた姿をものがたるものである。

五　無上菩提への橋梁

ここに描写されている光る素足の人物像をあらためて要約すれば、次の点を掲げることができる。

㈠まるで貝殻のように光る真っ白な大きなすあしの持主。それは、鋭い瑪瑙のかけらを踏んでも傷つかず、燃えあがる赤い火にも灼けず、地面の棘さえ折れない柔かいすあしである。
㈡青い蓮の花びらのような大きな瞳で凜乎として優しくみんなを見つめる人
㈢立派な瓔珞をかけ黄金の円光を冠っている「巨きな光る人」
㈣微笑しながら、まっすぐ「こっちへ歩いて来る人」
㈤恐しい鬼さえ、素直に手を合わせ首を低く垂れるほどの尊い人
㈥子供たちの傷を治癒し罪を消し去って立派な人にする「この世界を包む大きな徳の力」の体現者
㈦闇に覆われた地獄を瞬時に「光る国」に転換させ、天人の住む輝く浄土を眼前に顕現した人
㈧法華経の如来寿量品第十六を語り示した救い主
さらに、この後に次の点が示される。
㈨子供たちのほしがる図書館、運動場や菓子をあげ、本を読むがよいと教える人
㈩楢夫には「光る国」にとどまり学校に入るよう勧め、一郎に対しては弟思いの行為を称讃し、もとの世界に戻って「ほんたうの道」を探求し習って行くよう教えさとす人
㈠～㈢は、「立派な人」の風姿と徳性を指しており、㈣～㈩にはこの人物の尊さと救済行動を表わしている。現実の闇の世界を「光る国」とし、まことの徳の力をそそぐ光り輝く足跡を、〈ひかりの素足〉という象徴的なタイトルとして示したのであろう。
このような、もろもろの徳性を具備する人物は、すでに明らかな通り、釈迦牟尼世尊（釈尊・釈迦仏）以外にはあ

り得ない。しかも、法華経を説示し、如来寿量品を語った永遠なる釈尊を指している。
ここに掲げた徳性は、釈迦牟尼世尊の具備する仏の十号（如来・応具・正偏知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・仏世尊）をあます所なく示していると考えられる。
賢治は、釈尊の風姿と徳性について『四又の百合』で「正偏知はどんなお顔いろでそのお眼はどんなだらう、噂の通り紺いろの蓮華のはなびらのやうな瞳をしてゐなさるだらうか」「正偏知のお徳は風のやうにみんなの胸に充ちる」(18)と記している。また詩「昂」には次のようにうたわれている。(19)

金をもってゐるひとは金があてにならない
からだの丈夫なひとはごろっとやられる
あたまのいいものはあたまが弱い
あてにするものはみんなあてにならない
たゞもろもろの徳ばかりこの巨きな旅の資糧で
そしてそれらのもろもろの徳性は
善逝（スガタ）から来て善逝（スガタ）に至る

善逝すなわち釈尊が積み重ね釈尊によって体得された徳性を、永遠に「あてにする」よりどころの根源力や人生の旅の資糧となるものとして信受していた賢治の心意が、ここにも語られている。同時に、これらの徳性の眼目となる中心思想は、法華経に説きあかされているが、その肝要をあかしたものが、永遠の命をしるしとどめて衆生救済と娑婆世界の寂光土化の実現を示した如来寿量品である。この如来寿量品を語った唯一の仏は、釈尊のほかには存在しな

い。その釈尊への帰命の精神から、賢治は〈光の巨人〉の姿と心と救済行動を形象したのであろう。
こうした賢治の心象は、「大聖大慈大悲心、思へば泪もとゞまらず、大慈大悲大恩徳いつの劫にか報ずべき」[20]と告白されている。賢治が法華経を信仰した契機は、恐らく如来寿量品の説く釈尊の命の永遠性と光輝く寂光土の顕現の光景にふれ、父なる仏によって子供（衆生）の一人としての自己が救済される「大慈大悲」に感動した点にあったのではなかろうか。
ここから、「先づは静に大聖人（日蓮）の大慈悲をお伝へなされ如来の御思召をお語りなされ」[21]「文壇といふ脚気みたいなものから超越してしっかり如来を表現して下さい」[22]という友人に対する勧奨がなされたにちがいない。しかも賢治は自ら、「如来の御思召」を語り「如来を表現して」ゆくために法華文学の創作に取り組み、詩・童話によって法華経と釈尊の仏意を表現し、法華経と釈尊の信仰精神にもとづいて文学作品を形象し、さらに貧寒とした農村において、「誠の輝きの日が来る」ことを祈念しながら、「大地このまゝ寂光土と化す」道を直進したのである。[23]
また『ひかりの素足』には、賢治のユニークな法華経への認識が見られる。「本の本」というとらえ方である。この法華経の寂光土には、「あらゆる世界のできごとがみんな集まってゐる」博物館があり、図書館も運動場もチョコレートもある、と「巨（おお）きな光る人」は微笑しながら子供たちの質問に答え、子供たちの願いをかなえてあげようとする。そして「本はこゝにはいくらでもある。一冊の本の中に小さな本がたくさんはゐっているやうなのもある。小さな小さな形の本にあらゆる本のみな入ってゐるやうな本もある、お前たちはよく読むがいゝ」と、その「巨きな人」はいうのである。
ここに、〈本の本〉という注目すべき観点が語られている。これは少年ジョバンニが黒帽子をかぶった青白いやせ

た大人から、実験方法さえ決めれば「信仰も化学と同じようになる」といわれ本の頁に紀元二千二百年の地理と歴史が書いてある「頁一つが一冊の地歴の本にあたる」地理と歴史の辞典を示される『銀河鉄道の夜』の話と同義である。(24) 白いすあしの釈尊が教えた、たくさんのさまざまな本を包みこんだ〈本の本〉は、一切の根源である法華経を指していると考えられる。このことは、賢治が「元来妙法蓮華経が書いた妙法蓮華経です」と記したことにも符合している。(25)

歴史も科学や自然それに人間の生死も、つまり一切の現象はみな法華経という〈本の本〉の一頁に含まれているのだとする賢治の根本的立場がこの〈本の本〉という表現に示されている。だから〈本の本を読め〉ということは、法華経を読んで信の道、人生の一頁に〈まことの心〉を刻みつけるように生きよということであろう。『銀河鉄道の夜』に記された「十字ばかりの字」の書かれた自由自在にどこでも行ける切符とは南無妙法蓮華経の七字の題目のことではなかろうか。子供たちの食べる「立派な菓子」は、仏や天人たちより授けられた法華経の食べもの、すなわち〈巨きな旅の資糧〉にちがいない。

ところで、楢夫は寒地獄のなかで死んだ。それは悲しい運命であった。しかし白いすあしの人によって救われ「光の国」すなわち法華経の寂光土に再生しえたのであった。そして釈尊から母を見せてあげるといわれ、「こゝで学校に入らなければならない。それからお前はしばらく兄さんと別れなければならない。兄さんはもう一度お母さんの所へ帰るんだから。」とさとされる。リンゴのように赤くさっき光の国で一郎と別れたときのまゝ「かすかに笑ってゐた」楢夫の願は、「こゝろもちはやすらかに」たしかに少し笑いながら青く美しい星となって静かに燃えているようだかに通底しており、(26) 死んで死なざる心の安らぎを示している。それは、救われた楢夫が父母を想いつつ法華経の寂光

土でずっと仏道を学んでゆくことによって、法華経を資糧としながら死と再生の彼方にある永遠の救いを実証する生き方を開始することでもあったのであろう。

その人は一郎に云ひました。

「お前はも一度あのもとの世界に帰るのだ。お前はすなほない、子供だ。よくあの棘の野原で弟を棄てなかった。あの時やぶれたお前の足はいまはもうはだしで悪い剣の林を行くことができるぞ。今の心持を決して離れるな。お前の国にはこゝから沢山の人たちが行ってゐる。よく探してほんたうの道を習へ」その人は一郎の頭を撫でました。一郎はただ手を合せ眼を伏せて立ってゐたのです。

一郎は、素直な弟思いの兄であった。どんな困難にもまけない勇気を持っている。如来寿量品第十六の言葉を聞いて、ただちにその言葉に応じて自分からつぶやき、法華経の寂光土に立つ「巨きな光る人」を見つめ手を合わせもした。その一郎は、たとえ「悪い剣の林」ですら恐れることなく歩くことができ地獄から浄土に再生する功徳をつんだのである。

それゆえに、法華経の寂光土から「もとの世界」に帰り〈まこと〉の道を歩く任務を一郎は釈尊から与えられたのである。—「よく探してほんたうの道を習え」。この言葉は、釈尊の語る法華経の教えに導かれて真実の生き方を習い、法華経の〈まことの道〉を学ぶことが一郎に代表される人間の使命なのだ、ということであろう。

法華経には「生きとし生ける者の苦しみを哀れむがゆえに人間として願って生まれた」(27)ことが示されている。人間

は、人生の哀歓を体験しながら、苦しむ衆生を助け救い導くために願って生まれてきたというのである。それが「ここからたくさんの人たちが行っている」という意味である。

人はみな、〈ほんたうの道〉を習うために生きているのだ。「よく探してほんたうの道を習え」。そう語り示した釈尊の教えにしたがって、まことをあらわす法華経の道を歩き、真実の生き方を習いきわめよう――これこそ賢治がつねに求め身と心に刻みつけ語りつづけてやまなかった魂のしるしであったと思われる。

それは、あらゆる「白いすあし」との出会いを求め、その普遍的で永遠なる足跡をとどめる道を歩んで行こうとした賢治の祈願を表白するものでもあったろう。「わたくしはずゐぶんしばらくぶりで／きみたちの巨きなまっ白なすあしを見た／どんなにわたくしはきみたちの昔の足あとを／白堊系の頁岩の古い海岸にもとめただらう」（小岩井農場パート九）[28]「天のる璃の地面と知ってこゝろわななき／紐になってながれるそらの楽音／また瓔珞やあやしいうすものをつけ／移らずしかもしづかにゆききする／巨きなすあしの生物たち／遠いほのかな記憶のなかの花のかほり／それらのなかにしづかに立ったらうか」（「青森挽歌」[29]）という詠嘆は、「白いすあし」との邂逅とその世界への再生を願った祈りの心を示すものではなかろうか。

賢治はかつて、「みんな新しく構造し建築して小さいながらみんなといっしょに無上菩提の橋梁を架し、みなさまの御恩に報いやう」[30]との誓願を表明したことがある。賢治は、この誓願を「法華文学」を通して活現し、また「ほんたうの道」を探求し習いきわめて、「無上菩提の橋梁」を新たに建造し、この大地と寂光土とを直結する永遠なる四次元延長の「無上菩提の橋梁を架し」てゆく祈願の一念を、『ひかりの素足』に提示したといえよう。

この意味で、『ひかりの素足』は、雪嵐を描いた最高の文学作品のひとつにとどまるものではない。釈尊の恩徳に

報い、その仏意たる法華経を表現しながら、人間精神の闇と光を照らし、生と死を遍歴する人生の苦難と救いの意味を明らかにした〈まことの道の文学〉であり、闇の現実に回帰することによって法華経如来寿量品に結晶される寂光土の顕現をめざして生きる〈まことの道〉への志念を形象した仏教童話の秀品であると思われる。

註

（1）『校本宮澤賢治全集』第七巻（昭和四十八年、筑摩書房）・二七〇―二九三頁。以下『全集』と略す。
（2）同右。校異・四二九頁。
（3）『全集』第十一巻・四六―五四頁。
（4）同右・三八九―三九〇頁。
（5）恩田逸夫「『まこと』の文学」（草野心平編『宮澤賢治研究』（昭和三十三年、筑摩書房）所収。二五頁。
（6）『全集』第九巻・九九―一四四頁。『銀河鉄道の夜』（初期形）
（7）同右・一二三頁。
（8）同右・一四三頁。
（9）同右・一四三頁。
（10）『全集』第八巻・五頁。『風野又三郎』
（11）『全集』第十一巻・五一頁。『水仙月の四日』
（12）中村元『佛教語大辞典』下巻（昭和五十年・東京書籍）、九五七頁。中陰ともいう。「意識をもつ生きものが、死の瞬間（死有）から次の生をうける（生有）までの間の時期で、霊魂身とでもいうべき身体をもつ」と記されている。生から死へ、死から再生するまでの亡者の迷いの時期。
（13）法華経が「まこと」の本体である点については、石川教張「宮沢賢治における『まこと』の美と信仰」（『東京立正女子

短期大学紀要』第十三号）参照。

(14)『全集』第十三巻・五六頁。大正七年三月二十日前後。保阪嘉内あて封書。

(15)賢治の帰依した日蓮は法華経如来寿量品について「一念三千の法門は但法華経の本門寿量品の文の底にしづめたり」「一切経の中に此寿量品ましまさずば天に日月無く、国に大王無く、山河に珠無く、人に神（たましい）のなからんがごとくしてあるべき」（開目抄）「夫れ法華経は一代聖教の骨髄なり。自我偈は二十八品のたましひなり。三世の諸仏は寿量品を命とし、十方の菩薩も自我偈を眼目とす」（法蓮抄）と示している。

(16)賢治が「赤い経巻」と呼んで座右の書とした島地大等編『漢和対照妙法蓮華経』（大年三年八月二十八日、明治書院）所収の「法華略科」中の寿量品意では、如来寿量品を法華経一部の眼睛とし、「伝道化物の本国土は現前の娑婆を中心と為す」「常在霊鷲山我此土安穏等の句等既に耳目に親し。慧光照無量寿命無数劫の二句、古徳或は無量寿仏の光寿二徳と合説して云々す」（同書五八―六一頁）と記している。なお、ここに掲げた経訳は、石川教張『日蓮宗信行教典』（昭和五十八年、鎌倉新書）にもとづく。

(17)『全集』第十三巻・五二―五三頁。大正七年三月十四日前後、保阪嘉内あて封書。ここで賢治は「諸共に一心に他念なく如来第一義を解し奉る為に修業して参りませう」と述べ、「衆生見劫尽　大火所焼時　我此土安穏　天人常充満　園林諸堂閣種々（種）宝荘厳　諸天撃天鼓　常作諸（衆）技（伎）楽　雨曼陀羅華　散仏及大衆」と記している。

(18)『全集』第九巻・八六―八七頁。

(19)『全集』第二巻・二〇一―二〇二頁。『春と修羅』（風景とオルゴール）。

(20)『全集』第十三巻・六七頁。大正七年五月十九日付、保阪嘉内あて封書

(21)同右・二〇六頁。大正十年二月中旬。保阪嘉内あて封書。

(22)同右・二一八頁。大正十年八月十一日付、関徳彌あて封書。

(23)同右・二二六頁。大正十年七月下旬、保阪嘉内あて封書。

(24)『全集』第九巻・一四二頁。

(25)『全集』第十三巻・五五—五六頁。大正七年三月二十日前後、保阪嘉内あて封書。
(26)『全集』第七巻・八九頁。『よだかの星』
(27)島地大等編『漢和対照妙法蓮華経』二九二—二九三頁。法師品第十。「是の諸人等は、已に曽て、十万億の仏を供養し、諸仏の所に於いて、大願を成就して、衆生を愍むが故に、此の人間に生れたり」と示されている。
(28)『全集』第二巻・八三頁。
(29)同右・一六二—一六三頁。
(30)『全集』第十三巻・二三七頁。昭和元年十二月十二日付、宮澤政次郎あて封書。

矢祭町念仏和讃資料

紙谷威廣

（一）葬送儀礼としての送り念仏

民間の念仏講においては、本来の仏教が持っていた思想とは異なる要素をとりこみ、独特な行事を構成している場合が少なくない。しかしまた、そのような民間信仰化の過程を経てこそ、民衆の仏教として定着したと言える。以下に紹介する矢祭町で伝えられてきた念仏習俗もまた、人々の精神世界を表現するものであり、民俗仏教の一事例として理解することができよう、本稿では矢祭町の念仏講に伝承される和讃を紹介したい。(1)

福島県東白川郡矢祭町は福島県の最南端に位置し、南は茨城県久慈郡に接している。東に阿武隈山系、西には八溝(やみぞ)山(さん)系が迫り、中央には久慈川が貫流する山間の町である。町の総面積の約八割が山林で占められ、耕地面積は一割にも満たない。

町の西に聳える八溝山には坂東三十三観音の一つ日輪寺があり、また中世以来の八溝修験の霊場としても知られていた。このため矢祭町には廻国修行の僧侶に関する伝承や山伏の系譜をひく家など仏教の影響が強く見られる。しかし、明治初期に伊勢講を改組して神風講社が結成され、神道による葬式を行う神葬祭運動が展開された。そのため仏教寺院の衰退も一部には見られ、念仏講も神葬祭の家と仏教の家が混在する戸塚などの場合には、これまでは仏教の家の老人だけで組織されていた。

しかし本来念仏講は各集落を単位として組織されており、仏教寺院との直接の関連はなく、宗派を超えて組織される。念仏講には六十才を過ぎた位の老人が加入するものであるが、必ずしも各集落の老人全員が参加するとは限らない。念仏の詞章や唱え方などは、その集落の指導者から口授されるので、老人同士の個人的な関係が優先して参加の有無が決定されたりする。参加者の大部分が女性であり、男性の参加はほとんどない。したがって、集落の公的な組織というよりは老人たちの任意で構成される仲間という性格が強い。

しかし、葬式に念仏が行われないのは寂しいことだとされており、歯朶平では一時途絶えたが、これを復活して行っている。つまり死者の供養には欠かせないものと認識されているのである。したがって、葬式の場合や法事・年忌供養などの席では念仏講の仲間が出席して念仏を唱えてくれることが望ましいとされる。言葉をかえると死者を他界へ送るための葬送儀礼において必要とされるのが念仏なのであり、これを実行するのが念仏講なのである。(2)

日本の古代仏教では観想念仏がさかんに行われた。これは仏菩薩の相(すがた)などを心におもいうかべることであり、そのために曼荼羅や仏像をつくり寺院や邸宅に飾った。平安時代中期を過ぎると、空也や源信などによって知られる称名念仏(口称念仏)がさかんになった。これは仏菩薩の名前を唱えるという比較的容易な修行であったために、広く民

衆の間にも受容されたのである。

良忍に始まるとされる融通念仏は熱狂性をも合わせもち、時宗の開祖一遍で知られる踊り念仏へと発展した。また大念仏や六斎念仏のような芸能化し、演劇的なものへと展開したものもある。すなわちシャーマニスティックな要素をもった宗教的儀礼が、受容する民衆にとっては心を浮き立たせるものとしてうけとめられたといえる。また一方では現世的な呪術として流布したものもある。雨乞いや日乞いとして行われる天燈(道)念仏などがそれである。(3)

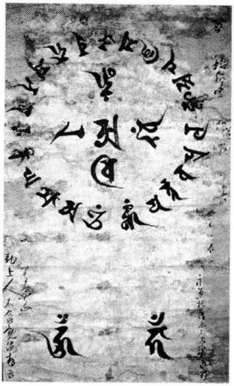
(二) 矢祭町の念仏講

しかし、最も一般的なものは死者供養としての念仏であることは言うまでもない。すなわち送り念仏と呼ばれるものである。矢祭町で行われる念仏講もまた、広く見られる送り念仏の一形態なのである。しかしながら、矢祭町の念仏信仰が死者供養として行われているとは言っても、けっして単純に理解できるものではなさそうである。内川地区の念仏には閻魔大王や地蔵菩薩の掛軸がならべられ、地獄での苦しみが明らかにされるとともに、そこからの救済を約束する阿弥陀如来の画像が中央におかれる。これは死者のための地獄抜苦の祈願が表現されていると言える。しかし、内川の念仏では他地区のそれと異なり、太鼓の伴奏が加えられる。内川の念仏の詞章は採集していないので、これ以上の言及はできないが他地区とは異なる系譜をもつものかもしれない。内川には〈オビクサマ〉比丘義観の入定伝説があり、それとの関連も考慮することができよう。

その他の地区において見られる念仏も、現在の仏教諸宗派の概念ではわりきることのできない内容をもっている。

本稿で掲げる念仏の詞章に関わることであるが、戸塚および茗荷地区などに共通して見られるのが光明真言であり、これをまず最初に唱えなければならないという意識である。さらにこれに続いて十三仏が唱えられる。十三仏とは地蔵菩薩から虚空蔵菩薩にいたる諸仏のことであり、これら諸仏の力で浄土への往生をはたそうという信仰であり、葬式から三十三回忌に至る十三仏事に対応するのである（資料一―②参照）。ところがこれに続く〈クドキ（口説）〉には、ナムアミダブツという阿弥陀如来への称名がくりかえされるのである。すなわち浄土教的な専修念仏の性格があらわれているとも言える。

　つまり一方では阿弥陀如来への専修念仏が主張されながら、また他方では諸仏への兼修が行われている。さらに光明真言と阿弥陀の称名が共存している。したがってこれらの地区では近世以降に各地に流布した民間宗教者による念仏の特徴がみられるのである。[4] 戸塚地区では念仏講のさいに木食観海の曼荼羅を飾るがこのことと無関係ではなかろうと思われる[4]（上掲写真参照）。



　木食観海は水戸羅漢寺の建立に活躍した勧進聖である。元禄十二年（一六九九）奥州岩城多賀新町に生まれ、雨乞いの加持祈祷などで民衆の支持を集めた。明和七年の羅漢寺の五百羅漢堂建立には、広範な地域での勧進活動が行われたとされており、[5] 水戸藩境を越えた矢祭町までも知られていた。旧宝坂村（矢祭町宝坂地区）名主源蔵の日記「萬覚帳」によれば、安永四年（一七七五）の観海上人の遷化が伝えられていた。[6] また明和九年（一七八一）には、宝坂村の郡蔵が羅

漢寺参詣に出掛けている。したがって、観海の曼荼羅はその勧進活動によって配付されたものと見ることができる。しかし、観海の布教における念仏の位置については知られていないので、今後の調査を待ちたい。

観海に対して、矢祭町内には比丘義観が内川にあって活躍したことが知られている。比丘義観は伝承によればオビクサマと称され、雨乞いに霊験があったとか、あるいは木食の僧侶であったとされている。また内川地区には比丘堂があり義観のミイラがあると伝えられている。内川区有の大般若経の箱には延享四年(一七四七)に義観によって購入されたことが記されており、(7) また「萬覚帳」によれば、義観は明和七年(一七七〇)曼荼羅を求めている。これは前年来の日照りによる被害をさけるためのものであったらしい。(8) また翌明和八年の八月には宝坂村の真蔵院でも曼荼羅の開帳を行っている。内川地区の念仏には太鼓が使用されているが、これは雨乞いのための「天道念仏」が「送り念仏」と習合した結果かも知れない。義観の活躍した時期は、観海のそれと重なって来る。また共に「観」の字を使用しているところから師弟関係を見ても良いのかも知れない。しかし比丘義観についても、また木食観海に関しても矢祭町での活動について知り得ることは余りにも少なすぎるのであり、結論を出すことは不可能に近い。

また天明元年(一七八一)丑八月には、善光寺如来の一行が水戸から棚倉への途中、戸塚村に泊ったことが「萬覚帳」によって知られる。棚倉の連花(家)寺において開帳が行われたが、その途中だったのである。善光寺は念仏を広めた一中心であり、(9) 矢祭町の念仏講との関連を考えることができるかも知れない。しかし直接の証拠はない。

和讃の内容にも念仏講の成立事情を物語る要素はない。和讃に出てくる固有名詞は、高野山(十)・藤沢の寺(遊行寺・十四)・播磨の国の(書)写の寺(円教寺・二十二)などの真言宗、天台宗あるいは時宗に関係した地名や寺院名が見られる。しかし、これらはいずれも説経節や浄瑠璃などの芸能でもよく知られており、葛の葉(信太妻)などの物語

が和讃に取り込まれているのと同様、近世・近代農民の一般的知識にすぎず、念仏の成立についての決定的な証拠にはならない。

ここでは念仏習俗の成立については、以上の可能性を指摘することで満足しなければならないであろう。今後、これらについての解明がなされることを待ちたい。したがって、解説では念仏の詞章のなかに表現された民衆信仰の内容の検討を行うことに主眼を置くことにする。

(三) 葬送儀礼の指針としての和讃

前述した通り、送り念仏は死者の追善供養のために行われるものである。したがって死者の葬送儀礼のなかに位置づけられる。このため念仏の詞章に野辺送りの身支度を説明したものがある(資料九)。

(前略)棺を指すなら立棺に、幕を張るなら四方張り、栗毛の差毛に鞍を掛け、幡・天蓋をさしかけて、野(辺)の送りは賑しさ、それから先は一人旅、後先見ても連れは無し、杖と笠とを連れとして、極楽浄土にお練り込む、皆様成仏南無阿弥陀。

また資料四は、十三仏を読み込んで野辺送りの葬列を説明したものである。

帰命頂礼ありがたや、珠のみ輿に乗せられて、十三仏で身を送る。不動たいまつ前に立ち、釈迦に香炉に弥陀如来、文殊菩薩が幡たてて、普賢菩薩が花の役、地蔵菩薩が道調べ、弥勒・薬師が引の網、観音・勢至がみ輿役、天蓋さげて弥陀如来、阿閦は(悪しくば)用意がおん出来て、大日如来が位牌持ち、虚空蔵菩薩に手をひかれ、金

剛杖の力にて、六道の道も迷わずに、（後略）

いわばこれらは葬式を行うさいの指針としての意味があったと言える。さらにこれらの諸仏・菩薩は明らかに死者を死後の世界、すなわち他界へと導く役割を担う者とされていたのである。

死者の有様は資料五に生き生きと描写されている。

（前略）死する消ゆるは世の習い、思えば哀し我らかな、無情の風の吹く方は、哀れこの世の世の別れ、耳は聞こえず目は見えず、舌は閉じられ物言えず、いとしかわいや妻や子も、恵みも深き父母も、いかな友も兄弟も、皆ふり捨てて死出の旅、たとい満願長者でも、どれ程宝があろうとも、死んで身につく物はない、身につくものとて南無阿弥陀、（後略）

そしてこれに続けて死者の装束が説明される。

死出の旅路の身支度は、晒し木綿の単衣にて、白の脚絆に白の足袋、四筋のわらじに身を乗せて、六文銭に数珠一つ、サンヤ袋を首に提げ、金剛杖の力にて、（後略）

したがってこれらの詞章は死者を葬る側の人々の行動を明らかにし、同時に死者が他界へ赴くための心の準備として老人たちによって唱えられていたと理解することができる。その点はこれらの念仏和讃すべてが、「みなさん　じょうぶつ　なむわみだ（皆様　成仏南無阿弥陀）」の句で終わっていることからも理解できよう。ちなみに仏教的な立場からすれば、「皆様　往生　南無阿弥陀」と言うべきであると考えられるのであり、この和讃が僧侶でなく俗人によって作られたものであると考えられる。いずれにしろ葬式の執行者と死を迎える人々のためにも和讃が必要であったと言えよう。

(四) 浄土観の表出としての和讃

さらに死を迎える人々にとっては死後の世界もまた重要な問題であったに違いない。資料七には次のような極楽浄土の有様が見られる。

帰命頂礼後生車、曳いて後生になるなれば、私も曳きます後生車、一曳き曳いては父のため、二曳き曳いては母のため、三曳き四曳きを曳いたなら、先祖譜代のためとなる、三曳き四曳きを曳くうちに、極楽浄土の真ん中に、黄金の大木お立ちあり、枝の長さや葉の広さ、八百由旬に広がりて、春の彼岸に花咲いて、秋の彼岸に実を結ぶ、この実を一食いただけば、千日千夜の食となる、この実を二食いただけば、八百余年の寿命ある、皆様成仏南無阿弥陀。

ここでは後生車は小栗判官をのせた土車のようにも聞こえる。(10) 極楽には黄金の大木があって、その実は八百年の寿命を与えるのだという。世界樹か宇宙樹のようであるが、また充分な食物に恵まれていたとは言えない農民の来世観も表現されている。

帰命頂礼十七が、朝は朝起き身を清め、我が身は地獄に落ちるとも、二親様は極楽に極楽浄土の真ん中に、黄金のお堂をお立ちあり、四方垂木に揚格子、屋根は翼の羽根で葺き、敷物などを見申せば、蓮の葉の敷物で、金の唐紙 金屏風、ここが二親住むところ、皆様成仏南無阿弥陀。(資料十六)

極楽の有様は黄金のお堂で、軽やかな羽根で葺いた屋根と蓮の葉の敷物などと黄金の家具で満たされていて、想像

されうる限りの荘厳さが描かれている。資料十八は次のとおりである。

帰命頂礼十七は、十二単衣を着飾りて、珠の襷をゆらと掛け、黄金のおしゃもじ御手に持ち、守って下さるお薬師は、どちらの米(よね)におわします。極楽浄土の御田の米、さても見事のお寺様、金銀まじりの馬場の杉、金糸小枝を見申せば、金銀珠がなり下がる。皆様成仏南無阿弥陀。

隣接する塙町には米山薬師と通称される寺があり、多くの参詣者が縁日には集まる。矢祭町からもお参りに行った。米(よね)から薬師を導き出しているのはそのためであろう。米山薬師の縁日では若者が娘と知り合う機会であった。十七才の娘が歌い込まれるのはそれと関連するのかも知れない。しかし他の和讃にも十七才の女性を対象とするものがあり、この年齢には特定の意味があったのかも知れない。女性の成人の年齢と見ることもできる。ともかくここでは、仏教寺院の荘厳さと極楽の美しさとが重ね合わされて考えられていた。

(五) 浄土への苦難の旅

しかしながら、極楽浄土へ到達するのは容易なことではないと考えられていた。極楽に至る途中の道筋での苦労について歌っている和讃の数は圧倒的に多いのである。極楽よりも地獄に対する恐れの方が民衆に受け入れられやすかったのであろう。資料七では後生車を曳いて極楽に至る。資料六では橋を渡って他界へと赴くのである。

帰命頂礼天竺の、伍萬長者のかけた橋、善ある人が渡る橋、善ある人が渡る時、七間四面に見て渡る、悪ある人が渡る時、糸より細くて渡られぬ、下を見れば大蛇住む、上を見れば鬼かさで(?)、余り心が悲しさに、向こう

河原を見申せば、お地蔵様がお立ちおり、お助けたまえやお地蔵様、助けてやるのは易けれど、汝(われ)らが娑婆にいるときは、善を尽くさぬ悪ばかり、これが此の世の見せしめだ。

他界、死後の世界に至る途中に川や滝など水の世界を渡るのは各民族に共通したモチーフである。橋を渡って死後の世界へ赴くという観念は中国にも見られるようである。ここでは、その橋が渡る死者の善悪によって、広くも狭くもなるというのである。人間の心理をうがった表現ではないだろうか。ともかく他界への道の容易でない事がのべれている。資料三では諸仏菩薩が舟で他界へと死者を送る。しかしこの場合にはその助力の故に比較的容易に他界へとたどり着く。

岩舟地蔵の蓮池は、水は無けれど舟浮かぶ、その舟白金　帆は黄金、数多の仏を皆乗せて、観音・勢至が棹さして、阿弥陀如来が舵の役、地蔵菩薩が水(みな)の役、綾と錦の幡を立て、極楽浄土の大門は、しんせい(?)づくりで開かせん、お念仏六字でさらと開く、お念仏修行はありがたい、皆様成仏南無阿弥陀。

諸仏菩薩が他界に赴く舟の導き手とされている。すでに部分的には掲げた資料四の内容に共通するものである。また資料五の最後は次のような死出の旅路が示されている。

金剛杖の力にて、行先知れずに門を出て、長い旅路をとぼとぼと、広い野原をすぐすぐと、頼むは西方弥陀如来、これを思えば皆人よ、先立つ人の追善に、お念仏申して進ずべし、あゝありがたい南無阿弥陀、唱えて参れや極楽に、皆様成仏南無阿弥陀。

いずれにしても、これらの和讃には極楽の荘厳さとその極楽へ至る道中の苦難が並大抵のものでないことを示し、同時にその道中を達成させるところの念仏の持つ霊力が歌い込まれているのである。

この苦難の旅を救ってくれるのは、諸仏菩薩の中でも地蔵菩薩と考えられていたようである。阿弥陀如来の読み込まれたものは(五・二十二)、薬師如来のあげられているのは(十八)、観音・勢至・阿弥陀・地蔵の名が入るものは(三)であるが、地蔵菩薩の名が単独で読み込まれるのは(二・六・八・十七・二十一)である。ちなみに資料十七は以下のようである。

(前略)そこで十七覚悟して、白の脚絆に白の足袋、権蔵(?)草鞋に身を乗せて、極楽浄土の細道を、後よ先よと一人旅、鬼程邪慳の者はない、十七来たから通すなよ親より先立つ不孝者、血の池地獄さ(へ)落とそうか、無情の山さ登そうか、そこで十七驚いて、お救け給えやお地蔵様、皆様成仏南無阿弥陀

また資料(二十一)の後半は次の通りである。

(前略)ゴカジョ(?)の娘が果て給う、橋(端)を渡れば中弛み、川を越えれば瀬に迷い、余り心が悲しさに、向こう河原を見申せば、お地蔵様がお立ちおり、お救け給えやお地蔵様、皆様成仏南無阿弥陀

地獄抜苦の菩薩としての役割が明確に描き出されている。未婚の若い娘や親に先立つ者の死は、ことに忌まれていたのであり、それらの罪障を消滅させるだけの霊力を地蔵菩薩に認めていたのである。念仏の効果に加えて、地蔵を始め、阿弥陀如来やそれらを含む十三仏などに頼ることで極楽浄土への往生を実現させようとしたのである。

(六) 念仏和讃の世俗性

前述した通り矢祭町の念仏講では、光明真言と十三仏が最初に唱えられる。これが基本的な死者に対する追善供養

となり、その後で和讃をクドク（口説く）、あるいはクドキを申すことができるのである。したがって和讃の部分では、儀礼的な要素よりもむしろ葬式への参加者や死者の近親者の感情面での解決が目的となっているようである。

歯朶平では、和讃は死者にふさわしいものを選ぶのだとされている。しかし、子供が死んだ場合などは悲しみも深いので、別な内容の和讃にするとも言う。いずれにしろ、和讃は死者供養とは言え、死者を取り巻く人々のためにも重要な役割を果たしている。すなわち、人々の悲しみをやわらげ、死者の心を彼岸の世界に向けさせるのである。

これは巫女の「口寄せ」と同様の役割を果たしていると考えられる。すなわち心残りのないように、死者の言葉を聞くことで他界に送り、あるいは他界の死者霊を安定させる。また、それによって人々は死者について安心することができるのである。むしろ、死者への葬送儀礼そのものが上記のような目的を持っているとも言えよう。

したがって、念仏和讃は残された者を慰めるという役割を持つのであり、人々の感情の自然な表現でもあった。そのためにも死者にふさわしい和讃、換言すれば死者とそれを取り巻く状況に応じた和讃が必要であった。

親の死に対する悲しみを表現したものとしては、資料九などがある。「帰命頂礼　朝顔の、見上げ見下ろし見た親を、死すれば長くは留め置かん（後略）」と悲しみを込めている。しかし、親が先に死ぬのは自然の秩序でもあるとされたのか、資料十六では荘厳な極楽浄土に「ここが二親住む所」と抑えた表現になっている。

むしろ自然の理に合わない子供の死が最も多く取り上げられている。資料十五は次の通りである。

帰命頂礼　十七が、珠のようなる子をなくし、泣いて口説いておるよりも、六部の支度に身をなして、六十六部を廻り行く、六十六部を廻るうち、花の寺にと廻り行く、寺の小縁に腰を掛け、花のお庭を見申せば、咲いたる花は散りもせず、蕾し花が散り落ちる、六部夫婦がそれを見て、花も我が子も皆同じ、もうと（？）なくまい口説

くまい、家さ帰るの志、皆様成仏南無阿弥陀

子供の死を悲しむ親が、六部として廻国修行に出る。花より先に蕾の散るのを見て諦めるというのである。資料十七では、さらに親のみならず夫や子を残して死ぬ若い嫁の悲しみを歌う。

帰命頂礼　十七が、極楽浄土の入り口で、声張り上げて泣いておる、そこへ地蔵様お立寄り、これこれ十七　何故泣きゃる、先立つ　二親後にして、可愛い幼子振り捨てて、罪なき夫に苦労を掛け（後略）

みなしごの悲しみを表現したのは資料十四である。「（前略）父様死んで三年忌、母様死んで今日七日、兄は他国に住まいおり、妹三つで頑是なし、お寺参りはわし一人」この七つ子（七才の娘）を慰めるのが藤沢の遊行寺の僧侶である。いずれにしろこれらの和讃に描かれるのは死者の家族の悲しみである。しかし、家族の間では様々な精神的葛藤も存在した。嫁と姑の問題が資料十九では表現されている。

帰命頂礼　嫁御殿、夢を見た見た良い夢を、判じておくれよ嫁御殿、判じてあげます母様よ、七十七ではまだ早い、八十八の祝いして、九十九年の三月の、桜の花の盛り見て、其の時空しくなりたまえ、其の時こそは留めやせぬ、そこで母様覚悟して、（後略）

一見すると嫁と姑の仲が良いように見える。だが「母様覚悟して」には、どことなく空虚なひびきが感じられる。

資料二十では次の部分がある。

黄金の小石のその上に、親に不孝の鳥が棲む、羽交いに雪霜降りかかり、足は氷に閉じ（こ）められ、早く明年春が来て、羽交いの雪霜解けたなら、富士のお山に飛び上がり、東を向いては父拝み、西を向いては母拝み、親は三途弥陀如来、親程尊い者は無い。

この「口説きを申す」のは老人、つまり死んで行く親の側なのであるから、やはり親の気持ちが込められていると見るのは偏見であろうか。ちなみに、この地域は長男の結婚後は、親夫婦が屋敷内の別棟に居住する隠居制家族の形態が分布する北限に近い。隠居免などと呼ばれる土地を耕し、竈を別にする生活も残されていた。しかしそれは余裕のある家だけであり、同一地域でも同じ棟に住む同居隠居の形態もあり、老人の精神面も屈折した感情があると推定できる。[11]それだけに、老人のみの出席する念仏講はこのような家族相互の感情が露呈される場であったのではないだろうか。

（七）念仏和讃の宗教的意義

しかし同時に、念仏講は参加する老人を家から解放する役割を果たしていたとも言えるようである。和讃のなかには娯楽性に満ちたものも少なくない。資料十一・十二・十四・十五などは、近世文芸の影響が明らかに残されているようである。

十一は葛の葉の子別が読み込まれている。信太妻は種々の芸能として流布したから、[12]他地方にも和讃として取り込まれている。子を残して去らなければならない母親の悲しみは死を前にした老婆の気持ちに重なるのであろうか。十二の「高田姫」の出典は筆者には分からないが、その趣旨は愛する者を失った若い娘が、尼となって四国や西国の霊場を巡礼するのである。夫を失った老妻の気持ちが感じられる。

両親を失って、寺参りする幼い娘や（十四）、子を失った夫婦の六部の旅（十五）などの物語世界と重ね合わされた精

神世界は、いずれも人々の涙を誘うものであったと考えられる。こういった和讃の中で、民衆にとっての仏教信仰が醸成されてきたと言っても過言ではないであろう。

資料十三や二十には、民衆の無常観が表現されている。朝顔の花の露よりも脆い人間の生命であるのに、何故後生を願わないのか。「老いも若きも嫁婿も、送り先立つ世の習い、花も紅葉も一盛り」、また「朝なに笑いし幼子も、暮れには煙となるもあり」と畳み掛けるように、繰り返して訴えている。

民衆にとっては、このような家族との生活こそ守られるべき理想であり、それが全うされ得ない現実に直面したとき宗教的認識が生まれたと言えよう。矢祭町の念仏講において継承されてきた念仏和讃には、現実の生活の中から生まれてきた仏教信仰が語られているのであり、念仏講という限られた集団の中において、稚拙とはいえ宗教的思考が営まれていたのである。

念仏和讃の構成を見ていくと、それぞれの背後には語りつくされない民衆の生活が隠されているようである。それは、これらの和讃が個人によって創作されたのではなく、念仏講に参加した人々によって、その時々の状況を踏まえて即興的に作られ、あるいは改変されてきたものであるからと考えられる。そういった意味において、このような念仏和讃こそ、人間の生き死にという冷厳な現実に対処する村落社会の対応としての仏教信仰だったのである。

註

（1） 矢祭町史編纂にともなう民俗調査中に得られたものであり、『矢祭町史　第一巻　町の歴史と人々のくらし』（同町史編さん委員会　昭和六十年三月）に収録すべきであったが、筆者の怠慢により掲載できなかった。また以下の記述では、同書及び『矢祭の民俗　昭和五十四年度宝坂地区調査中間報告』（同町史編さん委員会　昭和五十六年二月）、『人々のくらしとしき

たり　矢祭の民俗』(同町史編さん委員会　昭和五十九年三月）を参照した。

(2) 矢祭町戸塚では正月十六日、春と秋の彼岸の中日、盆の十五日という年四回の念仏講の集まりがあり、また葬式や年忌供養に随時念仏が唱えられた。

(3) 井上光貞『日本古代の国家と仏教』(岩波書店　一九七一年）中村・笠原・金岡編『アジア仏教史　日本編Ⅱ』(佼成出版社社　昭和四十九年）五来・桜井・大島・宮田編『講座日本の民俗宗教2　仏教民俗学』(弘文堂　昭和五十五年）等参照
『源蔵・郡蔵日記』(矢祭町史編さん委員会　昭和五十四年九月）によれば、念仏講とは別に、天道念仏が行われていた（七三・九四ページ）

(4) 萩原・真野編『仏教民俗学大系2　聖と民衆』(名著出版　昭和六十一年）等参照。写真によれば、この曼荼羅の中央には大日如来の報身真言を示す五つの梵字があり、その周囲を光明真言の二十三字がとりかこんでいる。

(5) 西海賢二「木食僧の系譜—観海・行道・観正—」(『聖と民衆』所収）青木直己「木食観海とその造寺活動—その経済的基盤について—」(『宗教社会史研究Ⅱ』雄山閣　昭和六十年所収）参照

(6) 『源蔵・郡蔵日記』八三ページ・二三七ページ

(7) 『矢祭町史　第一巻』九四四ページ

(8) 『源蔵・郡蔵日記』六六～七ページ・二三二～四ページ

(9) 宮島潤子「信濃の勧進聖」(『聖と民衆』所収）参照

(10) 説経節・歌舞伎等の芸能から取り入れられたのであろう。

(11) 『矢祭町史　第一巻』八九六～九〇五ページ参照。またオヤシマイと称して、親の葬式には子供全員が各々帳場を出して弔問を受ける。親子関係について考慮すべきことが多い。

(12) 昔話では「狐女房」として分類されるが、安倍晴明の出生譚として、『今昔物語集』以来の説話文学でも知られ、芸能の諸分野に見られる。

矢祭町念仏資料凡例

矢祭町念仏和讃対照表

歯朶平	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一
戸塚	A	B	C	D	E	G	I	Q	L	M	O
歯朶平	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二〇	二一	二二
戸塚			N		J	K		F	H	P	R

※歯朶平　矢祭町茗荷地区歯朶平　増子きの氏筆記による
　戸塚　矢祭町戸塚地区　　戸部イシ氏筆記による

(一) 筆記の時期は最近のものであり、ノートにボールペンで書かれていた。

(二) 戸塚の戸部イシ氏筆記によるものは、歯朶平の増子きの氏によるものより少なかったので、資料番号は後者によった。表中の戸塚のアルファベットは筆記の順序を示している。

(三) 本来念仏和讃には、特定の順序は無かったと思われる。したがって和讃の順序はここでも便宜的なものである。

(四) 念仏資料の上段は、原則として原文のまま記録したが、句読点は統一した。明らかに欠けていると考えられる文字は（　）で補った。

(五) 下段はふさわしいと思われる漢字を当てたものである。不明のものは片仮名で記したが、仏教用語などの誤りがあるかも知れない。また原文のニュアンスは崩さないように努めた。

矢祭念仏和讃

(一)—① 光明真言

おなぶきゃ
べろしゃのなか
もうだらなに
はんどうのじんばら
はらはみだやおん
(これは十回くりかいす)

オン・アボキャ
ベイロシャノウ
マカ」ボダラ・マニ
ハンドマ・ジンバラ
ハラバリタヤ・ウン

(一)—②十三仏

ふどう。しゃか
もんじ。ふうげん
じぞう。みろく
やくし。かんのん
せいじ。あみた
あそこ。だいにち
こごうぞう
おだすけたまいや　十三ぶうつう
なもうわあみだあよ
なもうわみだ
(これは十三回くりかいす事)

不動(明王)・釈迦(如来)
文殊(菩薩)・普賢(菩薩)
地蔵(菩薩)・弥勒(菩薩)
薬師(如来)・観音(菩薩)
勢至(菩薩)・阿弥陀(如来)
阿閦(如来)・大日(如来)
虚空蔵(菩薩)
お救けたまえや　十三仏
南無阿弥陀あよ
南無阿弥陀

(二)

あさまが、だけの、おじぞさま
あさの、ころもに、あさのけさ
なにが、そもうて、あまくだる
あまり、せけんが、くどうさに
おねぶつ、さそいに、あまくだる
おねぶつ、もうした、おざしきに
てんから、ふるよな、はながさく

浅間ガ岳のお地蔵様
麻の衣に　麻の袈裟
何が所望で　天下る
余り世間が　愚鈍さに(?)
お念仏誘いに天下る
お念仏申した　お座敷に
天から降るよな　花が咲く

はなだと、おもうて、おてにとる　花だと思うて　お手にとる
はなでは、ござらん、みなろくじ　花ではござらん　皆六字
これほど、とうとい、おねぶつを　是れ程尊い　お念仏を
もうさぬ、ひとこそ、みなろくじ　申さぬ人こそ　皆ロクジ（?）
おねぶつ、しぎょうは、ありがたい　お念仏修行は　ありがたい
みなさん、じょうぶつ、なむわみだ　皆様成仏　南無阿弥陀

（三）

ゆわふね、じぞうの、はすいけは　岩舟地蔵の　蓮池は
みづは、なけれど、ふねうかぶ　水は無けれど　舟浮かぶ
そのふね、しらがね、ほはこがね　その舟白金　帆は黄金
あまだの、ほどけを、みなのせで　数多の仏を　皆乗せて
かんのん、せいじが、さおさして　観音・勢至が　棹さして
あみだ、にょらいが、かちのやく　阿弥陀如来が　舵の役
じぞう、ぼさつが、みなのやく　地蔵菩薩が水の役（見張り）
あやと、にしきの、はだをたて　綾と錦の　幡をたて

ごくらく、じょうとさ、ふら〳〵と　極楽浄土さ（へ）　ふらふらと
ごくらく、じょうとの、おおもんは　極楽浄土の　大門は
しんせい、づくりで、ひらかせん　シンセイ（?）造りで　開かせん
おねぶつ、ろくじで、さらとあく　お念仏六字で　さらと開く
おねぶつ、しぎょうは、ありがたい　お念仏修行は　ありがたい
みなさん、じょうぶつ、なむわみだ　皆様成仏　南無阿弥陀

（四）

きみょう、ちょうらい、ありがたや　帰命頂礼　ありがたや
たまの、みこしに、のせられて　珠のみ輿に　乗せられて
十三、ぶつで、みをおくる　十三仏で　身を送る
ふどう、だいまつ、まいにたち　不動　松明　前にたち
しゃかに、こうろに、みたにょらい　釈迦に香炉に　弥陀如来
もんじ、ぼさつが、はだたてて　文殊菩薩が　幡立てて
ふげん、ぼさつが、はなのやく　普賢菩薩が　花の役
じぞう、ぼさつが、みちしらべ　地蔵菩薩が　道しらべ（しるべ）

みろく、やくしが、いんのつな　弥勒・薬師が　引(縁)の綱
かんのん、せいじが、みこしやく　観音・勢至が　み輿役
てんがい、さげて、みだにょらい　天蓋さげて　弥陀如来
あしくば、よういが、おんできて　阿閦は(悪しくば)　用意が　おん出来て
だいにち、にょらいが、いはいもち　大日如来が　位牌持ち
こくぞう、ぼさつに、てをひかれ　虚空蔵菩薩に　手を引かれ
こんごう、ついの、ちからにて　金剛杖の　力にて
ろくどの、みちも、まよわづに　六道の道も　迷わずに
ひでの、やまちも、よそにみて　死出の山路も　余所に見て
さんづの、かわも、とうりこす　三途の川も　通り越す
のりもの、はなさく、ごくらくに　乗り物　花咲く極楽に
みたの、じょうどに、つきにけれ　弥陀の浄土に　着きにけれ
みなさん、じょうぶつ、なむわみだ　皆様成仏　南無阿弥陀

(五)

きみょう、ちょうらい、よのなかは　帰命頂礼　世の中は
はるは、さくらに、なつはせみ　春は桜に　夏は蟬
あきなく、しかに、ふゆのゆき　秋鳴く鹿に　冬の雪
しする、きゆるは、よのならい　死する消ゆるは　世の習い
おもいば、かなし、われらかな　思えば哀し　我らかな
むじょうの、かぜの、ふくほうは　無常(情)の風の　吹く方は
あわれ、このよの、よの、わかれ　哀れ　この世の　世の別れ
みみは、きこいず、めは見いづ　耳は聞こえず　目は見えず
したは、とじられ、ものいいづ　舌は閉じられ　物言えず
いとし、かわいや、つまや子も　いとし可愛いや　妻や子も
めぐみも、ふかき、父母も　恵みも深き　父母も
いかな、友も、兄弟も　いかな友も　兄弟も
みな、ふりすてで、ひでのたび　皆ふり捨てて　死出の旅
たとい、まんがん、ちょうじゃでも　仮令　萬貫(満願)　長者でも
どれほど、たからが、あろうとも　どれ程　宝が　あろうとも
しんで、みにつく、ものはない　死んで　身に付く物はない
みにつく、ものとて、なむわみだ　身に付くものとて　南無阿弥陀

ひでの、たびじの、みしたくは　死出の旅路の　身支度は
さらし、もめんの、ひといにて　晒し木綿の　単衣にて
しろの、きゃはんに、しろのたび　白の脚絆に　白の足袋
よすじの、わらじに、みをのせで　四筋の草鞋に　身を乗せて
ろくもん、せんに、づつひとつ　六文銭に　数珠一つ
さんや、ぶくろを、くびにさげ　サンヤ袋を　首に提げ
こんごう、ついの、ちからにて　金剛杖の　力にて
ゆくさき、しれずに、かど(を)でて　行く先知れずに　門を出て
ながい、たびぢを、とぼ〱と　長い旅路を　とぼとぼと
ひろい、のはらを、すぐ〱と　広い野原を　すぐすぐと
たのむは、さいぼう、みたにょらい　頼むは西方　弥陀如来
これを、おもいば、みなひとよ　これを思えば　皆人よ
さきたつ、人の、ついぜんに　先立つ人の　追善に
おねぶつ、もうして、しんづべし　お念仏申して　進ずべし
ああ、有りがたい、なむわみだ　ああ ありがたい　南無阿弥陀
とないで、まいれや、ごくらくに　唱えて　参れや　極楽に
みなさん、じょうぶつ、なむわみだ　皆様成仏　南無阿弥陀

(六)

きみょう　ちょうらい、てんじくの　帰命頂礼　天竺の
ごまん、ちょうじゃの、かけたはし　伍萬長者の　掛けた橋
ぜんある、ひとが、わたるはし　善ある人が　渡る橋
ぜんある、ひとが、わたるとき　善ある人が　渡る時
しちけん、しめんに、みてわたる　七間四面に　見て渡る
あくある、ひとが、わたる時　悪ある人が　渡る時
いどより、ほそくて、わたられぬ　糸より細くて、渡られぬ
しだを、みれば、だいじゃすむ　下を見れば　大蛇棲む
ういを、みれば、おにかさで　上を見れば　鬼かさで(蛇で?)
あまり、こころが、かなしさに　余り心が　悲しさに
むこう、がわらを、見申せば　向こう河原を　見申せば
おじぞう、さんが、おたちおり　お地蔵様が　お立ちおり
おだすけ、たまいや、おじぞさん　お救けたまえや　お地蔵様

たすけで、やるのは、やすけれど　　救けてやるのは　易けれど
われらが、しゃばに、いるときは　　汝(われ)らが　娑婆に　いるときは
ぜんを、つくさぬ、あくばかり　　善を尽くさぬ　悪ばかり
これが、このよの、みせしめだ　　これがこの世の　見せしめだ

(七)

きみょう、ちょうらい、ごしょぐるま　　帰命頂礼　後生(御所?)車
ひいて、ごしょうに、なるなれば　　曳いて　後生に　なるなれば
わたしも、ひきます、ごしょぐるま　　私も曳きます　後生車
ひとひき、ひいては、父のため　　一曳き　曳いては　父のため
ふたひき、ひいては、母のため　　二曳き　曳いては　母のため
みひき、よひきを、ひいたなら　　三曳き　四曳きを　曳いたなら
せんぞ、ぶたいの、ためとなる　　先祖　譜代の　ためとなる
みひき、よひきを、ひくうちに　　三曳き　四曳きを　曳くうちに
ごくらく、じょうとに、ひきづけた　　極楽浄土に　曳き着けた
ごくらく、じょうとの、まんなかに　　極楽浄土の　真ん中に

こがねの、たいぼく、おたちあり　　黄金の大木　お立ちあり
いだの、ながさや、はのひろさ　　枝の長さや　葉の広さ
八百、よじんに、ひろがりて　　八百由旬に　広がりて
はるの、ひがんに、はなさいて　　春の彼岸に　花咲いて
あきの、ひがんに、みをむすぶ　　秋の彼岸に　実を結ぶ
このみを、一食、いただけば　　この実を　一食　いただけば
せんにち、せんやの、食となる　　千日千夜の　食となる
このみを、二食、いただけば　　この実を　二食　いただけば
八百、四年の、じみょうある　　八百余年の　寿命ある
みなさん、じょうぶつ、なむわみだ　　皆様成仏　南無阿弥陀

(八)

きみょう、ちょうらい、あんでらの　　帰命頂礼　庵寺の
こうの、けむりは、ほそけれど　　香の煙は　細けれど
てんに、あがりて、くもとなる　　天に上がりて　雲となる
ごしきの、くもの、そのあいだ　　五色の雲の　その間

おじぞうさんが、おたちおり　　お地蔵様が　お立ちおり
おがむと、すれば、くもかぶり　　拝むとすれば　雲かぶり
くもほど、じゃけんの、ものはない　　雲ほど　邪慳の　ものはない
くもに、じゃけんは、なけれども　　雲に　邪慳は　無けれども
わがみが、じゃけんで、おがまれぬ　　我が身が邪慳で　拝まれぬ
みなさん、じょうぶつ、なむわみだ　　皆様成仏　南無阿弥陀

（九）

きみょう、ちょうらい、あさがおの　　帰命頂礼　朝顔の
みあげ、みおろし、みたおやを　　見上げ　見下ろし　見た親を
しすれば、ながくは、とめおかん　　死すれば　長くは　留めおかん
あまだの、ひとが、あつまりて　　数多の人が　集まりて
かんを、さすなら、たてがんに　　棺を指すなら　立棺に
まくを、はるなら、しほうばり　　幕を張るなら　四方張り
くりげの、さしげに、くらをかけ　　栗毛の　差毛に　鞍を掛け
はだ、てんが(い)を、さしかけて　　幡　天蓋を　差し掛けて

のうの、おくりは、にぎわしさ　　野(辺)の送りは　賑わしさ
それから、さきは、一人たび　　それから先は　一人旅
あとさき、みても、つれはなし　　後先見ても　連れは無し
ついと、かさとを、つれとして　　杖と笠とを　連れとして
ごくらく、じょうとに、おぬりこむ　　極楽浄土に　お練り込む
みなさん、じょうぶつ、なむわみだ　　皆様成仏　南無阿弥陀

（十）

きみょう、ちょうらい、こうやさん　　帰命頂礼　高野山
なぜに、ごしょうを、ねがわんぞ　　何故に後生を　願わんぞ
ねがいは、かのう、あんらくに　　願いは叶う　安楽に
だいちな、おやでも、わがこでも　　大事な親でも　我が子でも
しすれば、ながくは、とめおかん　　死すれば　長くは　留めおかん
とかく、このよは、かりのやど　　とかく　この世は　仮の宿
あまだの、ひとが、あつまりて　　数多の人が　集まりて
かんを、さすなら、たてがんに　　棺を指すなら　立棺に

まくを、はるなら、しほうばり　　幕を張るなら　四方張り
じょうぶつ、どうに、ゆくときは　　成仏道に　行くときは
のうの、おくりは、にぎわしさ　　野(辺)の送りは　賑わしさ
それから、さきは、一人たび　　それから先は　一人旅
さんづの、かわにも、ひでのさま　　三途の川にも　死出のさま(?)
それを、こしては、ごくらくに　　それを越しては　極楽に
じょうぶつ、じょうとに、ゆくみちの　　成仏　浄土に　行く道の
あかずの、もんが、三つある　　開かずの門が　三つある
ざいさん、かねでは、あけばこそ　　財産　金では　開けばこそ
おねぶつ、ろくじで、さらとあく　　お念仏　六字で　さらと開く
みなさん、じょうぶつ、なむわみだ　　皆様成仏　南無阿弥陀

(十一)

きみょう、ちょうらい、くづのはが　　帰命頂礼　葛の葉が
いやな、しのだの、わがさとに　　嫌な　信太の　我が里に
かいらざ、なるまい、ぎりとして　　帰らざなるまい　義理として

かいる、このみは、あささいて　　帰る　この身は　朝咲いて
よつに、しおるる、あさがおの　　四つに　萎るる　朝顔の
はなちる、ほども、いとわねど　　花散る程も　厭わねど
あとに、のこりし、どうじまる　　後に残りし　童子丸
ちぶさに、こまりて、なくであろう　　乳房に困りて　泣くであろう
あいの、からかみ、そよとあけ　　間の唐紙　そよと開け
ねむりし、どうじを、ゆりおこし　　眠りし童子を　揺り起こし
これ〱、どうじよ、どうじまる　　これこれ　童子よ　童子丸
母が、かいりし、そのあとは　　母が帰りし　その後は
ちょうちょや、とんぼの、むしけらを　　蝶々や　とんぼの　虫けらを
かならづ、〱、しょくするな　　必ず　必ず　食するな
しょくせば、せじょうの、みなさんに　　食せば　世情の　皆様に
あれが、きつねの、子じゃからと　　あれが　狐の　子じゃからと
ゆわれぬように　たのむぞい　　言われぬように　頼むぞい
みなさん、じょうぶつ、なむわみだ　　皆様成仏　南無阿弥陀

（十二）

きみょう、ちょうらい、たかたひめ　　帰命頂礼　高田姫
ひめは、十七、との十九　　姫は十七　殿十九
十九の、とのが、はでさたに　　十九の殿が　果て去ったに（?）
まいの、てらいと、てらまいり　　前の寺へと　寺参り
てらの、こいんに、こしをかけ　　寺の小縁に　腰を掛け
これ〳〵、もうし、おしょうさま　　これこれ　もうし　和尚様
ここに、ひとつの、ねがいある　　ここに　一つの　願いある
おやの、ためかい、子のためか　　親のためかい　子のためか
おやは、まだある、子はもたん　　親はまだある　子は持たん
そこで、おしょうさん、ききさとり　　そこで　和尚様　聞き悟り
かみそり、てにもち、たちあがり　　髪剃り　手に持ち　立ち上がり
たけほど、のびたる、くろがみを　　丈程　伸びたる　黒髪を
すじょう、むじょうに、すりおとし　　素情　無情に　剃り落とし
よすじの、わらじに、みをのせで　　四筋の　草鞋に　身を乗せて

しこく、さいこく、まわりゆく　　四国　西国　廻り行く
しこく、さいこく、まわれども　　四国　西国　廻れども
もとの、ようなる、とのはない　　元のような　殿は無い
うちさ、かいるの、こころさし　　家さ（へ）　帰るの志

（十三）

きみょう、ちょうらい、くろたいの　　帰命頂礼　クロタイ（?）の
じんせい、わづか、五十年　　人生　わずか　五十年
はなに、たといで、あさがおの　　花に譬えて　朝顔の
つゆより、もろき、みをもちて　　露より脆き　身を持ちて
なぜに、ごしょうを、ねがわんぞ　　何故に　後生を　願わんぞ
ねがいば、かのう、あんらくに　　願えば叶う　安楽に
たとい、うきよに、ながらえて　　仮令　浮世に　永らえて
たのしい、こころに、まかせども　　楽しい心に　任せども
おいも、わかきも、よめむこも　　老いも　若きも　嫁婿も
おくり、さきたつ、よのならい　　送り　先立つ　世の習い

花も、もみぢも、ひとざかり　花も　紅葉も　一盛り
十や、十五の、つぼみばな　十や　十五の　蕾花
十九や、二十は、花ざかり　十九や　二十は　花盛り
しょたい、ざかりの、人々も　所帯盛りの　人々も
すぐに、しする、ものもあり　すぐに　死する者もあり
あさなに、わらいし、おさな子も　朝なに　笑いし　幼子も
くれには、けむりと、なるもあり　暮れには　煙となるもあり
しゃばは、ひにぢに、とうざかり　娑婆は　日に日に(?)　遠ざかり
しするは、年々、きかづいて　死するは　年々　近付いて
今日は、たにんの、そうれいし　今日は　他人の　葬礼し
あすは、わがみの、そうれ(い)ぞ　明日は　我が身の　葬礼ぞ
これを、おもいば、みな人よ　これを思えば　皆人よ
さきたつ、人の、ついぜんに　先立つ人の　追善に
おねぶつ、もうして、しんづべし　お念仏申して　進ずべし
ああ、有りがたや、あみだぶつ　ああ　有りがたや　阿弥陀仏
とないで、まいれや、ごくらくに　唱えて　参れや　極楽に
みなさん、じょうぶつ、なむわみだ　皆様成仏　南無阿弥陀

(十四)

きみょう、ちょうらい、七つ子の　帰命頂礼　七つ子の
おてら、まいりの、そうぞくは　お寺参りの　装束は
きんだん、どんすに、ひのはかま　金襴緞子に　緋の袴
ばらおの、せきだに、みをのせで　鼻緒の　雪駄に　身を乗せて
ひだりの、おんてに、こうをもち　左の御手に　香を持ち
みぎりの、おんてに、はなをもち　右の御手に　花を持ち
ふちさの、てらにと、いそがるる　藤沢の　寺にと　急がるる
いそげば、みちも、はやいもの　急げば　道も　早いもの
ふちさの、てらにと、つきにけれ　藤沢の　寺にと　着きにけれ
ぎゃくてん、はるかに、見申せば　逆天(極殿)　はるかに　見申せば
りょうしん、おやさん、いはいある　両親　親様　位牌ある
こうを、あげては、いこうする　香を上げては　回向する
花を、あげては、ほろとなき　花を上げては　ほろと泣き

そこい、おしょさん、たちよりて　　そこへ　和尚様　立ち寄りて
これ〱、七つ子、なにをする　　これこれ　七つ子　何をする
おてら、まいりは、まだ早い　　お寺参りは　まだ早い
きいて、おくれよ、おしょうさん　　聞いておくれよ　和尚様
おてら、まいりは、はやけれど　　お寺参りは　早けれど
父さん、しんで、三年き　　父様　死んで　三年忌
母さん、しんで、今日七日　　母様死んで　今日七日
兄は、たこくに、すまいおり　　兄は　他国に　住まいおり
いもうと、三つで、がんぜなし　　妹三つで　頑是なし
おてら、まいりは、わし一人　　お寺参りは　わし一人
おちる、なみだは、すいしょうの　　落ちる涙は　水晶の
づつの、きれたも、ごどくなり　　数珠の　切れたも　如くなり
みなさん、じょうぶつ、なむわみだ　　皆様成仏　南無阿弥陀

(十五)

きみょう、ちょうらい、十七が　　帰命頂礼　十七が
たまの、ようなる、子をなくし　　珠のようなる　子を無くし
ないて、くどいて、おるよりも　　泣いて　口説いて　おるよりも
ろくぶの、したくに、みをないて　　六部の　支度に　身をなして
ろくじょう、ろくぶを、まわりゆく　　六十六部を　廻り行く
ろくじょう、ろくぶを、まわるうち　　六十六部を　廻るうち
はなの、てらにと、まわりゆく　　花の寺にと　廻り行く
てらの、こいんに、こしをかけ　　寺の小縁に　腰を掛け
花の、おにはを、みもうせば　　花のお庭を　見申せば
さいたる、はなは、ちりもせづ　　咲いたる花は　散りもせず
つぼみし、はなが、ちりおちる　　蕾みし花が　散り落りる
ろくぶ、ふふが、それをみて　　六部夫婦が　それを見て
はなも、わが子も、みなおなじ　　花も　我が子も　皆同じ
もうと、なくまい、くどくまい　　もう(と)泣くまい　口説くまい
うちさ、かいるの、こころざし　　家さ　帰るの志
みなさん、じょうぶつ、なむわみだ　　皆様成仏　南無阿弥陀

（十六）

きみょう、ちょうらい、十七が　帰命頂礼　十七が
あさは、あさおき、みをきよめ　朝は　朝起き　身を清め
わがみは、そこくに、おちるとも　我が身は　地獄に　堕ちるとも
ふたおや、さまは、ごくらくに　二親様は　極楽に
ごくらく、じょうとの、まんなかに　極楽浄土の　真ん中に
こがねの、おどうを、おたちあり　黄金の　お堂を　お立ちあり
しほう、たるきに、あげごうし　四方垂木に　揚げ格子
やねは、つばさの、はねでふき　屋根は　翼の　羽根で葺き
すきもの、などを、みもうせば　敷き物などを　見申せば
はすの、はのはの、すきもので　蓮の　葉の葉の　敷き物で
きんの、からかみ、きんびょうぶ　金の唐紙　金屏風
ここが、ふたおや、すむところ　ここが二親　住む所
みなさん、じょうぶつ、なむわみだ　皆様成仏　南無阿弥陀

（一七）

きみょう、ちょうらい、十七が　帰命頂礼　十七が
ごくらく、じょうとの、入口で　極楽浄土の　入り口で
こい、はりあげて、ないておる　声張り上げて　泣いておる
そこい、じぞうさん、おたちより　そこへ地蔵様　お立ち寄り
これこれ、十七、なぜなきゃる　これこれ十七　何故泣きゃる
きいて、おくれよ、おじぞさま　聞いておくれよ　お地蔵様
さきたつ、ふたおや、あとにして　先立つ　二親　後にして
かわいい、おさなご、ふりすてて　可愛い幼子　振り捨てて
つみなき、夫に、くろをかけ　罪なき夫に　苦労を掛け
なんで、なかづに、おらりょうか　何で　泣かずに　おらりょうか
かいして、おくれよ、おじぞさま　帰しておくれよ　お地蔵様
かいすも、もとすも、やすけれど　帰すも　戻すも　易けれど
けさほど、いんまの、ちょうにのり　今朝程　閻魔の　帳に載り
いかりを、おろせよ、十七よ　錨を降ろせよ　十七よ

そこで、十七、かくごして
そこで　十七　覚悟して

しろの、きゃはんに、しろのたび
白の脚絆に　白の足袋

ごんぞ、わらじに、みをのせで
権蔵（?）草鞋に　身を乗せて

ごくらく、じょうとの、ほそみちを
極楽浄土の　細道を

あとよ、さきよと、一人たび
後よ　先よと　一人旅

おにほど、じゃけんの、ものはない
鬼程　邪慳の者はない

十七、きたから、とうすなよ
十七　来たから　通すなよ

おやより、さきたつ、ふこうもの
親より　先立つ　不孝者

ちのいけ、じごくさ、おとそうか
血の池地獄さ（へ）　落とそうか

むじょうの、やまさ、のぼそうか
無情の山さ　登そうか

そこで、十七、おどろいて
そこで　十七　驚いて

おだすけ、たまいや、おじぞさま
お救けたまえや　お地蔵様

みなさん、じょうぶつ、なむわみだ
皆様成仏　南無阿弥陀

（十八）

きみょう、ちょうらい、十七は
帰命頂礼　十七は

十二、ひといを、きかざりて、
十二単衣を　着飾りて

たまの、たすきを、ゆらとかけ
珠の襷を　ゆらと掛け

こがねの、おしゃむち、おてにもち
黄金の　お杓文字　御手に持ち

まもって、くださる、おやしく（くし）は
守って下さる　お薬師は

どちらの、よねに、おわします
どちらの米に　おわします

ごくらく、じょうとの、みたのよね
極楽浄土の　弥陀（御田）の米

さても、みごとの、おてらさま
さても　見事の　お寺様

きんぎん、まじりの、ばばのすぎ
金銀まじりの　馬場の杉

きんしん、きもどは、かづしれず
金糸着物は　数知れず

きんしん、こいだを、みもうせば
金糸小枝を　見申せば

きんぎん、たまが、なりさがる
金銀　珠が　なり下がる

みなさん、じょうぶつ、なむわみだ
皆様成仏　南無阿弥陀

（十九）

きみょう、ちょうらい、嫁子殿
帰命頂礼　嫁御殿

ゆめを、見た見た、よいゆめを
夢を　見た見た　良い夢を

はんじて、おくれよ、嫁子殿
はんじて、あげます、母様よ
七十七では、まだはやい
八十八の、祝して
九十九年の、三月の
櫻の花の、さかりみて
其の時、空しく、なりたまい
その時、こそは、とめやせぬ
そこで、母様、かくごして
四本、ばしらを、たちそろい
きんだん、どんすの、まくをはり
あやと、にしきの、はだをたて
ごくらく、じょうとに、おぬりこみ
ごくらく、じょうとの、おおもんは
おしても、ひいても、あけばこそ
おねぶつ、ろくじで、さらとあく

判じて　おくれよ　嫁御殿
判じて　あげます　母様よ
七十七では　まだ早い
八十八の　祝いして
九十九年の　三月の
桜の花の　盛り見て
其の時　空しく　なりたまえ
其の時こそは　留めやせぬ
そこで　母様　覚悟して
四本柱を　立ち揃え
金襴緞子の　幕を張り
綾と　錦の　幡を立て
極楽浄土に　お練り込み
極楽浄土の　大門は
押しても　引いても　開けばこそ
お念仏　六字で　さらと開く

おねぶつ、しぎょうは、ありがたい

お念仏修行は　ありがたい

（二十）

きみょう、ちょうらい、あさがおの
さんごく、いちの、ふちのやま
まわりて、みれば、やつがたに
やつが、たにから、おちるみづ
みだれし、かわとて、せはひとつ
みたれし、かわの、そのなかに
こがねの、こいしが、ただひとつ
こがねの、こいしの、そのういに
おやに、ふこうの、とりがすむ
はがいに、ゆきしも、ふりかかり
あしは、こうりに、とじめられ
はやく、みょうねん、春がきて
はがいの、ゆきしも、とけたなら

帰命頂礼　朝顔の
三国一の　富士の山
廻りて見れば　八つが谷
八つが谷から　落ちる水
乱れし川とて　瀬は一つ
乱れし川の　その中に
黄金の小石が　ただ一つ
黄金の小石の　その上に
親に　不孝の　鳥が棲む
羽交いに　雪霜　降りかかり
足は　氷に　閉じ(こ)められ
早く　明年　春が来て
羽交いの　雪霜　解けたなら

ふちの、おやまに、とびあがり　富士の　お山に　飛びあがり
ひがしを、むいては、父おがみ　東を向いては　父拝み
にしを、むいては、母おがみ　西を向いては　母拝み
おやは、さんづ、みたにょらい　親は三途　弥陀如来
おやほど、とうとい、ものはない　親程　尊い者は無い

（二十一）

ごかじょの、むすめの、なつゆかだ　ゴカジョの　娘の　夏浴衣
どこの、こうやで、そめたやら　何処の　紺屋で　染めたやら
ひがしの、こうやで、そめたやら　東の　紺屋で　染めたやら
にしの、こうやで、そめたやら　西の　紺屋で　染めたやら
にしも、ひがしも、きょうのぞめ　西も　東も　京の染め（今日望め）
うわまい、きあげを、みもうせば　上前　着上げを　見申せば
あまだ、にょらいが、あつまりて　数多　如来が　集まりて
つつや、らんぷで、のむもよう　数珠や　ランプ（？）で　飲む模様
したまい、きあげを、みもうせば　下前　着上げを　見申せば

ながさき、たばこの、しんきざみ　長崎　煙草の　新刻み
かたには、からまつ、ごよのまつ　肩には　唐松　五葉の松
八月、なかばの、ことなれは　八月半ばの　ことなれば
十五や、おつきが、すら〱と　十五夜　お月が　すらすらと
あがりて、てらす、もようなり　上がりて　照らす　模様なり
これほど、このんで、そめたもの　これ程好んで　染めたもの
いちども、きもせぬ、きせもせぬ　一度も着もせぬ　着せもせぬ
ごかじょの、むすめが、はでたもう　ゴカジョの娘が　果てたもう
はしを、わたれば、なかたるみ　橋を渡れば　中弛み
かわを、こいれば、せにまよい　川を越えれば　瀬に迷い
あまり、こころが、かなしさに　余り心が　悲しさに
むこう、がわらを、みもうせば　向こう河原を　見申せば
おじぞう、さんが、おたちおり　お地蔵様が　お立ちおり
おたすけ、たまいや、おじぞさま　お救けたまえや　お地蔵様
みなさん、じょうぶつ、なむわみだ　皆様成仏　南無阿弥陀

（二十二）

おねぶつ、ほんしゃを、ききたけば
お念仏　本所を　聞きたけ（れ）だ

はりまの、くりの、しゃのてら
播磨の国の　（書）写の寺

おしゃか、さまの、おすづりは
お釈迦様の　お硯は

むらさき、すずりの、きゃらのすみ
紫硯の　伽羅の墨

しかの、まきいの、そのふでて
鹿の蒔絵の　その筆で

かいたる、おきょうは、なにとなに
書いたる　お経は　何と何

こがねの　おぼんさ、のせかけて
黄金の　お盆さ　載せかけて

あみだの、まいに、さしだせば
阿弥陀の前に　差し出せば

あみだは、じょうと、おさめおく
阿弥陀は　（浄土）納め置く

みなさん、じょうぶつ、なむわみだ
皆様成仏　南無阿弥陀

【校歌発表会報告】

昭和六十一年十一月十一日、東京立正女子短期大学の校歌発表会が本学講堂にて開催された。

校歌発表会には、作詞者谷川俊太郎氏、作曲者服部克久氏をはじめ来賓、企業関係代表者、学園関係者、父母の会、同窓生、教職員および全学生、あわせて五百余名が参列し、午後一時三十分より三時三十分にわたり盛大に挙行された。

建学の精神を象徴する校歌。教育の理想を結晶した校歌。限りない未来への希望をうたいあげる校歌。その清冽な歌声が、やわらかな秋光のそそぐ講堂を包んだ。色鮮やかな花鉢の並ぶステージ。青春の笑顔。若紫色の楽譜を見つめる瞳。声と心は一つになった。校歌のしらべは静かに爽やかに流れた。講堂の前には、学生の製作した「校歌発表会」の立看板が赤、青の花飾りをつけている。黄金色に眩ゆく輝く内陣の上にも、「創立二十周年記念・東京立正女子短期大学校歌発表会」と書かれた文字が躍っていた。

校歌発表会は、司会（石川教張）の開会宣言の後、発表会の準備に取り組んできた父母の会、紫友会、校歌普及委員会および同窓会の四会を代表して、紙谷威廣氏が校歌制定の経過報告を行った（校歌の楽譜、制定経過は『紀要』第十四号参照）。

次いで、東京混声合唱団の大田道代さんの指揮と伴奏堀内由美さんにより、約二十分間にわたって懇切な歌唱指導がなされた。「歌詞の言葉を丁寧にうたってください」「藤色は皆さんの短大のシンボルカラーですから、その心でうたうように」。初めは素直ではあったが小さな声が、だんだんメリハリのきいたリズムになり、やがて大きな伸びのある歌声になってゆく。そして、全員が起立して校歌を斉唱した。

続いて挨拶にうつる。初めに庄司学長。「ゴータマ」ではじまる校歌は、新しい仏陀の純粋な姿を表現したもの」と語る。次いで司会者より谷川、服部両氏の紹介。いずれも当代の第一人者ともいうべき詩人、作曲家の業

績が紹介される。

ステージの中央に谷川氏と服部氏。まず谷川氏が「作詞した私にとって、この校歌が学生皆さんのものになってほしいと思っている」と語りかけ、作詞を朗読。感動が渦巻く。次に服部氏が軽妙な挨拶。「歌詞を頂き〝ほほえみの靭さ信じて〟という言葉を活かして作曲した。皆さんの顔を思いうかべ、やさしい女性になってほしいと願いつつ作った。いい歌ができたなあと思っている。これからお母さんになっても歌ってほしい」。それは、学生へのメッセージでもあった。

ここで、谷川、服部両氏と東京混声合唱団の大田さん、堀内さんに、学生代表からそれぞれ花束が贈呈され、会場は盛んな拍手につつまれる。

ひき続いて来賓より祝辞がおくられる。列席いただいた伊藤通明氏（静岡、日蓮宗感応寺住職のほか）来賓各位を深沢俊雄氏が一人ひとり紹介した後、初めに駒野教格理事長が「すばらしい校歌の合唱を聴かせてもらった、ありがとう。希望と幸せをめざして前進してほしい」と祝辞。次いで鈴木幸夫跡見学園短期大学学長は、「立派な校歌が制定されたことは学園全体の信頼関係の表われであり教育の理想を示す校歌の完成を心からお祝いする」と語った。小椋強三有田商事㈱社長（本学非常勤講師）は「たいへん見事な校歌ができたことは全員の喜びである」と述べた。また奥田登美子父母の会会長は、「やさしい心、楽しい心にふれた時、校歌を思い出して歌ってほしい。いつまでも校歌を歌い継いでください」と学生に語りかけた。

これに対して、全学生を代表して杉沢佳子紫友会会長が「立派な校歌を作っていただき、心から嬉しく思っています。〝ほほえみの勒さ〟を忘れることなく、校歌をうたいつづけていきたいと誓っております」とお礼の言葉を述べた。

この後、再び全員が起立して校歌斉唱。真実の言葉がロータスの香りとともに開花した。さらに、東京立正中、高校吹奏楽部生徒によって祝賀演奏が行われた。一曲、二曲、三曲、見事な演奏が心に響く。やがて発表会のフィナーレ。谷川、服部両氏をはじめとする来賓各位が学生の拍手の中を退場。校歌発表会は明るく華やかで、しかも厳かで爽やかな歌声にいつまでも包まれながら盛大裡に幕を閉じたのであった。

この校歌発表会に際しては、参列者、学生全員に発表会を主催・協賛した四会より記念品が渡された。発表会の準備および当日の運営に関しては短大全教員、父母の会役員、紫友会役員、茶道部が協同して行い、また高校教職員の協力を得た。ここに記して謝意を表する次第である。

「紀要」合評研究例会報告

「紀要」合評研究例会は、前年度に引き続き、教育の交流を趣旨として開催された。本年度は短大創立二十周年にあたり、校歌発表会等の公的事業や大学の将来を展望する諸会議で、教員は多忙な毎日を送った。そのため、講師をお願いした諸先生や参加者に多大な御迷惑をおかけすることになってしまった。本年度の例会は左記の通りで、会場はいずれも本学会議室であった。

○第六回　四月十五日

フォークナー『死の床に横たわりて』（「紀要」一〇巻）

佐藤　秀一

○第七回　六月三日

「紀要」第十四号総評

○第八回　十一月四日

スタインベック『罐詰横町』―ドックとマックの人間像―（「紀要」十一巻）

深沢　俊雄

研究例会のための充分な時間的余裕が保証されず、ディスカッションの深まりも不充分であったことが今年度の反省である。「紀要」編集委員会では、今後の研究会のあり方について、実施案を検討する予定である。

編集後記

▼「紀要」第十五号をお届けする。今年は二月から三月にかけて寒暖の差が激しい。三月になっても寒い風が吹いているが、その冷い空気の中で紅白の梅が咲き匂っている。「紀要」は今号も、春の花がほころび樹木の緑が次第に濃くなる季節にようやく刊行にこぎつけた。

▼本学は今、ちょうど寒風にさらされながら立ちつくしている状態だ。しかし、梅がひらくように、明るく華やかな女子教育の花を咲かせることが出来るにちがいない。また、さまざまな困難にぶつかっても、つねに教育と研究の成果を高めてゆく決意を忘れてはならないと思う。その意味で、「紀要」は教育・研究の内容を発表・交流する場であるだけでなく、本学が再生し発展してゆくための大事な柱石であると云わねばならない。

▼今号は、当初には論題の提出者が少く所定の枚数に達し得ないのではないかと危惧されたが、専任の田島、深沢、飯田、紙谷、石川の各先生より、エッセイと論考などが寄せられ、さらに非常勤講師で「紀要」のよき理解者でもある難波、神山両先生からは今まで「紀要」に発表された研究成果をさらに一歩前進させた示唆に富む玉稿を頂載し所載させていただいた。執筆くださった諸先生に謝意を表する次第である。

▼本年度は、桜井真理子先生と飯田宮子先生が専任教員として加わった。ともにフレッシュな方であり、「紀要」に研究の一端を発表されるよう望んでいる。飯田先生からは早速、心理学の論考をお寄せいただいた。先生は近いうちに御結婚なされるという多忙な時間を割いてのご執筆であった。桜井先生には、次号に必ず執筆いただけるものと期待している。

▼それにしても、論文の集まり具合は予想に反して（例年の通りだが）遅い。「紀要」にどしどし多くの方々が

様々な教育、研究の内容を掲載してもらいたいと思う。編集委員会が困る程の原稿が積み上げられている、と思ったら夢だったということがあった。夢はいつも夢で、現実とはならないものなのか、と考えているうちに夢からさめた。本学は創立二十周年を迎えていたのに、その記念行事がなされなかったのは残念なことであった。編集委員会のなかで二十周年記念号を出そうという企画もあったが、また夢になると思って止むなく取りやめた。二十五周年を期待しよう。

▼しかし、自分のことだけを考えないで、つねに反省しつつ協力しあえば、夢もまた現実になり得るだろう。本誌の報告にも触れた校歌発表会は、その証明であった。画期的であったこの一大イベントは、本学初まって以来の大きな教育的成果をあげたと云っても過言ではない。闇があるから光もある。夜明けは近い。二十年の成果と課題を背負いつつ、みんなが心を一つにして、二十一年目に当って新しいスタートをきらねばならない。今なお寒風は吹いている。しかし、新しい芽は萌え出て花はほころびようとしている。夢はそのままでは現実とはならないが、夢を抱くことなしに現実をよりよくすることはできない。本学の発展と充実のために力をあわせ夢を現実にしてゆく努力こそ貴いのだ。〈限りない未来をともどもに夢見よう〉と校歌にもうたわれているではないか。

〈「紀要」編集委員会〉

東京立正女子短期大学紀要　第15号

昭和62年２月20日　印刷
昭和62年２月28日　発行

編　集	東京立正女子短期大学紀要編集委員会
印刷所	株式会社　三　協　社
	〒164　東京都中野区中央4—8—9
	ＴＥＬ　03 (383) 7281 (代)
発行所	東京立正女子短期大学
	〒166　東京都杉並区堀ノ内2—41—15
	ＴＥＬ　03 (313) 5101～3

THE JOURNAL
OF
TOKYO RISSHO JUNIOR COLLEGE
FOR WOMEN

No. 15 **February 1987**

CONTENTS

Visual Information Processing
——An Approach to Fertile Imagination—— ……………………………F. Tajima 1
A Study on Factors of Effective Foreign Language Learning
——A Review of Studies on Affective Variables—— ………………M. Kamiyama 21
Steinbeck and Laughter
——On *Tortilla Flat*—— ……………………………………………T. Fukazawa 39
Burns in Culloden ……………………………………………………T. Namba 50
Moral Evaluation of Achievement Outcomes in the U. S. and Japan ………M. Iida 67
Re-turn to the Dark
——An Essay on Kenji Miyazawa's 'The Feet Bare of Light'——…K. Ishikawa 110
A Note on Group Sounds of Hymns to Buddha in Folk Religion
——From Documents Seen in Fukushima Prefecture——………………T. Kamiya 142
◇Reports (1) On the Celebration of Our College Song……………………………… 88
(2) From Regular Meeting of *THE JOURNAL* Study Group………… 85
◇Editors' Notes…………………………………………………………………… 84

Published by
Tokyo Rissho Junior College For Women

TOKYO JAPAN

ISSN 0386-7161